
賽ノ地青嵐抄

早村友裕

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

賽ノ地青嵐抄

【Nコード】

N0713Q

【作者名】

早村友裕

【あらすじ】

人間と羅刹が混在する場所、賽ノ地^{さいのち}。この地ではかつて羅刹狩りが盛んに行われていたのだが、半年前、政府の意向で羅刹族との和平が成立した。以来この地では職を失った羅刹狩りが盗賊を狩り、羅刹族は我が物顔で人里に降りてくる。これは、和平によって大きな変動が押し寄せる狭間の土地に生きる、盗賊の少年たちの物語。【コラボ侍】みてみんなのお遊びから始まった世界をなんとなく文章化してみようという試みです。気になる方はこちら <http://19.mitemin.net/userpageblog/v>

view/blog/1899/ (2011.2.22 日
タイ
トル変更しました)

はじまり

馥郁^{ふくいく}たる香りの充満する場所で、俺は昏迷に捕われる。

ねっとり絡みつくような声音が耳朵に絡まり、身動きが取れなくなってしまうのだ。

「赤は嫌いな」

おねだりをする少女のような音吐^{おんと}は、まるで芥子が根を張るように全身を這い、自由を奪っていった。

嫌いな、と言ったはずの赤の衣が視界を奪っていた。

鮮やかな赤に白抜きの花模様。

「だから」

少女の声はそこで消え、右耳に灼熱が走る。

自分の喉から迸るのは叫喚。

全身を充たしているのは、ほんの一握りの恐怖と 全身を蝕む後悔だった。

弾け飛ぶ赤の飛沫の向こうに一瞬、そんな過去の幻影を映した俺は、はっと我に返り、再び目の前の相手を見やった。

一步踏み出した足の下で、川辺の砂礫^{かまがわ}が擦れる。すぐ傍で、ここと隣の府州を隔てる賀茂川^{かまがわ}が涼やかな音色を奏でていた。先日の雨で増水していた流れは既におさまったらしい。

正午過ぎの晴天、真上から降り注ぐ陽が睨み合う俺と彼女に差していた。

ほんの数合打ち合っただけの女は、すでに息を乱している。緩く結い上げ、輪を作る花緑青^{はなろくしょう}の髪が、呼吸に合わせて頬にかかるように揺れる。しかし、額にうつすらと汗をかきながらも、細められた眼に嵌め込んだ翡翠^{ひすい}の瞳に強い意思の光を灯し、彼女は俺に細槍を

突き付けた。

「何を呆けている？」

手にした槍の先に下がる輪がぶつかり合い、しゃん、と澄んだ音が鳴った。

それは、彼女が攻撃を仕掛けるたび、まるで自分の位置を知らせるかのように響き渡るのだ。

戦いの中で居場所を知らせたところで幾許の枷にもならない、避けられるものなら避けてみる　そう言わんばかりの彼女の真っ直ぐな攻撃は、確かに驚くほど疾^{ハヤ}かった。

めんどくせえ。

俺は思わず嘆息した。

つい今、大気までも裂くような鋭い突きに掠め取られた右大腿の傷がずきりと痛む。

「めんどいことは全部、あいつに押し付けてきたつもりだったんだが」

十数名の隊士と一人の女。こちらの方が面倒な相手だったことに、どうして気づこうか。

俺よりは少し年上だろう、全身から近寄りがたい雰囲気と不機嫌さを余すところなく発散しているこの小柄な女が驚くほど鋭い殺気を放つなどと。

随分前に失ってしまった右目の側、見えぬ方向に刀を振り遅れた一瞬、大腿を挟まれようなどとは。

右目を失った俺が、右からの攻撃に弱いのは道理とはいえ、女の腕を認めざるを得ない。

「面倒だと？　それは此方の台詞だ。何故私が下賤な盗賊退治などに赴かねばならんのだ」

盗賊退治、と俺に喧嘩を吹っ掛けてきたこの女性の名も素性も知らないが、話しぶりからするにどうやら北俱盧洲^{ほっきるしゅう}政府から派遣されてきた役人なのだろう。

それもこの戦鬪力。政府お抱えの『元』羅刹狩り一味と見て間違

いない。先の大戦が終幕するまでは害なす羅刹を根こそぎ刈り取っていたはずだ　そう、今から約半年前に和平が成立するまでは。細めた眼をますます吊り上げ、目の前に立ち塞がる女は腹の底から絞り出すように漏らした。

「隻眼隻腕、青髪の盗賊……夜叉のように赤い眼なんぞしやがって、気色悪い。反吐が出る」

「俺だつて好きじゃねえよ」

赤は嫌いだ。

特に、酷く鮮やかな猩々^{しじうじしう}緋のような色は。

俺は、自らの纏う衣の色を棚にあげ、左手の刀を軽く振った。

右足の傷は深くない。ただ、あまり無理をすると後で師匠の孫に叱られてしまうだろう。

医療を学んだ忍のくせに、血を見て慌てる少女を思い出し、怪我をした右足を庇って重心を左に移した。

それを戦闘開始の合図と受け取ったのだろう。

目の前の女の空気が一変した。

しゃん、と澄んだ音が鳴る。

「死に曝せ」

次の瞬間、お手本のような摺り足で、関節の力を無駄なく使い、ほぼ一足で間合いに踏み込んだ。

身体の大きさに似合わぬその遠い間合いは、細槍と相性がよく、瞬^{またた}く間に切っ先が眼前に迫ってくる。

退くのは論外。

突進してくる力を斜め後ろへと受け流すように、左へ一歩踏み出した。

すぐ右を槍が通り過ぎている気配がある。

見えない、が分かる。

その気配を頼りに、馬鹿正直に突っ込んでくる女の顔面に向かつて逆手に引いた刀の柄を振り下ろした。

そこに、慈悲はない。

自らの突進力で額を割られた女の死体がそこに転がるはずだったところだ。

女の口元が緩んだ。

そんな攻撃は読めている、とても言いたげに。

刹那の視線に、柄になく苛立つ。

完全に予測されていた攻撃は寸でのところでかわされ、槍の柄が目の前に迫っていた。

反射的に、庇っていた右足に力を込めた。

同時に刀を脇に収める勢いで、左足を投げ出し、槍の柄を横から蹴り飛ばす。

かなり強引な回避。

しかし、しっかりと武器を握っていたのが災いしたのか、反動で重心の浮いた女が体勢を立て直す前に、正面へと回りこむ。

驚いた女の顔を下から見上げるようにして微笑^{クラ}う。

「遅い」

『疾^{ハヤ}さ』を武器に戦う女にとって、最も屈辱的な言葉を吐き、下から顎を蹴りあげた。

どれだけ技を磨こうとも所詮は女の身、力を入れず振った蹴りでも、軽々と跳んだ。

花緑青の髪を乱して地面に伸びた女に止めを刺す趣味はない。

鞘のない刀を河原の砂地に突き刺し、他の敵を片付けた相棒が戻ってくるのを待つことにする。

緩やかな川の音だけが響き、辺りは再び静寂に包まれた。

が、静かだったのはほんの一時。

「青ちゃん！ さっきのヤツら、おれが全部倒してきたよ！ 全員弱^{あめいろ}っちゃったけど」

大音量と共に相棒が姿を現した。

頭のとっぺん近くで結んだ濃い飴^{あめいろ}色の髪がふよふよと風に揺れ、

笑つと八重歯が覗く。地味な色の着物の上に酷く派手な向日葵色の上着。並べば見下ろす位置にある身長に、全く似合わない長刀なががたなを背に負っていた。

もともと小柄な上に眉のかなり上で揺れる前髪の所為で余計に幼く見える。

最も、この短時間で十数名の隊士を残らず倒してきたのだから、實力は疑うべくもないのだが。

何より俺は、欠けた我が身を以てその強さを体感していた。

褒めて褒めて、とねだる視線に負けてぽん、と頭に手を置いてやると、満足したのか嬉しそうに笑った。

と、そこでもうやく河原に伸びている女に気づいた相棒は、隣にしゃがみこんでつんつん、とつついた。

「死んでない」

「放つとけ」

行くぞ、と促し、砂地に差していた刀を引き抜いた。

抜き身の刀を手にそのまま河に沿って歩き始めた俺に、半分駆け足の相棒が追い付いてくる。

「なあなあ、青ちゃん。さっきのさ、何だったんだろ。いつになく大勢だったしさあ」

「んあ？ 盗賊狩りだろ、言ってなかったか？」

「聞く前にやった」

「そか」

非常に面倒な事だが、俺たちが好む好まざるに関わらず、喧嘩を売ってくるヤツらは多い。

売られた喧嘩を買い取って、結果的に自分たちが派手な動きをしている事は重々承知している。敵が多いのも承知しているから、一つ一つの諍いさかいに興味もない。

連鎖の切欠が果たして何だったか、そのはじまりなど既に記憶の彼方へと捨て去ってしまった。

だから、元羅刹狩りが盗賊である俺たちを襲った理由にも興味が

ない。

とりあえず、邪魔された昼寝の場所をどこにするか、それが一番の問題だった。

此処は、大陸の北に位置する北俱盧洲ほっくろしゅうの果て、通称『賽ノ地さいのち』。
狭間に存在する場所。

人間と羅刹の。

俺たちの住む北俱盧洲ほっくろしゅうと、隣の西牛貨洲さいごうしゅうの。
ヒトとヒトならざるモノが混在する土地。

此処に救いなど在りはせぬ。

個々の救いなど在りはせぬ。

求めるな、さすれば命だけは奪わない。

求めるならば、その代償に命を賭ける。

賭けた命と『何か』を失う、狭間の土地。

ここは、極楽浄土の成れの果て

第一話

今、すぐ傍を流れる川を、この付近では賀茂川かもがわと呼んでいる。

賀茂川を挟んで向かい側は、もう北俱盧洲ほっきるしゅうではなく、隣の府州が治める土地だ。もっとも、対岸が見えないほどに幅のある河を挟んだ交流はほとんどない。

だから、賽ノ地さいのちの果てに位置する河原、『賽ノ河原さいのかわら』と呼ばれることも多いこの場所に人影は少ない。

いるのはヒトならざるモノか、ヒトならざるモノを狩るヒトか、俺たちのように罫ねぐいを持たない盗賊くらい。

だから、昼寝をするには丁度いい場所のはずだったのだ。

「盗賊狩り、か……」

まさか真つ昼間から政府直属の盗賊狩りに遭おうとは。

これまで、政府が大々的に盗賊はひを狩りに出た事はない。狭間の土地には俺たちのような逸れ者も蔓延はひりやすい。その所為だろう、付近に盗賊と呼ばれる浮草は非常に多かった。ただ、賊と言うほどに大げさなものでもなく、いくらか名の知れた害なす盗賊団が二・三存在するものの、あとは俺たちのようにちよくちよく食料を拝借する程度の小物ばかりだった。

そのため、盗賊同士の争いは絶えないが、政府が出張って取り締まろうなどと言う動きはこれまでに等しかった。

多少気にはなるが、面倒な事にならない為には放っておくのが得策だろう。

と、そこまでぼんやりと考えて、後ろを歩く相棒が珍しく静かな事に気づいた。

「おい、でこぱち」

振り返れば、遅れて歩いていた筈の相棒ひいばちが何時の間にもやら姿を消している。

「……」

刀を拾って進んだほんの数十歩のうちに消えてしまったらしい。
それなりに長い付き合いになるのだが、相変わらずあいつの行動は読めない。

突然現れたり、突然姿を消したり、何しろ行動が速い。あちらこちらを駆けまわっては何かを見つけて一人ではしゃぐ。要らぬ喧嘩を売ると売られるの、落ちている物を拾うのが得意で、厄介事を持ち込んでくるのが生業なりわいではないだろうかところが勘繰ってしまふほどだ。

まあ、いい。これで静かになる。

なんだかんだと逐一やかましいでこばちが姿を消して、これ幸いと、俺は短い草の生えそろうた辺りを選び、手にしていた刀を突き刺して土手に寝転んだ。

一羽の鳶が駆ける空を見上げる。紺碧の空を白い雲が染め抜いていた。春から夏に向かう季節、梅雨入り間近の空気は動けば汗ばむ程度の陽気。さらさらと流れる賀茂川の音も手伝って、よく眠れそうだ。

左腕に巻いていた包帯を右足の怪我に巻きなおし、うつらうつらとし始める。

まどろ微睡みに蕩ける鳶の声が心地よい。

それなのに。

「青ちゃんっ」

耳元で大音量の目覚まし。

ほんの少しでいいから俺に平穏な時間をくれ。

という言外の感情は伝わるはずもない。

薄く目を開けば見慣れた顔が見えたので、そのまま瞼を落とす。
どうやらそれが不満だったようで、再び大音量。

「あーおーちゃん！」

ああもっ、これ以上放置する方がめんどくせえ。

「何だよ」

ゆるりと半分目を開けた。

うるさいから向こうへ行け、という言葉外の感情は伝わらない。

ゆっくりと上体を起こした俺の耳には、何故か相棒ものとは違う
甲高い子供の声が飛び込んできた。

「放せよ！ 放せてこのチビ！」

ああ、まただ……またこいつは、厄介事を運び込んできたに違いない。

このまま目を閉じてもう一度眠りに落ちたいが、そもいかないだろう。

放っておけばもつと面倒な事になるのは目に見えている。

満面の笑みを湛えたでこぼちが抱えている物体が、甲高い声で抵抗する10にも満たない子供だという事を考えれば、この状況の理由など一つしかありはしないのだ。手足をばたつかせていることからも、確実に子供の方が望んででこぼちについてきたわけじゃないのだって分かってる。

問うたところで返答ももう分かりきっている。

それでも、先ほどと同じ、褒めて褒めて、とねだる視線に負けて、俺は答えの分かっている問いを口にしてしまった。

どうにも俺はこいつに甘い。

「何だそれ、どうした」

「拾った！」

やっぱりか！

予想通りの返答に、俺は大きくため息をついた。

さすがに生き物を拾ってきたのは初めてだ。

さて、どうするか。

このまま放置すれば、ただでさえ喧^{やか}しいでこぼちと、抵抗する子供の甲高い声の相乗効果で到底昼寝などしている場合ではなくなるだろう。

子供の目つきは幼いながらも鋭く、意思の強そうな藤紫^{ふじむらな}の瞳^めがこちらを睨みつけていた。瞳と同じ色をした着物から覗く手脚は細く、

栄養状態が悪いのはすぐに分かった。

その上、よく見れば、子供のぼさばさに伸ばした金髪の間からは短い角が覗いている。

紛れもない、鬼の子だ。

人外決定。

面倒二倍。

俺は即答した。

「落ちてた場所に返してこい」

「やだ」

「いいから返してこい」

「やだよ」

「捨てて来いって」

「やあだっ」

不毛な言い争いをしている間も、でこぱちが抱えた子供は何とか逃れようと必死に暴れている。

甲高い声が耳に刺さるのが、不快極まりない。

ああもう、めんどくせえ！

と、その時、俺の頭の中にはふいに名案が浮かんた。

そうだ、面倒なものは他のヤツに押し付けてしまえばいいんだ。

もう三月ほど顔を出していないから頃合い。

すべて、あいつの元に置き捨ててしまおう。右足の怪我もついでに診て貰う事にしよう。

面倒なジジイもついてくるが、その辺は我慢だ。

「よし、でこぱち、それ持ったままでいいからついてこい」

「え？ 何？ どこ行くの？」

「きさらんどこ」

俺たちはその足で賽ノ地の町外れ、山の裾野の草庵へと向かった。賽ノ河原より北にある町を左手に避けながら、道と呼べるものは

ない荒れ地を往く間、一切ヒトには出会わなかった。この辺りには俺たちのようなはぐれの盗賊が多いから、一人や二人喧嘩を吹っ掛けてきてもおかしくないのだが。

擬態とは無縁、極彩色の着物を翻して歩く俺たちが目立たぬはずはない。

さらに大声を出す子供まで連れて、見つけてくれと主張しているというのに。

珍しい事もあるものだ。

でこぼちの背丈に近いほどのぼうぼう草の間を歩きながら、ぼんやりとそんな事を思う。

「何処行くだよ。おい、お前ら、返事しろよっ！」

生意気な口調に答えてやる義理はない。

完全に無視して歩く俺たちに、子供も無駄を悟ったのだろう。目的地に到着する頃には、無為に喚き疲れたのか、大人しくなっていた。

荒れ地を往く事およそ半刻、杉の木に囲まれた茅葺屋根の草庵に俺たちは帰ってきた。

冬には雪も降るこの土地で暮らすには少々頼りない造りの佇まいは、老人と若い女性とが二人で住むには丁度良い広さ。俺とでこぼちの師匠が孫と二人が暮らしている。相棒と二人浮草となつてから、ここへ来ることは最近ではほとんどなくなっていたが、訪れても当たり前のように迎え入れて貰えるのはこの場所だけだった。

案の定、庵の前の井戸で水組みをしていた少女が俺たちの姿を見つけてぱつと顔を上げた。

「あ、青ちゃん！ ハチも、お帰り！」

手にしていた桶を地面に置き、紅掛花色の髪を揺らして手を振つ

たのは、この草庵の主の孫、きさら。

草庵の主と違い、俺たちを快く迎え入れてくれる。

「二月？ 三月ぶりかな？ ちゃんとご飯食べてる？」

しかし、きさらが笑顔を見せていたのはそこまでだった。

俺の右足に巻かれた包帯を見て、きさらは息を呑んだ。

「青ちゃん、怪我してる！」

「ああ、さっきな……後で診てくれるか？」

「駄目！ 今！ 今すぐ！」

抜き身の刀を手にした左手首を掴まれた。

仕方なく彼女を傷つけぬよう、刃の向きを変える。

しかしながら、ずるずると数歩、引つ張られたところで、きさらはぴたりと足を止めた。

「……」

でこぱちが抱えている物体にようやく意識が回ったらしい。

きさらの眉が跳ね上がった。

まあ、だいたい予想された事態だ。

最初の雷が堕ちる前に、俺は掴まれていた左手を引き抜く。

そして、近くの杉にもたれかかって様子を観察することにした。

「ハチの馬鹿^{バカ}っ！」

「なんでー？」

「そんな簡単に生き物を自分の好きにできると思っちゃだめなんだよ？」

叫び疲れてぐったりしていた子供をきさらが保護し、でこぱちはその場で正座。

完全なる説教体制だ。

「だって落ちてたんだから拾ったっていいじゃん」

唇を尖らせて上目遣いに不平を言うでこぱちに、きさらは大きく首を横に振った。

「落ちてるわけではないの。命あるものを落ちてたなんて言っちゃいけない」

「でもそこに在ったんだから同じじゃん」

「違うよ。命あるものは違う。刀やお茶碗と一緒にしないの。相手の意思を無視して勝手に連れまわしたりしちゃう駄目。ハチだって、

突然青ちゃんの傍から連れ去られたら嫌でしょう？」

「おれはそんな事させないよ。そんなヤツ、殺^ヤつちまえばいいんだ！」

ふんぞり返るでこばちの額を、きさらは軽く指で弾いた。

「みんなが八チみたいに強いわけじゃないわ。抵抗できなかったら、どうするの？」

穏やかな口調でも、きさらの言葉は厳しかった。

「敵わない相手だったらどうなの？ 手足を獲られて、命を獲られたら、どうするの？」

「それは」

「右腕と右目のない青ちゃんの左目を塞いで、左手を使えなくして連れ去るヒトがいたらどうなの？」

「それは卑怯だっ！」

「そうでしょう？」

きさらは背後に庇った子供の頭をそつと撫でた。

震えていた子供は、優しい手にはつとしてきさらを見上げる。

にこりと微笑むきさらに安心したのか、腰のあたりにぎゅっと抱きついた。

「八チのしている事も卑怯じゃない。この子の何処に、八チに抵抗する力があるっていうの？」

諭すような言葉に、でこばちは押し黙った。

「分かるでしょう？ 命あるものに干渉するのは、落ちている石を拾って持つてくるのとは違うの。たとえば、この子が望んで私の元に来たいと言ったのなら、八チが此処に連れてくる理由はある。でも、そうじゃなかったんでしょ？ 八チは勝手にこの子をここに『連れてきた』んでしょ？」

手足の細い鬼の子はますます強くきさらにしがみついた。

鬼や化け狐、鎌鼬^{かまいたち}など、あやかしと呼ばれるモノの子は希少だ。

特に、鬼のように強い力を持つモノは売り買いが盛んに行われる。でこばちは拾ってきた、と言っていたが、あの幼さで親に庇護され

ていないということは、落ちていた場所などだいたい想像がつく。
鬼の子は半分きさらに隠れるようにして相変わらず俺たちを睨んでいたが、最初よりは随分と落ち付いた様子だった。

「命あるものにはね、それだけで自由に生きる権利があるの。それを奪う事は誰にも出来ない。八チにも奪う権利はない。理由もなく奪われていい自由はないよ」

でこばちも、自分のやったことがきさらに非難されるべき事だったのだとようやく理解したのか、眉を八の字にして黙り込んだ。

そんなでこばちの様子に、ようやくきさらは表情を緩めた。

「これは私の我儘かもしれないわ。でも、八チには卑怯な事しないでほしいの」

「……分かった」

「ありがとう」

お説教終了。

正座から解放されたでこばちはそのまま地面に寝転がった。
きさらの着物の裾を、鬼の子がちよいちよい、と引っ張る。
小さな声でぼそりと呟きながら。

「いや……じゃ、ないよ」

「なあに？」

しゃがんで鬼の子と目線を合わせたきさらは、小首を傾げた。
そんなきさらから目を逸らしながら、子鬼はぼそぼそと言った。

「あのチビはキライだし、ここに来るつもりはなかったけど……ここにいてやってもいい」

ああ、きさらが情に絆ほだされているのが手に取るように分かる。

「じゃあ、あなたもここに住む？」

そう問うと、鬼の子はこくこくと頷いた。

望まぬとは言え、この場所を追いたてれば行き場がないのも事実。
子鬼の小さな手を握り、反対の手で先ほどまで井戸の水を汲んでいた桶を抱えあげ、きさらは俺たちに声をかけた。

「青ちゃんの治療もすぐにするから、中で待ってて。二人とも……」

と、三人とも、おなかすいてるでしょう？ ご飯の支度するわ」

鬼の子の表情がぱつと綻んだ。

「ご飯と言ふ言葉に、地面に大の字に寝転がったまま歓声をあげたでこばちは、あ、そうそう、ときさらを呼びとめた。

「あのさー、さっきから思ってたんだけどさ」

「何？」

鬼の子の手を引いたきさらが首を傾げる。

するとでこばちは腿の半分くらいまでしか隠していないきさらの着物を指さして言った。

「その着物短くない？」

「短……って、まさか八チっ」

慌ててきさらが着物の裾を抑えるが、遅い。

「うん。さっきからずっと中見えてたんだだけ」

でこばちの言葉は最後まで続かなかった。

顔を真っ赤にしたきさらの膝蹴りが、でこばちの顎を直撃したから。

第二話

裏でお野菜採ってくるから先に入って、と鬼の子を連れて去っていったきさらを見送った。

鬼の子はようやく警戒をといたようで、きさらに手を引かれて戸惑いながらもはにかんでいる。きさらもそれを優しい表情で見下ろしていた。

まるで本当の母子おやこのように。

何故だろう、その光景に苛々する。

いや、違う。

そわそわする。

心の奥底がざわめいて、落ち付かない。

鮮やかな緋色をした何かを思い出しそうになる。

「青ちゃん、行こうよー」

でこぱちが呼ぶ声ではっとした。

俺はいま、いったい何を思い出そうとしたんだろう？

深く考える間もなく、草庵の入口の引き戸に手をかけた。そしてほんの少し手を引いて戸を開ける、ただそれだけの事に一瞬、躊躇したのには仕方がない。

中には、三月みつきぶりに会う師匠が待っているはずなのだから。

「ジジ様 つ。ただいま！」

でこぱちの大声に返答なし。

昼だと言うのに薄暗くひんやりした空気を湛えた草庵に、二人で足を踏み入れた。

心配はない。

が、確実にどこかにいるはずだ。

警戒を解かずに半歩、進める。

「青ちゃん、そっち」

背に負った刀の柄に手をかけたでこばちが音もなく土間の奥へと移動する。

反対側、手前の壁に沿うように歩を進める俺も、手にした刀を強く握り直した。

典型的先攻型のでこばちは、姿の見えぬ相手にうずうずしているようだ。

しびれを切らして、居場所のわからぬ敵に向かって勘で攻撃を仕掛け始める前に視認せねば。それこそ敵の思うつば。

「でこばち」

「なに？」

「待て」

でこばちはぴたりと動きを止めた。

言葉通り、俺がいいというまでは動かないはずだ。

土間から囲炉裏端への木戸が中途半端に開かれているのは、誘われているのか、それとも罠か。

開け放たれた木戸を挟んで、でこばちがいるのは竈かまどがある裏口側、入り口側の俺の側には縁側に続く引き戸がある。いつもジジイは囲炉裏の傍にいるはずだが、姿が見当たらない。囲炉裏の奥には上の間と下の間の二つがあるが、どちらかに潜んでいるのか。

草庵の構成を頭の中に描き、何通りかの道筋を組み立てる。

薄暗い空間に息を潜める。

しかし、それは一瞬だった。

次の瞬間にはがらら、と大きな音がしてでこばちの後ろの裏口の扉が乱暴に開かれた。

逆光の中に人影。

しまった、部屋の中を疑っていたが、まさか外とは！

「避ける！」

声に反応して地を蹴ったでこばちだったが、一瞬遅い。

後ろから伸びてきた腕が素早く首根に回った。

「くそっ」

やられた。

完全に俺の読み違いだ。

しかしこれは好機。

俺と同じ隻腕の師匠は、でこばちの首根を抑えた時点で反撃の手がない。

敵はでこばちの首を抱えたまま囲炉裏端へと跳んだ。

俺はそれを追って迷わず部屋に上がり込む。

ところが。

でこばちを拘束していた筈の師匠の姿がふっとかき消える。

同時に、頭上から殺気。

しまった

でこばちを標的にした、と見せかけたのは罠。おとり

狙いは最初から俺の方だ。

次の瞬間には、地面に伏せられていた。

胸と側頭部をしこたま床に打ち付け、息がとまる。

上にのしかかっているのはとても老人とは思えぬ重量だった。

「部屋に入る時は履物を脱げと教えたはずだ」

そして頭上からはしゃがれ声が降ってきた。

片腕で息の根を止められかけたでこばちも、近くの床の上で盛大に咳き込んでいる。

押さえつけてきた隻腕の老人を見上げ、俺はため息と共に挨拶を吐いた。

「ただ今戻りました……」

「帰ってきた事なんざ見りゃ分かる」

にべもない返答をしたのは、きさらの祖父で俺たちの師匠でもあるジジイだった。

俺たちは事あるごとにこのジジイに挑んでいるのだが、結果は芳しくない。

奇妙斎と名乗るこのジジイがいったい何者なのか。かつて、名うての剣客だったと言うが、詳しい事は分からない。右腕を失い、大

きな顎傷を持つこの偏屈ジジイがいったいどんな人生を送ってきたのか、興味がない事もなかったが、長い話になりそうなので少々面倒だった。

ただ分かるのは、今の俺たちでは太刀打ちできないという事だけ。床に伏せた俺とでこばちを尻目に、ジジイは土間の隅にある瓶の水で手を洗い始めた。

「なんでジジ様、手洗ってるの？」

でこばちが首を傾げる。

「あ？ 廁へ行っている間にお前らが入って来よったからな」

「俺たちを出し抜く為に外にいたわけじゃ」

中途半端に木戸が開いていたのも、罨ではなく慌てて廁へ向かったせいだったのか。

「えーっ、ちよっと待ってよ、ジジ様！ おれのこと掴む前にちゃんと手え洗ったの？！ もしかして手洗ってないの？！」

「だからいま洗つとるだろうが」

「うわっ。汚い、ジジ様、汚いー！」

ジジイが廁に行った後洗ってない手で……

俺は黙って赤の上着を脱いだ。

後でさらに洗ってもらおう。

日が落ちる頃、囲炉裏端には暖かい食事が並んだ。

「竹千代くん、おいしい？」

幼い鬼の子の名は、竹千代というらしい。

しっかりとときさらの横に陣取って、得体の知れないジジイと俺たちに警戒の視線を配っている。

このジジイは、竹千代をここに置く事を承諾したのだろうか。

まあ、明日ここを発つ俺たちには関係ない。

「おい、青」

ぼりぼり漬物をかじるジジイが俺を呼ぶ。

「なんスか」

「その足、誰にやられた」

「羅刹狩りの女に」

先ほどきさらが簡単に治療した足は、やはりそれほど深い傷ではなかった。きさらの持つ薬を塗って、一週間も大人しくしていれば治るだろう。

「羅刹狩りが盗賊を狩るのか？」

「政府の詳しい事情は知りませんよ」

「ずずず、とみそ汁を啜りながら答えると、ジジイは鼻を鳴らした。でも、青ちゃんが怪我するのなんて久しぶりだね」

確かにそうかもしれない。

喧嘩を売られる回数とはとても多く、そのすべてを撃退するだけの力には手に入れている。この界隈で、俺たちに敵う相手は数えるほどしかいなくなっていた。

無論、今日のように政府が抱える組織の人間と、時折賽ノ地に現れる、ヒトでないモノを除けばの話だが。

「ぱちぱち、と囲炉裏の火が爆ぜる。」

食べ終わったららしい竹千代がごちそうさま、と手を合わせると、茶碗を重ね、土間の隅の水場へ向かった。いくつも重ねてかちやかちやと鳴る茶碗を今にも落としそうだ。

さりげなくきさらが手助けに向かう。

「ありがとう、自分でお片づけしてくれるのね」

「べ、別に……いつもやってた」

「そうなの？ 偉いね」

ああ、まただ。

この光景をみると、心の端がちりりと焦げる。

優しい表情で子を見る視線に、胸の奥が焦がれる。

同時に、心の奥底から湧き上がってくる、この焦燥感はいったい何だろう。

ああ、そわそわする。

落ち付かない。

「青ちゃんもお茶碗持つてきて。一緒に洗うから」

ぼんやりと返答しないでいると、横からさつと手が伸びてきて、空の茶碗を奪っていった。

「青ちゃんの分もおれと一緒に片づけとくよ！」

「ハチ、ありがとう」

暖かい食事と、迎えてくれる相手と、背を預けられる相棒。

満足できるモノを持ちながら、なぜ、俺はこれほどに『何か』を怖れているのだろう。

物心つく前に穿った、右耳の傷が痛む。

猩々^{しょうじょう}緋^ひで染め上げた過去に、俺はいつたい何の怖れを抱いているんだろう。

過去に思いを馳せようとすると、それまでの焦燥は消え去り、恐ろしいほどの虚脱感が全身を包み込んだ。残るのは一握りの恐怖と、後悔。

理解のできぬ感情が、澱のように胸底に溜まり込み、面倒だと口に出すことさえも面倒だった。

まるで何かを見透かすようにじいっとこちらを見ていた、ジジイの視線に居心地の悪さを覚えていた。

その日から、俺とでこぼちは草庵に寝泊まりするようになった。

特に意味はない。

きさらやジジイが俺たちを追い出すはずもなく、でこぼちは俺が離れようと言わない限りここににいるだろう。何より、自分の中に生まれてしまった茫^{ぼう}とした情動を落ちつけるには、此処にいるしかないと思っていた。

朝起きれば、きさらの号令で働きます。

俺とでこぼちは裏の畑の水やり。昨日拾ってきた鬼の子竹千代も、きさらについて朝食の支度を手伝い始めた。それから薪割り、水汲

み、裏で飼っている鶏の世話。

洗濯も終わったのだろ、軒下には、昨日頼んでおいた通り、いつも身につけている赤の着物がきちんとつるされていた。

日の出からすぐに働き始め、気がつけば汗ばむほどの陽気になっている。

割り当てられた仕事を一通り終え、井戸の水で喉をうるおしていると、家の方からきさらの呼ぶ声がした。

「青ちゃん、ハチ。買い物に行きたいの。一緒に来てくれる？」

賽ノ地にも、そこそ栄えた町が存在する。

以前は頹廃しきっていたのだが、数年前に今の町奉行になってからというものの、少しずつこの地も発展しているようだった。果ての町と言えは聞こえは悪いが、交易の拠点に成り得ると言えば少しくらいは映えるだろうか。

ここ数年で、道や町屋の並びは奇麗に整備され、裏黒い犯罪は一掃された。町から外れて暮らす俺たちにはほとんど関係のない話だが、時折こうやって町まで来るとその変貌ぶりに目を見張る事もある。

町中を流れ、死体ばかりが浮いていた賀茂川の支流も今では獲った魚が売られるほどまでに回復していた。

この町が自分の故郷だと誇る感情などは一切持ち合わせていないが、それでも、これだけの変化を見せられると驚かずにはいられなかった。

町にでたきさらは、食糧でも買い込むのかと思いきや、子供用の着物に履物、それから小さな茶碗や箸など、明らかに竹千代のためのものをそろえ始めた。だからあの子供を置いてきたのか。

竹千代をジジイに預けたと言っていたが、本当に大丈夫なのだろうか。ああ見えてジジ様は子供をあやしたりするの上手なんだよ、というきさらの言葉はとても信じられなかった。

必要なものをすべて買いそろえ、賑やかな町の昼下がり。

でこぼちの強い要望により、俺たちは茶屋の店先で注文した団子を待っていた。

人通りが多いこの場所ではさすがに誰かが喧嘩を売ってくることもないだろう。昔の賽ノ地ならば分らないが、刀を持たぬ町人が行き交う場所だ。

よほどの馬鹿か、きつが気狂いくらいでなければ相手などすまい。

と、思っで見渡したところ、向こうの角でふと視線を止めた。

明らかに周囲と雰囲気の違い二人組を見つけてしまったからだ。

その二人が、確実にこちらを指さしている。

あれ、絶対こっち来るぜ？

しかもあいつら、人外だ……多分。

でこぼちも気づいたようで、遠くの角に見え隠れする二人に視線を向けた。

こちらの視線に気づいた二人は一瞬びくつとしたが、ぼそぼそと二人で何かを話し合い、腹を決めたのか頷き合って再び俺たちの方向を向いた。

あ、やっぱこっち向かってきた。

極限に面倒な予感がする。

ちようど、出てきた団子をほおばる俺たちの目の前に立った二人頭に手ぬぐいを巻いた紅樺色の着物の男と、老竹おいたけの着物を着崩した男。それぞれ、大槌と小刀を手に使っていた。

「おい、お前ら！」

「おまえらあ！」

気狂いか馬鹿かと聞かれたら、確実に後者だろうな。

もぐもぐと団子をほおばっている隣の相棒は、俺の号令を待っていた。

頭に手ぬぐいを巻いた方の男が俺の目の前に指を突き付ける。

「個人的な恨みはねえが、俺たちの
うつわあ、めんどくせえ。」

口上を最後まで聞いてやる義理もない。

「でこぱち、殺^ヤつてこい」

「はあーい！」

団子を三ついつぺんに口へと放り込み、もぐもぐしながら飛び出したでこぱちは一瞬にして二人の間に割り込んだ。

先に反応したのは頭に手ぬぐいを巻いた大槌を持つ方。

小柄なでこぱちなど一振りで叩き潰されてしまいそんな大きさの槌を力任せに振り下ろした。

「あ、ハチっ！ お団子一本残ってるよ！」

突然の事に動転したときさすが、明らかにどうでもいい事を叫ぶ。

「あとで食べるからとつといて！」

そう叫び返したでこぱちには、まだまだ余裕がありそうだ。

周囲の町人は、突如として始まった乱闘に一步、距離を置いている。

が、そこは賽ノ地の住人。戦っているのが派手な着物の少年と、二人の男だと知ると、見物客が増え始めた。身の危険さえなければ、喧嘩^{さし}の座視^{ざし}など日常茶飯事なのだろう。

まあしかし、あんな大ぶりの武器は素早いでこぱちの敵ではない。もう一人はどうやら苦無^{くなく}のような飛び道具を使うようだが、多人数戦闘を得意とするあいつは、中距離の飛び道具の相手にも慣れている。

二人掛かりで持って半刻か……と思って見ていると、飛び道具を使っている方がおかしな動きをし始めた。

すすすす、と後ろへ退いていき、隙を見てさつと戦線離脱したのだ。

戦いに真剣な残りの二人はそれに気づいていない。

遠方から援護する気かと思いきや、完全に武器を仕舞い込み、こちらへとやってきた。

殺気も敵意もない。

ちよいと腰を浮かし、席を開けてやると、そいつは何の躊躇もなく俺の隣に座り込んだ。

「おおきに」

そして、でこぱちが残していった最後の団子一本を素早く口に運ぶ。

「あ、ハチの分……」

「うまいわぁ」

顔を綻ばせて団子をかみしめている。

「いいのか？」

目の前で戦いを繰り広げる二人を指すと、そいつはゆるゆると首を振った。

「俺はええんや。緋狐^{ひこ}が代わりに戦うさかい」

「ふうん」

「あんたはどないなん？」

「俺もいいんだ。あいつが代わりに戦うから」

「へえ」

どうやらこいつも戦わなくて済むならそれでいい、という考えらしい。

よかった。

もう一匹の方は好戦的なようだったから、あっちが当たっていたら問答無用で戦わされるところだった。

「よかったわぁ。ほなら、もし俺の相手があの子やったら、戦わなあかんかったんやろ？」

隣に座ったこいつが同じ思考をしていたことにさほど驚きもしなかった。

もぐもぐと口を動かす男に、さり気なく尋ねる。

「狐か？ あいつ」

「おお、よう分かったな。妖弧や」

「お前、狸だろ」

「そうや」

「何で狸と狐が一緒にいるんだよ」

「何があかんの？」

「いや別に。珍しいなと思って」

「ふーん」

とうとうでこぼちの分の団子を食べ終えた隣の狸が、気のない返事をした時だった。

鋭い声が飛んできた。

「狸休！ バカ野郎！ こっち手伝えよ！」

「あつ、おれの団子が！」

ああ、二人共に気づかれた。

我関せずの岡目もここまでか。

隣の狸は律義に両手を合わせて頭を下げた。

「ごっそさん」

「もう、何すんだよ！ おれの団子、返せよっ！」

でこぼちの刀が隣の男に向く。

と、その背後には、大槌を構えた男。

もうひとつ、ため息。

結局こうなるんだよな。

きさらの向こうに刺していた刀の柄に真っ直ぐ手を伸ばす。

「避けてろ、きさら」

刀を手にした瞬間に、間一髪かわしたでこぼちと俺をすりぬけて、大槌は茶屋の椅子を完全に粉碎した。この武器とまともに戦うのは得策ではない。

さらには、右足の怪我が治りきっていない状態。無理な動きをすれば多少のお叱りは飛んでくるかもしれない。

さて、どうしたものか。

抜き身の刀を肩に担ぎ、どうやら緋狐ひこという名らしい大槌の男と距離をとった。

第三話

でこばちの団子を横取りした狸が緋狐ひこ、と呼んだこの男、頭に巻いた手ぬぐいで目は半分隠れているが、目つきがそれほどよくないのは間違いない　と、自分の事を棚に置き、そんな風に観察する。全体的な雰囲気から、狐と言ったのは半分あてずっぽうだが、獣の匂いがするから純粹にヒトでない事はすぐに分かった。

そいつは、口元になにやと笑みを湛えながら言った。

「お前ら、有名な盗賊なんだってな」

有名かどうかというところに疑問はあるが。

「お前がそう言うなら俺たちは有名な盗賊なのかもな。そうするとお前……とあっちの狸は、有名な盗賊狩りなのか？」

問い返すと、緋狐ひこという化け狐は鼻で笑った。

「はっ、生意気なガキだ」

いつの間にか俺と緋狐の周囲を野次馬たちが、ぐるりと取り囲んでいた。

おかげででこばちときさらの姿が見えない。しかし、でこばちに關しては心配していないし、きさらもああ見えて忍しのびの端くれ。逃げる事くらいは簡単にできるだろう。

その代わり、興味本位で集まってきた観客たちの身の心配まではしてやれない。

緋狐は大槌をぶおん、と振り回した。

「残念ながら、俺たちは『殺していい』と言われた相手を殺しに來ただけだ。盗賊とかあやかしか、そういうのは一切關係ねえ」

ああ、なかなかどうして、こういう輩やからに絡まれる事が多いのだろうか。

昨日は政府の人間、今日はあやかし。

明日には羅刹にでも絡まれるのではなからうか。
ため息をついても逃れる術などない。

「要するに、お前は俺たちを殺しに来たんだな？」

「俺がそう言う前にあのチビをけしかけたのはそっちだろうが」

ああ、あのめんどくさい最初の口上か。

やはり聞かなくて正解だった。

左手の刀を真っ直ぐ相手に突き付ける。

真っ向から受けてやる、という合図だ。

それを感じ取ったのか、緋狐も大槌の柄を握りしめた。

大きな武器を相手に戦う基本は、相手の懐にいかに入り込むかにある。特に小回りの利かない大槌を振り回すこいつには効果的はずだ。

重要なのは一撃目。

いきなり大槌を振りあげるようなことがあれば、無防備な腹を切り裂いてやろうと思っていたのだが、低い体勢で大槌を引いて構えたそいつは、低い姿勢のまま突っ込んできた。

即座に横薙ぎの攻撃が迫ってくる。

「！」

思わぬ速度で迫ってきた槌に、考えるより先に左足に力を入れて飛び退った。

間髪いれずに追撃が待っている。

茶屋の腰かけを粉碎するほどの攻撃の重さに比べて、速度が段違いだ。

身の丈以上ある大槌を、細腕で驚くほど軽そうに振り回す。

くるくるりと、まるで自らの軀の一部のように。

右側の死角を悟られぬよう、右足を庇いながら左足を軸に避けているが、反撃の手口が掴めない。一度攻撃体勢に入り、そのまま押し切る算段らしい。

「退いてばかりじゃ、勝てねえぜ？」

畳みかける攻撃は止まない。

このままでは体力を削られるばかりだ。

避けそびれて槌に当たれば頭蓋を割られてその場に転がる事にな

る。だからと言って、この速度では大槌を振り下ろすより先に懷に飛び込む事もままならないだろう。

なんて厄介な相手だ。

何とかしてこの攻撃の渦から抜け出さねば。

四の五の言っている場合ではない。

手にした刀を逆手に握り直し、体を捻った反動で顔面に向かって投げつけた。

真っ直ぐに飛んだ剣の柄は、正確に緋狐の顔面を急襲した。

がつん、と手ごたえのある音がして、攻撃が止んだ。衝撃で仰け反った緋狐の手から大槌が滑り、どすん、と地面に落ちる。

辛うじて堪えた口の端につう、と血が伝う。

「……のやるお」

足元に落ちた刀を忌々しげに踏み付け、観衆の方へと蹴り飛ばした。町人たちは面倒を避けるように、刀から距離を置いた。

伝った血を腕で拭いながら、緋狐は大槌をくるりくると器用に回し、肩に担ぎあげた。

「ふざけやがって。刀を捨ててこっからどうする気だ」

「どうするかな」

「はっ、ますます生意気なガキだ」

と、その時、俺たちを取り囲んでいた人垣からわっと歓声が上がった。

「何だ？」

背後の騒ぎに、緋狐は振り向いた。

見れば、川に近い一角の人垣がざっと退いていつている。

そちらに視線を移した時、人垣が割れて、そこから先ほどの狸が勢いよく転がってきた。

地面に背をこすりつけるようにして滑り、緋狐の足元で止まった。

「狸休！」

「いてて……」

背を擦りながら起き上ったのはでこばちと戦っているはずの狸だ。

その狸を追うようにして、でこぱちが駆けてきた。

何故か上着はびしょぬれで、髪からも水が滴っている。

地面を滑るように転がった狸休りきゅうを助け起こしている緋狐の横を通り過ぎ、ぶるぶると頭を振って水滴を飛ばしながら、こちらへ歩いてきた。ついでに、途中で俺が投げ捨てた刀を拾い上げて。

「どうした、でこぱち」

刀を受け取りながら問うと、不機嫌そうに頬を膨らませた相棒はぼそりと言った。

「……落ちた」

何処に、とは聞かない。

見ればわかる。

緋狐の手を借り、ふらふらと立ち上がった狸休をじろりと睨みつけた。

「あいつ、おれの団子食うしさ、川に落とすしさ……」

「はいはい、分かった分かった」

でこぱちと視線を合わせ、方向を変えた。

よろよろと寄り添った二人を挟みこむように。

でこぱちが大きく刀を振りあげ、反対側から俺は引いた刀を薙ぐように。

「くそつ、狸休！ 避ける！」

「うわわわっ」

際どくも両側からの攻撃を回避した二人を分断した。

つい今まで二人がいた地面をきつちり同時に踏みしめて逆方向に散開、俺が緋狐、でこぱちは狸休を追う。

腰を退きながら大槌を振れるはずもなく、緋狐は逃げる一方だ。

その隙を逃さず、怒涛の攻撃を仕掛けていく。

先ほどとは逆だ。

「退いてばかりじゃ、勝てないんじゃないのか？」

「ほんとに生意気なガキだなっ……！」

でこぱちが狸休を追いつめる動きを見ながら、渾身で打ち込んだ

太刀を、槌の柄が受け止めた。

しかし、そこで止めさせない。

刀の鎬しのに足を乗せ、体重をかけて大槌おきねごと蹴り飛ばしてやった。
反対側から、でこばちが同じようにして狸休を追い詰めたところ
へと。

「あ、緋狐」

「うわっ、狸休」

とうとう二人を背中あわせに追い詰めた。

逃げ場はない。

「しまっ……！」

正面のでこばちと、同時に刀を振り下ろした。

折り重なるようにして腹から血を流して倒れた二人を見下ろし、
息をつく。

意識を失ったせいで元の獣の姿に戻りつつある。

緋狐の尻にはふさふさとした毛艶のいい尾がにょきりと生えて、
狸休の耳も丸みを帯び、細長かった指は短く、丸くなっていった。
「……」

喧嘩を売ってきた相手は、これまで幾度も葬ってきた。

獣に戻ってしまった二つの前足が、互いを求めるようにして重な
ってるのを見たからって、同調したとかそんなじゃない。そわそわ
と背筋を這い上がってくる不安を消したいとか、そんなじゃない。
狐と狸、種族の違う二匹の獣に自分たちを映したなんて、そんなじ
やない。

別に、助けてやる義理もない。

「きさら！」

人垣に向かって叫ぶと、決着がついたところで解散しようとして
いた町人たちの流れに逆らって少女が転がり出てきた。

「きやつ」

倒れ込むように転がり出てきた少女は、何とか転ばずに着地。

「ハチ、びしょ濡れじゃない！」

「すぐ乾くもん。でも、団子……」

「お団子なら、もう一回買ってあげるよ」

「ほんとっ？」

一本だけね、ときさらに小銭を渡されたでこばちは、小銭をちゃりちゃりとさせながら嬉しそうに駆けていった。

その後姿を見送って、一息。

そして足元に転がった二匹の獣をちらりと指して言った。

「きさら、二人共治してやってくれ」

「えっ、いいけど……珍しいね」

首を傾げたきさらだったが、すぐにしゃがみこんで二匹のケモノの怪我をみはじめた。

「どうしたの、急に治してだなんて」

「……別に」

意味などない、と思いたい。

てきばきと手際よく処置をするきさらから視線を外し、人垣に目をやると、ふいに一人の男と目が合った。

周囲がこの場から離れていく中、男は一人だけその場に立ち止まってこちらをじっと見つめている。

何か用かと眉を寄せると、にこにここと笑い返してきやがった。

上から下まで黒ずくめ、地味な印象ではあるが、その笑顔を見ていると何やら心落ち付かなくさせる不思議な雰囲気ほくろの男だ。左目尻に、ぱちりと泣き黒子。

手にした扇子をゆっくりと閉じ、腰帯に差すと、軽く会釈し、くるりとこちらに背を向けた。

声の届かぬ距離だ。呼び止める理由もない。

それでも、あいつは俺が気づくのを待っていた。

「何だよ、全く……」

面倒な事になりそうな予感がある。

ここのところすっかり癖になっている、ため息を付け足した。そこへさらに、面倒の原因が帰ってくる。

「青ちゃん」

先ほど川に落ちた所為で、歩く度に履物から水があふれている。その両手には、何故か持ち切れぬほどの団子。

到底、先ほどきさらから渡された小銭では買えぬ量だ。

「待ちやがれ、盗人！」
ぬすつと

でこばちの後ろには、十手じってを持った岡っ引きがついてくる。最悪だ。

説かずとも頷ける状況に、もうひとつ、ため息。

「あと、頼む」

きさらにそう言い残し、鮮やかな向日葵色の上着を翻す相棒と合流した。

一本差し出してきた団子を受け取り、口に放り込む。

「青ちゃん、聞いてよ！ おれがき、団子買いにいったらさ、あいつが腰かけを弁償しろって言っただよ！ 違うよね？！ 壊したの、おれたちじゃなくてあいつらだよね！」

追いかけてくる岡っ引きを指しながら、頬をふくらましたが、相変わらず髪からは水が滴り落ちている。

食べながら喋りながら逃げながら、忙しい奴だ。

「何で岡っ引きが茶屋の腰掛け代を請求してくるんだよ」

「知らなーいっ」

で、団子を買えずに怒って全部奪ってきたのか？

短絡思考もいい加減にしろ。

逃げ道が橋にさしかかったところで、欄干に誰かが立っているのが見えた。

「ふふふ、ここで待っていれば必ず来ると思っていたぞ！」

駆ける俺たちを指さし、欄干の上の男はひげ面を笑いに歪ませた。つい今しがた獣たちを討散うちちらしてきたところだというのに、次は

敵ついひげ面親父と来たか。ばさばさの黒髪を後ろに纏めただけ、とても真つ当な職についているとは思えないこの男が何故、俺たちに刃を向けるのか。

そんな理由に興味などない。

「極悪非道な盗賊どもめ。成敗してくれるわ！」

後ろから岡つ引き、橋の上には喧嘩を売ってくる馬鹿。

ああもう、めんどくせえ。

武器は脇差二本だけのようだから、大槌のように、戦い方に困る事はない。

一瞬で終わらせようと、走る勢いそのまま、欄干へ突っ込んだ。当然応戦してくるものと思ったのだが。

俺が攻撃を仕掛けてきた、と見るや、ひげ面親父はあたふたと慌て始めた。

「うわ、ちょ、待て！」

「何が待て、だ。喧嘩を売ってきたのはそっちだろう」
容赦なく抜き身の刃を向けると、男は太い眉を下げ、懇願するように両手を合わせた。

「待ってください、いますぐ、ここから降りるから」
そして、慌てて欄干から降りようとした次の瞬間。

男は足を滑らし、欄干から後ろ向きに川へと飛び込んでいった。
下の方から、ざぶん、という水音。ぎゃあぎゃあと喚く声も聞こえるから、どうやら元気なのだろう。

何だっただんだ、今のは。

「あ、落ちた」

「見るなでこばち」

橋の欄干から下を除きそうになっているでこばちの襟首を掴み、駆けだそうとすると、後ろから追いついてきた岡つ引きが膝に手をつけてせえせえ息を整えながら俺たちに十手を突き付けた。

「まっ、待ちやがれ、この、盗賊、どもっ……！」

歳は俺たちと同じくらいか。着流しの裾を腰帯の裏に挟みこんだ、

典型的な岡っ引き衣装に十手。どこに雇われているかは知らないが、この年なら岡っ引きとして見習いもいいところだろう。

適当にいなして逃げよう。

「団子と……粉碎しやがった腰掛けのお代、耳をそろえてきつちり払いやがれ！」

「壊したのは俺たちじゃない。第一、何故お前がああ茶屋の腰掛け代を請求するんだ？」

「あれは俺の親父の店だ！」

思わぬ返答に絶句した。

まさかそう来るとは思わなかった。

でこばちも首を傾げて尋ねる。

「じゃあお前、団子屋なの？」

「違う。俺は岡っ引きだ！ かげもと 景元様と けいうん 景雲様の為に、 さいのち 賽ノ地に はびこ 蔓延る悪を成敗するんでいっ」

「んじゃ、何でお前に団子代を要求されなくちゃいけないんだよ！」

頬を膨らませるでこばちに、岡っ引きもでかい声で返答した。

「だーから、あれは俺ん家で……」

「んじゃお前、団子屋なんじゃないか」

「ちがーっ！」

目の前で繰り広げられる不毛な会話。

ああもう、勝手にしてくれ。

俺たちを捕まえる気のない岡っ引きと、逃げる気のない相棒のやりとりをぼんやりと見ながら。

そう言えばせっかく買った茶碗や着物は、全部あの茶屋に置いてきてしまったんだった、と思い出す。

言い争いはまだまだ終わりそうもないし、きさらに叱られる前に取りに戻る。

第四話

先ほどの茶屋の前まで戻ると、あれだけ集まっていた町人の姿はなく、賑わいを見せる町の麗らかな午後の景色だけが広がっていた。きさらの姿もない。

道の真ん中に転がっていた筈の二匹の姿も見えないから、おそらく治療の終わった狐と狸を山へ帰しに行ったのだろう。

茶屋の前には無残な姿を曝す材木の集まりが。先ほどまで腰掛けだったそれを横目に、俺は団子屋の暖簾のれんをくぐった。

「すんませーん」

「はいはい」

奥から出てきたのは、この茶屋の主人なのだろう。

温和そうな中年男だが、手には大きな風呂敷包みを抱えていた。

俺が言う前からその風呂敷包みを押しつけてくる。

中を確認すると、間違いなく今朝からきさが買い集めた竹千代の為の道具ばかりだった。

「忘れもんだろ？　しっかり持ってきたな」

「……ありがとうございます」

思わず礼を言っせずしりと重い包みを受け取った。

「片腕じゃ大変だろう。団子のお代は次来た時でいいから、あの女の子と、派手な上着の子と、そのお茶碗の子と、みんなで一緒に来るといい」

次来るという保証もないというのに、茶屋の主人はそう言っただけで笑った。

先ほどの岡っ引きは親父の店だと言っていた。言われてみれば、目元の雰囲気や眉の感じは似ていなくもない。もつとも、鼻息を荒くした息子とこの親父とでは表情に雲泥の差があるが。

「……請求しないんスカ、店先を荒らした分」

自ら聞く事でもないのだが。

「いいよ、あれのお代は別のところに回させてもらうんでね」

「別のところ？」

「あの化け狐と化け狸の親分に請求させてもらうよ。烏組からすぐみと、今はそう言わないのかね。『元』羅刹狩りの一味さ。戦争も終わつた今じゃ、商売あがったりだろうよ」

『元』羅刹狩り。

聞き覚えのある言葉だ。

「賽やいノ地ちはさんざんこれまで羅刹の被害を受けてきたって言うのに、半年前、急に戦争が終わっただろう……全く、お上の考える事はよく分からんよ」

半年前の羅刹との和平成立。それはまだ、記憶に新しい。

羅刹族は、俺たちヒトと一線を画す、粗野で乱暴な戦闘種族だ。ヒトと同じ外見でありながら、明確な政治形態を持たず、ただ『力の強いモノが弱いモノを支配する』という一点のみに置いて組織を構成する。そして、たびたびヒトを襲う。快樂のため、強さを見せるため、目障りだから。そこに鮮明な理由などありはしない。あつても、ヒトには知る術がない。そのためヒトは羅刹を、ヒトに害なすヒトならざるモノとして狩り続けてきた。

中央の都ならばほとんど羅刹の姿など見ないかもしれないが、北俱盧洲つくるしゅう最果てである賽ノ地は別だ。頻繁に羅刹族が出没するために、奉行所がいくつもの羅刹狩り一味を抱えて対応していたほどだった。その羅刹狩りたちが、半年前に成立した和平のせいで職を失っている。

「狩る羅刹がいなくなったせいで、盗賊を狩ってるのか？」

先ほど、緋狐ひこという妖狐は、殺していい相手だと言われた、と漏らしていた。暇を持て余した元羅刹狩りが、代わりに盗賊でも一掃しようと言うのだろうか。

全く、面倒な事だ。

さて、用事も済ませたし、このまま立ち去ろうか……と、した時だった。

暖簾を押し、誰かが茶屋へと入ってきた。

「すまない、風月庵はこちらか？ 店先の騒ぎの非礼を詫びに……」
聞き覚えのある女の声だった。

思い出す間もなく、茶屋へ入ってきた女は俺を指さして絶句する。

「お前、盗賊っ……！」

誰かと思えば先日ひさの羅刹狩りの女だ。

いや、今は盗賊狩りと呼べばいいのだろうか。

顎の下に布を当てているのは、俺が容赦なく蹴りあげたせいだろう。

今日は武器を手にしておらず、代わりに詫びの品なのか修繕代なのか、小さな風呂敷包みを胸元に抱えていた。

「何故お前がここにいる？！」

「それはこつちの台詞だ、盗賊狩り」

言い返すと、盗賊狩りの女は素早く懐刀を取り出した。

それを見た茶屋の主人はさすがに慌てて止める。

「おいおい、葉ちゃんようちゃん、店の中で暴れるのはやめちゃくれなにか。
やるなら外で頼むよ」

「……そこで待っている、盗賊」

悔しそうに刀を仕舞い込み、翡翠ひすいの瞳で俺に鋭い視線をくれながらも、風呂敷包みを茶屋の主人に手渡した。

「此度は、烏組うちの狐と狸が風月庵の店先で、失礼仕った。今後、街中では暴れぬよう、言い聞かせておくゆえ、何卒、お咎めは勘弁していただきたい」

「さすが、烏之介様うのすけは対応が早くていらっしゃる」

盗賊狩り。一味。烏組。

なんとなく合点が行って、俺は大きいため息をついた。

何の事はない、俺は昨日からずっと、同じ一味の者に襲われ続けていたのだ。

ため息を、ひとつ。

待てと言われて、これから攻撃を仕掛けてくることが分かっている。

る相手を待つ義理はないし、盗賊狩りの女が茶屋の主人にへこへこ頭を下げてゐる今の間に姿をくらましてしまおうか。

竹千代への土産を抱え、俺は音もなく茶屋を出た。

先ほどの岡っ引きとでこばちは、いったいどうしているだろう？
そう思つて橋のところへ戻つてみると、けらけらと楽しそうに笑う相棒の姿があつた。

橋の欄干に腰掛け、隣の岡っ引きと何やら談笑しているようだ。
先ほどまで声を荒げて逃亡劇を繰り広げた二人とは思えぬほどに。
俺が近づいたのに気づくと、でこばちは欄干を飛び降りてこちらに向かつて駆けてきた。

「ねーねー、青ちゃん、聞いてよ！ 雷^{らい}がさ、また団子屋に遊びに行つていいつて！」

雷^{らい}つて誰だ。

話の流れからすると、目の前にいる茶屋の息子の岡っ引きとしか考えられないが。

何故、俺が茶屋へ行つて戻るだけの時間で仲良くなつてゐるんだ。
「おう、じゃあな、耶八^{やはち}！ おい、その無愛想なの、来る時はお前も一緒に来いよな！」

ばんばん、と俺の肩を叩きながら、嬉しそうに去つていく岡っ引き姿の茶屋の息子に、俺は茫然とするしかなかった。

あいつも馬鹿なのか？

あの様子では、でこばちが団子を盗んだ事だつて忘れてゐるに違いない。

それにしても。

ようやく乾いてきた飴色^{あめいろ}の髪にばん、と手を乗せてやると、でこばちは嬉しそうに笑つた。

厄介事を運んでくるかと思えば、いつの間にか味方を作つてゐる誰かと敵対する関係であり続けるということ自体が無理なのか、そもそも、この相棒の中には『敵』という概念が存在しないのか。

不思議な奴だ。

こいつならそのうち、あの狐や狸とだって仲良くなってしまうに違いない。そう思うと、何故か無性に可笑しい気がして、知らず、唇の端を上げていた。

重い買い物包みを頭の上に乗せ、落とさぬよう器用に歩くでこばちの後を追ひ、賽ノ河原を往く。今日もこのまま、きさらの待つ草庵に戻る予定だった。

もう半刻もすれば陽は西に傾く。早めに戻らなくては夕餉ゆづに間に合わない。

ところが、先を歩いていてでこばちがぴたりと立ち止まり、河原の人影を指さした。

「青ちゃん、なんかいる」

しかも、人影は一つや二つではない。十名ほどの集団が、河原で集まってがやがやと何やら相談しているようだった。

こんなところに屯たむろするのは、盗賊集団か、盗賊狩りか。

避けようと進路を変えたところで、でこばちがまだじいっとその人影を見つめているのに気づいた。

「どうした、でこばち」

「青ちゃん、あれ、ヒトじゃないよ？」

言われて目を凝らすと、確かにヒトとは雰囲気が違う。

ひよこひよここと寄って行ってしまったでこばちを追って、俺もそちらに足を向けた。

河原に点在する草むらに二人隠れて様子を窺うと、そこにいたのは数名のヒトと、数個体のヒトならざるモノだった。

羅刹だ。

ほとんどヒトと変わらぬ外見だが、そこは戦闘種族と呼ばれる所以、羅刹は女も男も一樣に戦士の風貌をしており、戦闘に関してはヒトと比べるまでもなく強い。見下ろした中には羅刹女の姿も見られた。

大きく開いた背には、まるで何かを睨みつける目のような赤い痣が刻まれている。

背に負うあの痣は、羅刹族である証　ヒトとヒトならざるものを分ける、たった一つの刻印。

しかし何故、羅刹族とヒトがこんな場所に集まっているのだろうか？

「では、町の北東、賽ノ河原より一里いちりの場所を第一候補に」

そう言ったのは、その場にいるヒトの中では最も地位が高いであろう眼鏡の男だった。

手にした帳面に何かさらさらと書きこみながら、羅刹たちに何やら確認をとっているようだった。

「いいだろう。後は任せる」

羅刹女の一人がそう言って頷いた。

そして、俺たちが隠れている草むらの方をじつと見る。

確実に、気づかれている。

じつとりと汗が背を伝った。

いかに俺たちがこの辺りに敵がいらないほど強くなったとはいえ、羅刹族の強さは段違いだ。戦闘種族として生まれ、育った彼らに攻撃を仕掛けられれば、とにかく逃げに徹するしかない。

羅刹女の視線に気づいたのか、眼鏡の男はふいにこちらを見た。

「何か、見つけられましたか？」

「……いや、この辺りをわくにする盗賊か何かだろう」

眼鏡の男は、それを聞いて深々と頭を下げる。

「申し訳ございません。そういった輩やからは建設前に一掃しますので、お任せください」

「そういう輩が残っていても、私らは一向に構わんのだが？　ヒトを狩る口実が出来るだけの話だ」

羅刹女の台詞に、眼鏡の男は一瞬表情を凍らせた。が、すぐに笑顔に戻って諷める。

「迦羅殿、そういったお言葉は……」

「分かっている。我が主がお前らヒトと手を結んだ時から理由なき

限り、ヒトに害は与えぬと約束している」

ふふ、と笑った羅刹女はそう言って視線を戻した。

あの眼鏡の男が率いているのは政府の者たちなのだろう。半年前に和平を結んだ羅刹と、こんなところで一体、何を話しているのやら。

いかに辺境の賚^{わいのち}ノ地^ちと言えど、これだけの数の羅刹族を一度に見る事は稀だった。

あの男たちがいったい何について話しているのかは知れないが、和平が成立して半年、何か動きがあってもおかしくない時期なのだろう。

「ねーねー、青ちゃん」

隣のでこぼちがつんつん、と着物の裾を引っ張る。

「何だ？」

「もしかしてさ、この辺に羅刹族が増えるのかな？」

「分からん」

本当に分からなかった。

しかし、普段なら喧嘩を売ってくるはずの逸^{はく}れ者が寄ってこない理由は分かった。羅刹狩りが盗賊を狩り始めたせいで盗賊自体が減っているせいだ。

ようやく一つだけ合点がいった。

しかし、まだこれだけでは済まない気がする。

政府の人間と密談する羅刹たち。

政府直属の組織の盗賊狩り。

これから、酷く面倒な事に巻き込まれる予感がした。

多少寄り道をして、ちょうど陽が落ちる頃には草庵へと戻ってきた。

長い一日だった気がする。

最初頭の上に乗せていた大きな風呂敷包みを、今や重そうに抱え

ている。代わりに持とうか、と提案したが、帰るまでおれが持つんだ、と断られた。

せめて、と草庵の戸を開けてやれば、荷物を土間に置き去り、履物を放り出して囲炉裏端へと忙しなく駆けこんだ。

「ただいまー！ おなかすいたっ」

どたどた、と足音。

数秒遠ざかって、また近づいてきた。

奥の部屋まで全部見て戻ってきたのだろっ。そのままひょっこりこちらに顔を出した。

「きさら、いないよ？」

その下から、同じようにひょっこりと竹千代が顔を出す。

「帰ってないよ」

もう外は暗くなるというのに。

あの狐と狸を山に送って、まだ戻らないのだろうか。

どこだ？ 町から近く、獣が多く姿を見せる山となると、東山の辺りか。

……しまった。

「来い、でこぱち」

最悪だ。なぜ気付かなかったんだ。

自分の迂闊さに吐き気がする。

町から東山へと登る道、普段から、賽ノ地付近に根を下ろす盗賊たちもあまり近寄らないあの場所は、賽ノ河原から住处へ帰る羅刹たちの通り道だった。

「えっ？ うん！」

でこぱちも、濡れた履物に再び足を突っ込み、ばたばたと駆けてきた。

ひどく面倒な事になりそうな予感、どころじゃない。

俺たちはとくに巻き込まれていた。

何も言わず俺たちを見送ったジジイの目の奥に潜む感情の揺らめきに気づいていれば、あるいは何か違ったのかもしれないが。

第五話

背の高い草を縫うように駆けた。すぐ後ろをでこばちが追ってくる。

「青ちゃん、急にどうしたの？　きさらが何処にいるか分かるの？」

「東山だ。頃合いから考えて、さっきの羅刹と鉢合わせする可能性が高い」

そう言つと、さすがに事態を察したのか、息を呑んだ。

普段なら気にもならないはずの東山までの距離がもどかしいほどに遠い。早く早く、と急く気持ちを抑えて、灯りもない荒れ野を駆け抜けた。

辿り着いたのは東山の玄関口。沈んだ陽が微塵みじんと残る黄昏時の終わり、慄然とする風が冷淡に吹き抜けた。さわさわと、葉摺はずりれの音が肅然と響く。そこはかとなく血の匂いが漂っているのは気の所為だと思いたかった。

山の奥、水源地には羅刹の里があるという。賽ノ地へと下つてきた羅刹たちが、必ず通る関所になるのがこの東山の登山道だ。

まだ帰らないきさらがいるとしたら、ここしかない。

最悪の事態が脳裏を過ぎる。

と、そのまま東山の山道に入ろうかとしたその瞬間、上から何かが降ってきた。

「ちよつと、こんなところで何してんのよ！」

濃い紺青こんじやうの忍び装束。

咄嗟に刀を構えかけたが、その影が見慣れたものであると思いきり、納めた。

「お前こそ何してるんだ」

「あたしは仕事中よ！」

腕を組み、偉そうに俺を見上げてきたのはきさらの友人でもあり、忍の仲間でもある玖音くのだった。

面倒なヤツに会ってしまったものだ。

到底、忍とは思えぬ大声で返答した玖音は、眉間にしわを寄せながら生意気な口調でまくし立てる。

「ここがどんな場所か分からないの？ 今日が何の日なのかは知らないでしょうけど。知ってたらわざわざこんなところに来るはず……」

こんな場所で時間を喰っている暇などないというのに。

「どけ」

しびれを切らして強引に退けて通ろうとすると、両腕を広げてさらに抵抗してきた。

「駄目よ。仕事中だつて言ったでしょ」

何の仕事かなど俺には関係ない。邪魔をせず、勝手にやってくれればいい。

「どけつて言つてんだろ」

苛立ったところに、後ろについていたでこぱちがひよい、と顔を出しておねだりした。

「ごめんね玖音、通してくんない？」

「っ」

でこぱちの顔を見た玖音は一瞬息を呑む。

「おれたち、ここ通っちゃいけないの？ 通さないのが玖音の仕事なの？」

「通さないのが仕事つてわけじゃないけど」

「じゃあなんで邪魔するんだよー」

ぶー、と唇を尖らせたでこぱちに、玖音はつられるようにして叫んだ。

「この先は、危ないから、あたしはここで入るヒトがいらないか見張つてるのっ！」

「そうなの？ じゃあ、おれたちの心配してくれたんだね。ありがとうー」

でこぱちがそう言うと、玖音は口をパクパクさせて黙り込み、そ

して、みるみるうちに頬が紅潮した。

ああ、もう、分かりやすいのは勝手だが、頼むから俺を挟んで展開しないでくれ。

「でも、おれたち強いからだいじょうぶだよ！　だからさ、ちょっとくらいいいじゃん」

でこばちがそう言っただけで笑ったところで、決まりだった。

「……仕方ないわねっ」

酷く切羽詰まった状況だというのに、気を削がれ、俺は大きくため息をついた。

どこから依頼された仕事かは知らないが、完全に持ち場を放棄してついでにきた玖音と三人で闇夜の坂を駆けあがる。

「それにしても、何でそんなに急いでるのよ」

そう言いつつもしつかりとでこばちの隣を維持している事にも気付いたが、俺に害が及ばないのならば当人たちの問題だから、どうなろうと別に構わない。

「きさらがね、ここにいてももって青ちゃんが」

「きさらが?!」

玖音の表情が揺らいだ。

きさらとは年の近い忍同士、仲良くしている姿を見かける事も多い。

「目的はさっきの羅刹たちに会うことだと思っただけいいわね?」

さっきの。

やはり羅刹たちはこの場所を通っている。

昼過ぎに山へと入ったきさらが、帰りに出会ってしまった可能性は高い。

「あたしが先導するわ」

「えっ、ほんと?　玖音、羅刹たちの居場所知ってるの?」

でこばちが表情をぱっと明るくすると、彼女は慌てたように視線をそらした。

「か、勘違いしないでよね！　きさらが危ないっていうからっ」

「ありがとー、玖音！」

ああ、もう、めんどくせえヤツだな。

「先導するなら早く行け」

「煩いわね！　あたしに命令しないでよ！」

……ああ、もう、めんどくせえ。

玖音の相手はでこばちに任せる事にして、俺は黙っていよう。

いくらか見受けられる獣道すらも避け、玖音は熊笹の生い茂る急斜面を選択した。先を往く羅刹たちに悟られぬ為か、道なりに進む時間すらも惜しいというのか。

この闇夜の中、足元の^{おぼつか}覚束ない斜面を突っ切るのは並大抵のことではない。

しかし玖音はこの斜面の角度など感じさせない軽快な足取りで登っていく。流石は忍、といったところだろうか。でこばちも器用にそのあたりの草木を掴みながらひよいひよいとついていく。

残念ながら、俺の方はと言えば片腕で抜き身の刀を手にしたままでは、少しきつい。さらには間の悪い事に癒えきっていない右足の傷に負担がかかっているようだ。斜面の中腹を過ぎる頃には、二人から多少遅れをとっていた。

気づいたでこばちが斜面を少し下って俺のところまで戻ってきた。もちろん、それに玖音もついてくる。

「青ちゃん、だいじょうぶ？」

「先に行け。すぐ追いつく」

「やだよ、青ちゃんと一緒に行く！」

その瞬間、玖音から無言の圧力がかかる。

なんでお前ばかりが、と言わんばかりのその空気にもう一つ溜息。分かった、分かったから、代わりにこれ、持ってくれ」

そう言って左手に持っていた抜き身の刀を渡すと、でこばちはいい返事をして受け取った。

片腕が使えるだけでも、随分と登りやすい。

結局三人並んで崖のような斜面を攻略し始めた。

すると、涼しい顔をして先導する玖音がぼつりと言った。

「あたしが言うのもなんだけど……らしくないわね」

「あ？」

「面倒な事は全部、たとえきさらの事だろうと放っておくと思ってたわ。今、これだけあんたが必死になってるのはすごく意外」

そう言われて、はたと気づく。

確かに、羅刹と闘争になるかもしれないという恐ろしく面倒な事態に自ら首を突っ込んでしまうなど、面倒事を嫌う俺らしくない。出来る限りの争いごとを避けて通るのが常だ。

それなのに、面倒だと思う暇いとまは欠片もなく、考えるより先に動いていた。

俺自身もわからないほどの心の奥底で、何かを怖れた。

「ま、あたしには関係ないけど」

自分の中に生まれた違和感が膨れていくのを、ひしひしとを感じる。思い出してはいけない何かを思い出しそうになる。

目の前を鮮やかな緋色の衣が翻る。

今朝洗濯したばかりの緋色の着物は、まだ軒下に吊るされたままのはずなのに。

赤は嫌いだ。特に、酷く鮮やかな猩々しょうじゅう緋のような色は。

違和感が膨れ上がっていく。

ああ、駄目だ。

虚脱感が全身を包み込む。

何かを怖れようとする時、何かを思い出そうとする時、何も求めるな、ただ傷つくだけだと奥底に澱のように澱んだ感情が不安も焦燥も何もかも絡め取っていく。

全身を蝕むしむ澱みに任せて足を止めそうになった時、ようやく熊笹の斜面を登り切っていた。

暗闇が周囲に鬱積し、慣れていない目では辺りの様子を窺う事す

らできなかった。この暗さに慣れるまでには、もう少しかかるだろう。

「時間的に考えると、この下の登山道のあたりだと思うわ」

ここは尾根だと思うのだが、登ってきたのと反対の斜面の下には闇が澱んでいるだけだ。

確かめるには降りるしかない。

と、でこぱちがぱつと闇の一点を指した。

「青ちゃん！ いた！」

「静かにしろ。見つかるぞ」

最も、既に見つかっている可能性も否定できないのだが。

でこぱちを抑え、指された方向にじいっと目を凝らすと、少しずつ闇に慣れてきた目が、おぼろげな赤を捕えた。

羅刹の背の痣が、闇の中からこちらを睨んでいた。

数えるまでもなく、数体の羅刹が足元の登山道を移動している。

それも、かなりの速さだ。すぐに追わねば見失ってしまうかもしれない。

「玖音。お前はもう帰れ。邪魔だ」

「あたしに指図しないで」

「……なら勝手にしろ」

東の空から先宵の月が顔を出す。

微々たる光源だが、夜闇に慣れてきた目には十分だった。

視線で合図し、滑るように登山道へと駆け下った。

遠ざかるように移動していく羅刹たちを追いながら、彼らの意識が俺たちの側に向いていない事を悟った。彼らがただ移動しているだけなら、この距離で追っていて、気付かれないはずがない。

何かを追っているからか？

焦燥に、ざわりと背筋を悪寒が走る。

それと相反するように、心のどこかから囁きが迫ってくる。もういいだろう、と。面倒事に首を突っ込むのはやめろよ、と。その先に何の救いもありはしないから、と。

理屈ではなく動いた感情と、それを抑えつけようとする過去の何かが胸中でせめぎ合っている。

大切なヒトはいつか、俺を傷つけて消えるから襲い来る異物の様な澱みに、吐き気がした。

「青ちゃんっ」

小声で鋭く飛んだでこばちの声に、はっとした。

見れば、羅刹の集団が道の脇に寄って留まっている。

俺たちもすぐに足を止め、道の脇に身を潜めた。

円を描くように集まった羅刹は男女混合で四体。中でも、一際ひつきわ図体のかい褐色肌の男が目をひいた。肩から頭にかけて半身に刺青を刻んでいる。さらに、額から伸びているのは、あやかしの鬼から奪ったと思われる二本の角だった。

「追い駆けっこはもう飽きたでしょう、衝つぎ？　そろそろボクに譲ってくださいよ」

黄丹色の髪をした隣の羅刹が手にした血鎌をくるりくると回しながら問う。

その視線の先にいるのは、周囲を羅刹に囲まれながらも気丈に苦ク無を構える忍の少女の姿だった。すでに足元は泥に汚れ、顔の横に結んでいたはずの髪は解け、頬にかかっている。

肩で荒い息をしながら、それでもまだ、霞色かすみいろの瞳は光を失っていないかった。

「きさら！」

その姿を見た瞬間、でこばちは駆けだしていった。

しまった。直情的な相棒の性格を勘定に入れていなかった。

こちらに気づいていない羅刹たちの隙間を縫うようにして、きさらを背に庇うように立った。

先ほどから預けていた俺の刀を足元へ置き去りにして。

勝ち目のある戦いではないのは分かっているのだから、逃げるしかないのだが、羅刹たちの前に飛び出したあいつは、そんなこと微塵も考えやしないだろう。

きさらが東山へ向かったと気づいた時と同じ感情が全身を駆け巡った。胸の内がかつと熱くなる。

その場に落ちていた刀を拾い上げ、面倒だと思っより先に飛び出していた。

らしくないぞ、と自分の中の澱みが囁いたのは、聞こえなかったふりをした。

羅刹の横をすり抜けるようにして駆け抜ける時、ついでに不意打ちで膝の後ろを強く蹴り飛ばしてやった。

重量のある羅刹の躰が^{からだ}もんどり打つように跳ね、地面に叩きつけられた。

羅刹は四体。

つい今しがた転ばせた褐色肌の大男と、血鎌を手にした^{おつにいろ}黄丹色の髪の羅刹。そして転がった大男を指さし、大口開けてげらげらと笑うやたらやかましい^{るりいろ}瑠璃色の衣を纏った羅刹と、目を奪う^{くれない}紅髪の羅刹女。

「ハチ。青ちゃんと、玖音まで」

茫然としたきさらの声。

気丈に振る舞っていても、その語尾は震えていた。

「このまま退くぞ、でこぱち！ 玖音！」

「ちよつと、呼び捨てにしないでよね！」

言い返しながら、玖音は放心しているきさらの手を取った。

「全員、息止めなさい！」

次の瞬間、ぼうん、と鈍い音がして、辺り一面に煙が立ち込めた。玖音の放った煙玉だ。

月明かりだけの晩、これで完全に視界を奪える。

事前の確認も、合図も何もなかったが、全員が弾けるように駆けだした。

第六話

先ほどの道を逆に辿るように、月明かりの山道を駆け抜けていった。

一体の羅刹を相手にすることさえ難しいというのに、一度に四体も。とても勝ち目などない。このまま生きて逃げられるかさえも分からないのだ。

ともかく、山を降りるしかない。

先宵の月が照らす山道を只管ひたすらに駆けた。

ただ、玖音に手を引かれて走るきさらに大きな怪我はない様子だった。

「もう、世話焼かせないでよ！」

「ごめんね、玖音くのん。青ちゃんもハチも、来てくれてありがとう」

ぎこちないながらもきさらが微笑んだ時だった。

その背景の暗黒に、ふっと血鎌が出現した。

「避ける、きさら！」

叫ぶと同時に、きさらをその場から突き飛ばした。

手をつないでいた玖音も巻き込まれて悲鳴を上げながら転がったが、この際、仕方がない。

二撃目が襲ってきたところで、左手の刀を振った。

手ごたえなく、刃は文字通り空を切る。

「あれ、うまく刈れませんでしたか。いけると思ったんですけどねえ」

追いつかれた。

あまりにも速すぎる。

目の前には、闇に目立つ黄丹色おうにいろの髪と衣を纏った羅刹の姿があった。手には血色をした鎌を持ち、袖から覗く腕の皮膚にはまるで接ぎをしたように不調和な色が混ざっていた。

にこにこ目を細めるそいつの後ろから、残り三体の羅刹も追っ

てくる。

「速えよ、剥はぎ！ 一人で突っ走ってんじゃねえ！」

最初に追いついたのは、先ほど盛大に転ばせてやった大男だ。続いて紅髪の羅刹女が続いた。

「そうそう、獲物独り占めってのはないんじゃない？」

「ほんと、このところ、大っぴらに無族を狩るのが禁止になつてんスから、ちつとは互いに協力したってよくないスカ？ ほら、ひいふうみいよ……数びつたりだし」

最後に追いついてきた声のでかい羅刹が勝手にこちらの数を勘定し、自分の相手を選び始めた。

その間に羅刹たちから逃れる術を求めるが、さっぱり思いつかない。

「じゃあアタシ、あのチビっちゃんの」

「ボクは女性がいいです」

「と、いうわけで俺様の相手は、さっき転がしやがったあれな」
最悪だ。

大男が俺を指さし、腕の太さに似合う大鎌を両手に振りかざした。
くそ！

玖音ときさらを庇うように、四体の羅刹と対峙する。

地面に座りこんでしまった二人を挟んで、自分の背を預ける相棒が今は驚くほど頼もしかった。

「衝つぎ、ボクの邪魔、しないでくださいね」

「お前が俺様の邪魔にならなかつたらな」

俺の側には血鎌の男と鬼の角を持つ大男。

「間違つて無族じゃなくてアンタの事殺したちゃったらごめんねえ」
「

「はあ？！ ふざけんな、天音あまね、お前何言つてやがんだ！」

でこばち側に紅髪の羅刹女と声のでかい男。

明らかに格上だと分かっている相手と戦うのは久しぶりだった。
感覚を研ぎ澄ませ。

些細な動きも見逃すな。

俺が戦闘態勢に入っただのを感じ取ったのか、衝と呼ばれていた羅刹はにんまりと口元を緩めた。よく見れば、その口の端は大きく横に裂け、無理やり縫い付けた痕がある。

「いい度胸だ。久々に楽しめそうだぜ」

甚だ巨大な二本の鎌は切れ味鋭く、月の光を受けて怪しく煌めいた。

それに対し、剥と呼ばれた血鎌の男は、にこにこ笑いながらさらに面倒な事を言い放つ。

「さつき、ボクの攻撃に気づいたのは貴方ですよ。今度は邪魔しないで頂けます？　ボク、どうしても彼女が欲しいんですよ。ね？」

「巫山戯るな」

一蹴すると、剥はそれでも笑顔のままに手にした血鎌をこちらへと放ってきた。

何の予告もなく、戦闘開始。

鎌を放つと同時に自らも凄まじい速度でこちらへ飛び込んできた。速い！

反応するのが精一杯、避けたところへ今度は衝が待っていた。大気ごと両断する大鎌が、頭上すれすれを走り抜けていく。

あんなものに少しでも触れたら、皮どころか肉まで裂けてしまう。足元を狙ってきた大鎌を避け、空に飛び上がった瞬間、喉にひやりとしたものが巻きついてきた。

「……ぐ」

頑丈な鋼の縄が喉元を締め付けた。

途方もない力で引かれ、一瞬意識が飛びかける。

「……の、やろっ……！」

刹那、半歩後退する。

一瞬縄が撓んだ隙に、首元に手をつ込み、全身を使って逆に引いた。縄の先にいた相手が体勢を崩し、完全に縄が緩んだのを見計らって何とか縄を抜け出し、咳き込む。

ほんの短い戦闘の間に、息が上がってしまっている。
血鎌の柄から長く伸びた鋼の縄をくるくると回収し、剥^{はぎ}は首を傾げる。

「あれ、また抜けられちゃいました。おかしいですね」

「おい、剥^{はぎ}、お前手加減してんじやねえだろうな？」

「違いますよ。衝^{つぎ}こそ、無族の子供如きを相手に手こずらないで下さいよ。いつまでたつてもボクがあの子に近づけないじゃないですか」

「ああ?! それは俺様の所為じゃねえだろ」

くだらない口喧嘩をする二人には、まだ余裕があるように見える。
愉^{たの}しんでいる。

羅刹族である彼らにとっては『無族』と呼ばれ蔑む俺たちヒトとの戦いでさえ、娯楽となってしまうのだ。それは、彼らが戦闘種族と呼ばれる所以でもあるのだが。

ならば、本気になる前に決着をつける以外にない。

標的を、血鎌^{はぎ}の剥^{はぎ}に絞った。

速度と間合いにさえ気を付けていれば、まだ相手になるはずだ。

先手必勝。

瞬間飛び出した俺を見ても、剥^{はぎ}は全く慌てなかった。

「あれ、やる気ですか? ボクの方を抑えても」

笑顔を崩すこともなく、彼はふっと右方向を指さす。

「衝を抑えなかったら意味がないと思いますけど?」

「?!」

視力のない右側から、殺気。

巨大な気配が襲いかかってくる。

俺が剥に狙いを絞る事が読まれていたのか。本気になる前に決着を焦りに来るのも読まれていたのだろうか。

それともただ俺の失った右を最初から狙っていたのか。

大きく両手を交差させ、大鎌を構えた衝^{つぎ}を左目の隅に捉えた。
回避する道は左しかない。

と、体重をかけた瞬間、右足に激痛が走った。
治りかけの傷口が開いた。
無茶な登山をしたせいだ。
重心が右に傾ぐ。
体勢を崩したところに、両側から交差した鎌が迫っていた。
目の前を死の影が過った。

助けてくれたのはこれまで幾度も積み重ねてきた死線を越える戦いの経験だった。
無意識に反射的に、鎌が交差する根元に自らの刃を指し込んでいた。

がきり、と鈍い音がして鎌の動きが止まる。
が、止めきれなかった勢いで鎌の刃が肉に食い込んだ。

「ぐあつ……」
腹の両側に鋭い痛みが走ったが、分断されるよりマシだ。
その隙に刀を捨て、衝と距離を置いた。

獲物を失った二本の鎌は、一瞬の楔として挟んだ俺の刀を真つ二つにへし折った。

「命だけは守ったか。賢明だな」

「……これで命を守れたなんて言わねえよ」

ぼたぼた、と地面に鮮血が散る。

腹に当てた手に、生温かいものがぬるりと触れた。

これは相当ヤバいな。

息をする度、灼熱の痛みが襲う。かなり深くやられている。下手に動けば腸が飛び出かねない。

そして手元に武器もない　万事休すか、と思った時だった。
背後で玖音の悲鳴があがった。

気を取られ、視線を遣った衝が、息を吞んで硬直する。

何だ、と痛みをこらえて振り向くと、そこには向日葵色の衣を翻

して立つ、相棒の姿があつた。

手にした何かをずるり、ずるりと引きずっている。
いつも軽快な歩みが、まるで地を這うようになっていた。
きろりと睨みつける瞳の色に、全身の血が逆流した。

「次、誰？」

にい、と口が笑みの形に歪み、手にしていた何かをどさりと地面に落とした。

先ほどまで大声でわめいていた筈の羅刹の躰だった。
さあっと背筋が凍る。

顔の半分に返り血を浴び、ふらりと立った耶八が、刀を振りかざす。顔だけではない。刀も、手も、上着も、履物さえ赤の飛沫が飛び散って、壮絶な様相を呈している。

もはや耶八自信の血なのか、返り血なのか、判別がつかないほどに。

俺は、『これ』を知っている。

失ったはずの右目が疼く。

耶八が羅刹を手につけ、次の獲物を求めた視線が辿り着いたのは、最も近くにいた相手

息を吸うだけでも走る痛みにも耐え、腹の底から声を絞り出した。

「やめろ！」

反動で激痛に襲われ、思わず地面に膝をつく。

その声に反応し、耶八の目がこちらを向いた。

標的を玖音たちから俺に変え、ふらふらとした足取りでこちらに向かってくる。

その敵意を自分に向けられたものだと思った衝と剥が臨戦態勢に入る。

が、ふっと姿を消した耶八が地面に伏せたのは、俺の方だった。
傷が開き、全身が悲鳴を上げる。

息が出来ない。

必死で声を絞りだした。

「耶八！」

その名に、ほんの一瞬だけ力が緩む。
今しかない。

「目え覚ませっ！」

左腕の力だけで背に乗った耶八ごと体を浮かせ、全身のばねを使
って逆に地面に叩きつけてやった。

ごん、と大きな音をたてて頭から地面に突っ込んだ耶八。

そのままぴたりと動きを止めたが、ほんの数秒でがばっと起き上
った。

頭を打ったせいか、ゆらゆらと左右に何度か揺れた。
それを吹き飛ばすかのようにぶる、と頭を振って。

「……青ちゃん」

きよとん、とした目がこつちを見ていた。

ようやくでこばちが落ち付いたのを見て、全身の力が抜ける。

もう駄目だ。これで立ち上がる力も残ってねえ。

腹の傷から流れ出す血がもはや許容量を越えている。

「俺まで殺す気が、馬鹿野郎」

最後にそう吐き出して、地面にどさりと倒れ込んだ。

灼熱のようだった痛みが少しずつひき、代わりに全身が急激に冷
えていく。

このままではかなり危険だろうことはわかったが、指一本動か
せうになかった。

「青ちゃん！」

でこばちの悲鳴が遠ざかっていく。

このまま意識を失ってしまえば、もう二度と目覚める事もなくて
楽だろうか。

もう意識を保つのも面倒だし、きさらと玖音の事はでこばちに任
せてしまっ

と、そこまで考えてはたと我に返った。

あの二人は、どうしている？

心臓がどくり、と脈を打った。

それに合わせて、傷口からどろりと血が流れ出た。

いかに敵が羅刹と言えども、あの短い時間ででこばちが『あれ』になるはずがない。

でこばちの理性を飛ばすような決定的な『何か』が、在ったはずだ。

いったい、何があっただんだ？

重力に任せて首を横に向け、薄眼を開けた俺は、目の前の光景に息を呑んだ。

熱を失ったはずの体の中心がかつと熱くなった。

無意識のうちに、喉の奥から咆哮があがった。

痛みは、完全に遠ざかっていた。

なにしろ、血溜まりの中に倒れていたのは、きさらだったから。

心の奥で、鬱積した澱みが嘲笑する。

だから、何か求めても口くなことないって忠告しただろ？

第七話

喉の奥と、胸の奥が焼けるように熱い。

その熱さに任せて、すでに力の抜けきっていた腕を渾身で動かし、奮い立たせた。

「天音さん、ボクの狙った子を勝手に獲らないでくださいよ」

血鎌を納めた剥の文句に、紅髪を乱した羅刹女が、赤黒く肥大した右手を翳しながら答える。

「誰がお前のもって決めたわけ？ しかも、やったのアタシじゃないって弾次だし。あれ？ 弾次、死んだ？ 死んじゃった？」

地面に倒れ伏した仲間を指さし、けらけらと笑った羅刹女は、きさらの横で茫然と立ち尽くした玖音に狙いを定めた。

「ぼやぼやしてると残りもアタシが貰っちゃうよ」

「やめろっ！」

完全に『戻ってきた』でこぼちが、二人の間に飛び込んだ。

しかし、明らかに動きが精彩を欠いている。

全身を染めるのは返り血だけじゃない。あいつ自身もどこか痛めているに違いない。

俺は震える手で、倒れた羅刹の傍に転がる刀を拾い上げた。

息が荒い。

吐く息が熱く、手脚は震えるほどに冷たかった。

「お、まだ立つか」

とんとん、と肩に大鎌を乗せた衝が言う。

「首でも跳ねりや、大人しくなるか？」

声が遠い。

距離も遠い。

薄い膜を一枚張った向こう側で響いているような声は、もはや俺の中に入ってはこなかった。

地に大きく広がる赤い円の中心に倒れたきさらの姿が瞼の裏にく

つきりと焼き付いて離れない。

心臓の音が耳元で鳴り響いている。

胸の奥の熱さと裏腹に、心は酷く冷え切っていた。

この胸の内の熱さと手足の冷たさには覚えがある。

喪失感と焦がれるほどの後悔は、鮮やかな猩々^{しやうじやうひ}緋と共に、記憶が穿ったものと同じだ。身内を喰い尽くす闇のような虚脱感が全身を包む。

心の奥に降り積もる澱^{おり}のような重みは、心の動きを奪っていった。痛みからではない震えが全身を支配した。

焦がれるほど熱い感情が胸を焼くのに、心の中は恐ろしく冷え切っていた。

だから言っただろう？ 大切なモノはいつも、俺を傷つけて消えるって

最初から諦めていればいい。

期待しなければ、願う事などなければ、大切になど思わなければ。最初から、こんな感情を味わうこともない。

気の遠くなりそうなほどの痛みと、全身を覆う倦怠感。

もう、いい。

事あるごとに俺の目の前を過っていく猩々^{しやうじやうひ}緋が、心の奥底の澱を増長させていた。

恐怖。

後悔。

喪失。

さまざまな負の感情が、痛んだ軀を蝕んでいく。

「めんどくせえ……」

最後に吐き出したのは、予防線。

体は傷ついても、心は傷つけぬ為の予防線。

失った目から涙が流れる事はない。

その代わりに、ぱたた、と血滴^{ちしずく}の落ちる音がした。

ふらついたが、辛うじて堪え、杖代わりにした刀ががりがり地

面を引っ掻いた。

「何だ、もう壊れかけじゃねえか」

衝の鎌の柄が鋭く空を裂いて突き出される。

がつん、と刀に強い衝撃があつて、自分の体が吹き飛んだ。

抵抗する力もなく、地面を滑るように転がった。

立ち上がろうと手をつくとき、じつとり濡れた感触が皮膚に浸透した。

ふっと見れば、血溜まりの中にうち伏した忍の少女の姿があつた。とても一人の人間から吐き出されたとは思えないほどの量の血が冷たく、ねっとり手に絡みついていた。本当にこれが、先ほどまで人間の中を流れていたなど信じられなかった。

血塗られた過去から襲いくる虚脱感が全身の力を奪っていく。

俺は、同じ過ちを繰り返したんだな。

全身を充たしているのは、猩々^{しやうじやうひ}緋色の過去と同じ、ほんの一握りの恐怖と、全身を蝕む後悔だった。

刀を放り出し、じわじわと浸みてくる液体の感触だけに意識を集める。

血を失った躰は、どんどん冷えていった。

ふと見れば、羅刹女の鋭い爪にかかったでこぼちが倒れ伏している。それを庇った玖音も弾き飛ばされ、短い悲鳴を上げてとんだ。

「これで終わりいゝ？ 弾次^{だんじ}に任せんじゃなかった。アイツ、手加減ヘツタクソなんだよね」

地面に転がったでこぼちを容赦なく蹴り転がし、羅刹女はがりがりと頭をかいいた。

「しょうがねえな、じゃ、トドメさして帰るか」

天を突く鬼の角を額に、衝^{つぎ}が再び両手の大鎌を構えた。

黄丹色の髪を揺らし、剥^{はぎ}も血鎌を握り直す。

紅髪の羅刹女も肥大した右手を大きく振りあげた。

抵抗することもなく、目を閉じた。

ところが。

「随分と愉しそудな」

そこへ、きつく張り詰めた弦を弾くような声が割り込んだ。
思わず声のする方を見てしまっ、そんな緊迫感とその場を支配した。

新手、か……？

闇夜から音もなく、すう、と現れたのは、息を呑むほどの存在感を持つ羅刹の女だった。

ぞつとするほどの美貌に薄く笑みをのせ。

「無族の子らか？ いや……」

怖ろしいほどに整った顔が薄明かりの中にぼおつと浮かび上がった。

燐光を放つかと思わせるほどに白い肌。

鋭い視線を頂けば、全身が硬直してしまう。

「迦羅さまあ！」

つい今まででこばちを屠^{ほぶ}っていた羅刹女が、ぱつと顔を輝かせて駆けていった。

「ふふ、このような場所で我らに刃向おうとは」

羅刹は一人昏倒しているだけだが、俺たちは満身創痍だった。
でこばちは声なく地面に沈んでいる。俺は腹を裂かれて重症、きさらは赤い池の真ん中に倒れ伏し、玖音だけは辛うじてよろよろと立ちあがり、ぴくりとも動かないでこばちに寄り添った。

玖音に揺すられ、でこばちも辛うじて顔を上げる。

この羅刹女は、確実にこの中で『最も強い』。

理屈ではなく肌で感じる何かを告げていた。

白い肌、白銀の髪。鋭い目に収まるのは獣のように閃く秘^{ひそく}色。

無機的な印象さえ与えかねない装いが、人間味を取り払うほどの美貌が、彼女を闇の中で際立たせていた。

「迦羅あ！ ふざけんな、俺様の獲物を横取りかよ、いい趣味してんじゃねーか」

衝^{つぎ}が矛先を変えた。

びきびき、と額の角に向けて血管が走り、口の端を縫い付けていた糸が切れそうに張っている。

そんな様子の衝すらも、一瞥してふっと一つ笑みを零すのみ。

羅刹女を背後に二人控えさせ、迦羅と呼ばれた白磁はくじの羅刹女は俺たちの方へと一步、踏み出し、唇の端を妖艶に上げた。

「ここで死ぬか？」

ざあっと全身の血が退いた。

絶対的に、生き物としての格が違う。

刹那にそう悟った。

「迦羅さま、アタシが殺つていい？」

嬉々と尋ねた紅髪の羅刹女に、迦羅という羅刹女の背後に控えていたうちの一人が声を上げる。

「あつ、天音あまねずるい！ 一人で勝手にあんなヤツらと行っちゃうしさ、楽しそうに戦つてるし……」

「いーじゃん、簪かんざし。アンタはずっと迦羅さまと一緒にだったんだしいく」

「私も混ぜてよ」

舞い手のように薄絹を纏った鮮やかな出で立ちで躍り出たのは、こちら目覚めるような紅髪の羅刹女だ。羅刹としては嫋たおやかで繊しなやか。その繊細さにそぐわない、両手足に嵌め込まれた重い枷がしゅりと鳴らした。

並び立つ紅髪の羅刹女たち。纏う空気はまるで正反対だというのに、対で動いているかのような印象を受けた。

「ふふ、無族にはちよつとばかし恨みがあるの」

唇に人差し指を当て、無邪気に微笑んだ羅刹は、結びあげた髪に差していた簪かんざしを引き抜いた。

「勝手に乱入してんじゃねえよ！」

「そうですよ。ボクらの邪魔をしないでくださいます？」

無論、衝と剥も黙ってはいない。

「なに、やんの？ アンタから引き裂こうか？ その口、もつと

開いて顔真つ二つにしてやるよ！」

一触即発の空気がその場を充たした。

迦羅と、もう一人の羅刹女は止める気などなさそうだ。

ともすれば共倒れになるかもしれないその場を収めたのは、第三者の介入だった。

「お待ちください」

その場に、凜とした声が響き渡った。

同時に、突如としてその場に出現したのは細く括った浅縹あさはなだの髪を翻す忍装束の女性だった。どこから飛び降りてきたわけでもない本当に、その場にふつと『現れた』。

しかし、髪の間からは鈍色にびいろをした三角の耳がぴんと立ち、後方にはふっさりとした尾まで生えている。紛れもない獣の姿は、ヒトではない。

あやかしだ。

何故このような場所にあやかしが、といぶかしむ。

あやかしは、頭を垂れ、膝をついた。

「お退きください。迦羅殿から。ここで争うことは得策ではないはず」

これだけの数の羅刹を前に一步も退かず、凜とした声音で撤退を求める、このあやかしはいったい何者なのか。

俺には全く分からないが、そのあやかしを見た迦羅は美しい顔をほんの少し歪めた。

無論、歪めたところでその美しさは損なわれなどしないのだが。

「景元かげもとの狗いぬだな。よもやこのような場所にまで足を運んでいようとは」

「此処はヒトの治める地。争いが起これば、私どもは収めねばなりません」

「ふ、あやかしが無族の何を語る」

鼻で笑った迦羅だったが、辺りを一瞥し、肩をすくめ、俺たちに

背を向けた。

「いいだろう。ここは、お前の主の顔を立ててやる……そこまで引き返すぞ」

迦羅の言葉に、衝がいきり立つ。

「何だと?! 勝手に決めてんじゃねえよ!」

辛うじて堪えていた衝の口の端の糸がぶちぶち、と切れ、耳近くまで裂ける口が大きく開かれた。

が、迦羅には全く動揺する様子も見られない。

それどころか、ひやりとした眼差しで見据え、静かに言い放った。
「何だ? お前も首を掻き切りたいのか? それならば私は一向に構わないが。それとも何か、お前の敬愛する主様の手に掛かりたいか?」

迦羅の言葉にぐう、と口を噤んだ衝は、酷く悔しそうにしながらもしぶしぶと従った。

こちら矛を収め損ねた羅刹女が、未だ退くべきか迷っているようだった。

その躊躇を身取って、ずっと控えていた羅刹女が諭す。

「^{かがり}篝、^{あまね}天音も。やめなさい。見苦しいわ」

「^{かなで}なんだと、奏!」

「迦羅様の命が聞けないの?」

冷たく言い放った羅刹女に、二人はしぶしぶ武器を収めた。

どうやら迦羅という羅刹女の命に従って全員が退くようだ。

捨て台詞でも残していくだろうか、と思ったが、衝はでこばちが地面に転がした最後の一人を肩に担ぎあげただけで、鋭い視線を残し、闇の奥へと消え去っていった。

静寂が舞い戻ってくる。風のない月夜、先ほどの死闘が嘘のようだった。

自分自身の呼吸が何よりも煩かった。

地面についた左手に、冷たい感触を覚える。

「きさら」

静かに、名を呼んだ。

たとえ、返答はないだろうと決めてかかっていたとしても。

地面に広がる染みは、明らかに致死量を越えている。その赤い水溜りに手に触れれば、その冷たさがますます心の温度を奪っていた。

ああ。

いつしか、心の奥の澱は満足したのか静まり返っていた。

玖音がでこぱちを支えてこちらに寄ってきた。

最後まで羅刹たちを警戒し、見送っていた忍装束のあやかしもきさらの傍に跪いた。

「きつ、きさらっ……！」

顔を腫らしたでこぱちが悲痛な声をあげる。

慌てて駆け寄ろうとしたが、怪我が酷いのかよろけて玖音に支えられた。

あさはなだ

浅縹色の髪をした獣は、匂いを調べるかのようにくん、と鼻を鳴らした。

そして、微かに笑んで言う。

「大丈夫よ」

両腕が血に濡れるのも構わず、彼女はきさらを血の池から助け起こした。

その時、何故かふわりと甘い香りがした。

何だろう。

まるで花のような匂いに、はっとする。

この赤い液体は、血じゃない……？

「きさらは無事よ」

やさしく囁いたあやかしの腕の中で、忍の少女が身じろぎした。

「……きさら」

思わずもう一度名を呼ぶと、ゆっくりと、霞色かすみいろの瞳に光が戻って

きた。

「……青、ちゃん……？」

慣れた声に、全身から力が抜けた。

血を流しすぎた躰は、とうに限界を越えていた。

奥底まで意識が落ちていく中、甘い香りが全身を優しく包み込んで気がした。

第八話

猩々^{しょうじょうじゆ}緋色の夢を見た。

鮮やかな緋色の世界で、優しい腕に包まれる夢だ。

俺は心の底から安堵しきっており、心の奥に不快な事を呟く澱は何処にも存在しなかった。

自分の喉から、言葉とはつかぬ声が漏れる。未だ言葉を知らなかったのか、必要ななかったのか。それとも、教えられなかったのか。意味のある言葉を紡ぐことは出来なかった。

その声に応えるように、暖かな手が頭を撫でていく。

子守唄が流れる。とんとん、と拍子をとる背の手が、微睡^{まどろみ}を誘う。

「
」

少女のような声がいったい何を呟いたのか。

その頃の俺には知る由もなかった。

もし最初からその言葉の意味を知っていれば、こんな事にはならなかったのだろうか。

はっと目が覚めた。

同時に全身のそこかしこを激痛が襲い、思わず顔を歪める。痛みはあるのに意識がはつきりしないのは、血を失ったせいだろうか。視界が霞み、この場所が何処なのかも知れなかった。

ただ、目の下に疲労の色を濃くしたきざらと、痛々しく包帯巻きにされたでこばちが俺を覗き込んでいるのだけは分かった。

安心するはずの顔を見ても、いまは息が苦しい。

心の奥に澱^{おり}が鬱積し、呼吸を妨げている。

この感覚には覚えがある気がして、漠たる記憶を手繰り寄せた。

痛みが遠ざかるのと引き換えに澱の中から引き揚げたのは、右眼と右腕を失った時の景色だった。そうだ、あの時も鮮やかな緋色で視界が染められた。

生死の境を彷徨う様な怪我を負い、床に伏した時の感覚があの時
ととてもよく似ている。

何より、心の奥に沈む^{おり}澱の感覚が。

あの時も俺は、『またやってしまった』と思っただ。

耶八^{やはち}と出会った場所は覚えていない。賽^{やい}ノ地^ちでないことだけは確
かだが、まだ右腕があった頃、今以上に各地を渡り歩いている自分
の場所に興味はなかった。

何処から現れたかも知れぬあいつは、いつの間にやら俺の後ろを
ひよこひよこことついて歩くようになっていた。

名を聞いたのも何時だったか忘れた。俺より遥かに戦闘に秀でて
いる事に気づいたのも、出会ってどれだけ経ってからだろう。

本当に自然に、あいつは俺の隣にいたから。

あいつは気まぐれで、すぐ路傍の草木に気を取られるから、常に
一緒というわけではなかったが、それでも春秋を越してあいつと寝
食を共にした。共に命にかかわる怪我を負ったのも一度や二度では
ない。背を預けて戦った事は、指折るだけでは数えられない。

いつしか俺は、心を許していた。あいつが隣にいる事で心のどこ
かに安堵を得ていた。

心の奥に降り積もった澱^{おり}が警鐘を鳴らしていたにもかかわらず。

そして、あの時は訪れた。

確か丁度、賽^{さい}ノ地^ちへとやってきてすぐの事だった。それだけはよ
く覚えている。

しかし、何が切欠^{きっかけ}だったのかは、今となっては分からない。あの
時の記憶は紗幕を通したかのように曖昧だ。もしかすると今回のよ
うに誰かを傷つけられたからかもしれないし、強い敵と戦っていた
からかもしれない。もしくは、何の切欠がなくても覚醒するのだろ
うか。

突如として籬^{たが}の外れた羅刹と化した耶八に、俺は襲われた。あの

状態の耶八の前では、抵抗するのは困難だった。凄まじい速度と凄まじい力で俺をねじ伏せた耶八は、俺の赤目を狙ってきた。

それでも、本当は避けようと思えば避けられた。

右目に刃が迫ったあの瞬間、俺は、緋色の過去に絡め取られ、心の底の澱が囁く声に身を委ねてしまったのだ。

ああ、またか、と。

また、大切なモノは俺を傷つけて消える。

欲しいなら、右眼だって右腕だって、好きなところを持っていけばいい。

一時でも平穏をくれたお前の気が、ただそれだけで済むというのなら。

すべて諦めてただ刃を見つめていた俺を、灼熱の痛みと緋色の幕が襲った。痛みより何より、全身を覆う倦怠感を拭う事が出来ず、ひどく呼吸が苦しかった事ははつきりと覚えている。

そうして俺は、片眼と片腕とを失った。

此処に救いなど存在はしない。何かを求めて命を賭けて、賭けた命と『何か』を失う狭間の土地、極楽浄土の成れの果て。

大切なモノを作るたび、俺は傷つけられて、失った。

その度、心の奥の澱は重積を増していく。

永い回想の中で夢現の縁を彷徨いながら、いったいどれほど経っただろう。

ほんの少しずつ現の側へと覚醒するようになった意識は、腹に負った傷が順調に回復している事を伝えていた。

熱心に世話を焼いてくれるきさらの背に、ふと問いかける。

「……でこばちはどうしてる？」

するときさらは、振り向いてくすくすと笑った。

「青ちゃん、青ちゃんって騒がしいから、傷に悪いし追い出しちゃったの。隣の部屋ですねてるよ」

「そうか」

「呼ばうか？」

「いい、うるさい」

そう答えると、もう一度微笑んだきさらも部屋を後にした。

静かになった部屋に、隣からでこぼちの声が響く。竹千代の甲高い声も混じるから喧嘩でもしているのだろう。やがてジジイの声がして、静かになった。

そこでようやくこの場所が草庵の奥の間である事に気づいた。

あちらこちらの記憶が曖昧だ。

羅刹と戦闘し、美しく冷酷な羅刹女と対峙したところまでは覚えている。そして、何故か知らぬあやかしが俺たちを逃した事も。

とにかく最後には無事に山を下ったらしい。

それだけで十分だった。

今は心の底に累積した^{おり}澱の事も忘れて、ただ安堵したかった。

その安堵がまた澱ませる原因になるのだと分かっているても、傷も痛みもすべてを忘れて、眠りたかった。

再び意識が浮上した時には、かなり体が回復していることを実感した。

腹の傷の痛みは引いて、血の不足による全身の気だるさも完全には言えないが払拭されていた。身体が弱れば心も弱る。身体が回復してきた今は、吐き気を伴うほどの倦怠感もほんの少し薄れていた。

縁側へ続く木戸の隙間から光が漏れている。

自分がいったいどれほどの時間横になっていたのか分からないが、腹の傷の具合から見て十日ですむ日数ではないはずだ。

いまが朝なのか昼なのか、それすらも分からなかった。

左腕に力をいれ、ゆっくりと上体を起こした。

全身が軋み、ずっと動かししていなかった関節が悲鳴を上げたが、動けない事はなかった。床から抜け出し、立とうとしたが、さすが

にまだ無理なようだ。痛いわけではなく、力が入らない。まるで歩き方を忘れてしまったかのようなのだ。

それでも膝についてずるずると縁側への木戸へ向かい、静かに開いた。

薄暗い曇天が俺を迎えた。

雨が降ってはいないようだが時間の問題だ。雨が降る直前、独特の匂いが周囲に満ちていた。杉の木が水を含んだ風に煽られ、ざわついた。

しっとりとした風溜まりの中で、きさらは縁側に腰掛け、なにやら細工をしているらしい。

俺が戸を開けて縁側に出てきた事に気づいて振り向いた。

「あ、駄目だよ、青ちゃん。まだ抜糸も済んでないんだから」
「大丈夫だ、少しくらい。動かないと体が鈍る」

縁側に腰掛け、何やら細工をしていたらしいきさらをそのまま止め、横から覗き込んだ。

「何作ってたんだ？」

「『緋珠』よ」

見れば、艶々と光る小さな緋色の珠がころころと敷かれた紙の上に転がっている。

一粒拾い、きさらの横に腰かけた。

光に翳せばまるで紅玉のように煌めいた。掌で転がせるほどの大きさしかない珠だが、どうやら中には赤い液体がぎっしりと詰まっているようだ。

見れば、彼女は細い硝子の棒を使って、瓶に詰めた濃緋（濃い）の汁液を一滴ずつ透明な膜の中に流し込んでいたのだった。
器用なものだ。

「初めて見た。忍の道具か？」

「ううん。これは私が考えたの」

またひとつ、紙の上に緋珠を転がす。

角度を変えれば血にも見えるその色に、一瞬背筋がぞわりとざわ

めいた。

「いったい何に使った？」

「見てて」

きさらは今作ったばかりの小さな紅珠を近くの杉の木に向かって投げつけた。

空を割いた珠は、ぱぁんと弾けて、赤い液体をまき散らした。その液体は方々に弾け飛び、まるで本物の血のように広がる。

羅刹たちと戦った時、倒れ伏したきさらの周囲に飛び散ったのはこれだったのか。

ざわざわ、と背中を何かが這いあがる。

鮮やかに飛び散る緋色に、再び過去を思い出しそうになり、慌てて木から目を背けた。

「これはね、本当は攻撃する時こそり相手に当てるのよ」

「敵に？」

首を傾げると、きさらは微笑んだ。

「そうしたら、大きい怪我をしたって勘違いした相手が退いてくれるかもしれないでしょう？」

ああ、そうやって使うのか。

成程、戦いを嫌う彼女らしい道具だ。

「ごめんね、青ちゃん」

「何が？」

「青ちゃんが怪我しちゃったのは私の所為だから。私が山に行かなかったら青ちゃんがこんな風に大怪我する事もなかった」

「でもその怪我を治すのはお前だろう」

「私は青ちゃんが怪我しない方がいいよ」

それ以上、返答できなかった。

きさらはそれを気にもかけないかのように続ける。

「あのね、緋珠の材料は紅の花なの。血の匂いは出せないけれど、色が似ているから」

花を材料にしているからか、どこか、甘い香りがする。

この香りには覚えがあった。

いつもきさらから漂う香りとはよく似ている。ほのかに甘い、優しい香りだ。

その香りのもとを辿って、鼻をひくつかせれば、香りのもとはずぐに分かった。

微かに色づいた唇についた香りと同じだったから。

「ああ、お前の紅と同じ匂いなのか」

「そうなの。裏の畑で紅花を育てて」

そこではつと息を止めたきさらを訝しく思い見上げると、吸い込まれそうなほどに澄んだ霞色かすみいろの瞳が近い。

「青ちゃん、ち、近……」

匂いの元を追ううち、気がつけば額を合わせるようにして近づいていた。

きさらが身じろぎする度、優しい香りが漂う。

その香に惹かれ、気を抜けばその細い肩にもたれてしまいそうになる。安堵に身を委ね、優しい霞色の瞳に頼り切ってしまいそうになる。

しかしそうする前に、心の奥の澱が警鐘を鳴らす。

きさらは目の前で微笑むのに、血溜まりの中に伏したきさらが目の前にありありと蘇る。あの瞬間、心を抉っていった喪失感も。

言ってるだろう？ 大切なモノはいつも、俺を傷つけて消えるって

分かってるよ。

もう二度と、同じ過ちは繰り返さない。

ふいにきさらから離れ、視線をそらした。

何とも言えない感情が胸の内を渦巻く。悪いものが内側から浸食してくる。

と、逸らした視線の先に、ふと漆黒の翼が翻った。

見れば、一羽の鳥が、じいっとこちらを見つめている。杉の木の枝に宿り、俺たちの一挙手一投足を子細に眺めている。

鳥など何処でも見かけるはずなのに、何故かその視線が不快だった。

「どうしたの、青ちゃん」

黙り込んでしまった俺に首を傾げたきさらには、何でもない、とだけ返答した。

抜糸も済み、かなり回復する頃には、季節がすっかりと雨にとって代わられていた。

雨の昼下がり、外に出るのも億劫で、竹千代を連れて町へと出たきさらを見送り、でこばちと二人、縁側の木戸を半分だけ開けてぼんやりと外を見ていた。

でこばちの方は長続きする雨にもうかなり退屈しているようで、何か面白いものはないかと木戸の隙間から辺りをきよるきよるしている。

すると、何か見つけたのか、嬉しそうに振り向いた。

「青ちゃん、誰か来た」

でこばちの指す方向を見れば、遙かから雨煙る中、笠が一つ、こちらへと近づいていた。こんな天候の折にこのような外れの草庵まで、殊勝な事だ。いったい、ここへ何の用があるというのだろう。

軒下に入り、笠を取った姿を見てさらに驚いた。

賽ノ地ではほとんど見かけぬ、鬚を結った壮年の男性だった。この雨の中きつちりとした袴姿で、青藍せいらんの羽織も様になる堂々たる武士だ。名のある剣豪に違いない。それも、鬚を結う習慣から考えると、北俱盧洲ほっくろしゅうの中央、江戸から来た可能性が高い。

囲炉裏端で灰をいじくるジジイは土間に顔を出す気もないらしい。代わりに俺が縁側から返答するはめになった。

「何の用スか？」

すると、その男は想像以上に深く低い声で答えを返した。

「拙者は、浅葱鷺之丞あしやぶのしやうと申す者。奇妙斎殿はいらっしゃるか」

ジジイの客じゃねえか。

「ジジ様、お客さんだよ」

でこぱちが囲炉裏端のジジイを振りかえったが、動く気配はない。
「すみません、勝手に上がってください」

「失礼する」

目礼もきびきびとしたその男は、笠を外に立て、土間からジジイのいる囲炉裏端へと入ってきた。

その男を一瞥したジジイは、面倒くさそうに火かき棒を放り出した。

「おい。青、デコ」

「なんスか」

「どっか行つとけ。邪魔だ」

しっし、と手で追い払われた。

この雨の中、いったい何処へ行けというのか。病み上がりであまり無茶はしたくないのだが。

仕方がない。回復具合を見るためにも、そろそろ身体を動かしておくべきだろう。

「行くぞ、でこぱち」

嬉しそうについてきた相棒と、久しぶりに草庵の外へと繰り出した。

第九話

草庵の付近で多少の運動はしていたものの、本格的に体を動かすのは久しぶりだ。

軒下に吊るされていた上着を取り込んで着込んだ。軒で雨を避けてはいたが、袖を通せば、濡れているわけでもないのにしっとりと冷たかった。

一ヶ月以上もあの草庵に籠っていたのだ。身体の鈍り具合は半端でない。腕を振りまわしてみるのが、しっくりこない。まるで自分のものではないように感じる。

ほんの一ヶ月。されど一ヶ月。

荒れた生活を送っていた頃に戻るには少しかかるかもしれない。

それでも、右腕を失った時ほどに時間はかからないはずだ。

降っているというよりは漂っている程度の霧雨の中、笠もなく荒れ地を往く。

「静かだね、青ちゃん」

「そうだな」

いつもなら逸れ者が厄介事を吹っ掛けてくるはずのこの場所が、気味悪いほどの静けさに包まれていた。あれからもう一ヶ月も経っている。盗賊たちは、元羅刹狩りの集団に残らず駆逐されてしまったのだろうか。

賽ノ地に現れた羅刹たち。

盗賊を狩り始めた元羅刹狩り。

半年前に羅刹族との和平が成立してから、どうにも面倒な方向へ話が進んでいるようにしか思えない。

顔に細かな雨粒があたり、髪に水滴が膨らんでいく。多少上着が濡れる程度だった雨が、徐々に強くなってきたている気がする。

どこかで雨宿りでもしようか、と思った時、ふいにあの茶屋の親

父の顔が浮かんだ。

社交辞令だとは思うが、また来い、と言っていたな。
静まり返った荒れ地を抜け、俺たちは町の方角へと向かった。

賑わいを見せるはずの町中も、雨の日ばかりはもの静かな雰囲気
に包まれていた。笠や蓑に身を隠し、いそいそと道を往く人々の足
も速い。

本降りになってきた雨粒を避け、目的の茶屋に辿り着いた俺たち
を迎えたのは、温厚な親父ではなく、騒がしい息子の方だった。相
変わらずの岡っ引き姿で、腰に十手という茶屋の店先にはおおよそ
似つかわしくない男は、でこぼちの姿を見止めるなりにこにこと笑
いかけてきた。

「よおつ、^{やはち}耶八！ 遊びに来てって言ったのに、なかなか来なかつ
たじゃねえか。何してたんだよ」

「んーとね、羅刹たちと戦って、大怪我して、休んでた」

「はあ?!」

でこぼちの答えに、茶屋の息子の雷^{らい}は眉の真ん中に大きくしわを
寄せる。

余計な事を、と思ったが面倒なので放っておく。

俺たちが何も言わないうちから湯呑に入った熱い茶と団子を数本、
丸盆に乗せて持ってきた。友人でももてなしているつもりなのだろ
うか、客として扱っていないのなら、もともと代金を払うつもりの
ないこちらとしても願ったりかなったりだ。

「おい、耶八。何だその羅刹がどうのってどういうこった？」

「きさらを探して山に入ったら羅刹がいてさ、いきなり襲われたん
だ。一生懸命戦ったんだけどあいつら、びっくりするくらい強くっ
てさあ」

「ん？ ちょっと待て、意味分かんねえんだけど。何？ 山に入っ
て羅刹がいたって？ きさらって？」

勢いで聞き返されて、でこぼちは首を傾げた。

「んー、おれも実はよくわかんないんだ！」

「何だそれ」

「でも今はもう元気だよ！ 青ちゃんも元気になったしね！」

「ん？ ならどうでもいいか」

そうして笑いあつた二人の会話のあまりの意味のなさに、力が抜ける。

駄目だ。隣で聞いているだけで疲れる。

頭痛を催してきた頭を押さえ、大きくため息をついた。

と、そこへふつと影が差した。

見上げれば、唐傘を差した浅縹色あやはいろの髪をした町娘の姿があつた。

いや、違う。町娘のような格好をしているが、ヒトではない。

雨避けの唐傘を肩に乗せ、俺を見下ろした女は、唇の端で笑んだ。

「怪我はもういいの？」

微かな獣の匂い。

以前、この場所で喧嘩を吹っ掛けてきた狐狸とは比べ物にならない化け技術だが、それでもあやかしの気配を完全には消せはしない。
「お陰さまでな」

あの時、羅刹から俺たちを逃してくれた忍び装束のあやかしだった。

「隣、いいかしら」

「どうぞ」

丁度、二人のくだらない会話を聞くのも飽きてきたところだ。

唐傘を閉じて立てかけ、あやかしは繊細な仕草で俺の隣に座つた。
このあやかしに何の事情があるか知れないが、とりあえず助けてもらったのは事実だ。礼だけは言っておくべきだろう。

「その節は、助けていただいてありがとうございます」

棒読みで礼を述べると、そのあやかしは驚いたように目を見開いた。

「なんスか」

「貴方がお礼を言うような柄には見えなかったから少し驚いただけ

よ」

そう言つてくすくすと笑つたあやかしに、でこぱちと雷がようやく気付いた。

「あ、朋香さん。ほづか 景元さまは？かげもと 一緒じゃないんですか？」
きよるきよると誰かを探すように辺りを見渡しながら。

「ごめんなさいね、今日は私一人なの。景元様なら今頃、奉行所に籠りきりよ」

かげもと
景元様。

そう呼ばれるのはこの賽ノ地で一人しかない。

ちかまつかげもと
近松景元 数年前に町奉行の職につき、荒れ果てた賽ノ地をこ

こまで再興した立役者。不良奉行と言う評判も聞くが、町人からの信頼は厚いと聞いている。

朋香と呼ばれたこのあやかしは、その町奉行がかかえる隠密の一人なのだろう。ヒトではないが、噂から察するに奉行がそのような事を気にする性分でないのは明らかだった。

なんとなく合点がいった。

「そうなんですか」

不満そうな雷の様子に、朋香というあやかしは優しい声音で、しかしはつきりと言いつつ放った。

「景元様が今、賽ノ地なぐさのちの為にどれだけ心を砕いているか、貴方にも理解出来ない筈はないでしょう？ この地にもたらされる脅威がどれ程のものか、理解できない筈はないでしょう？ あの和平によってこの地に下された処遇が如何に理不尽なものか、理解できない筈はないでしょう」

隣でぽかんと口を開けて聞いていたでこぱちが、首を傾げる。

「『脅威』って、羅刹たちのこと？ おれ、あんなにたくさん羅刹を見たの初めてだったよ。和平とかそういうのはよくわかんないけど、これからああやって羅刹がおれたちの近くに来るようになるってことなの？」

その言葉に、朋香の顔色が変わった。

「……貴方達、知らなかったのね。だからあの時、あんな場所に」
「玖音くのんも同じこと言ってたな」

「ここがどんな場所か分からないの、今日が何の日なのかは知らないでしょうけど、と。」

「あの日は確か夕刻に賽ノ河原で政府の人間と羅刹たちが話しているのを見た。羅刹たちが東山を通って帰る事は分かっていたから、きさらを迎えに行つた。それだけだ」

「もしかして『羅刹検分』の日の事か？ お前、奉行所からのお達しを聞いてなかったのかよ？！ 景元さまからのお言葉だぞ？！ 聞けよ！」

面倒だからとにかく黙っていて欲しい。

喧やかましく喚く岡っ引きの口を塞ぐため、団子を一本、無造作に突っ込んでおいて、俺は朋香というあやかしに尋ねる。

「どういう意味だ？」

「あの日は賽ノ地に最も近接した地域に居留地を構える羅刹の一団が政府との会合に応じる『羅刹検分』があるという御触れが、賽ノ地町奉行所から出ていたのよ。決して賽ノ河原と東山には近づかないように、と。これからきつとこの御触れを出す事が増えるでしょう。また景元様のお心に負担ばかりが郭大かくだいするのね」

しみみりと呟いた朋香は、でこばちに微笑みかけた。

「『和平』という一つ言葉といつても、たくさん意味があるわ。指折り数えても足りないくらいの決め事が江戸の政府と羅刹の主君の間に交わされた。もちろんその中には、ヒトに危害を加えない、という条項もある。もちろん、その盟約が何処まで守られているか知れないのは、貴方達自身が既に体感したでしょう」

自分たちが実際に対峙した羅刹の性分を考えれば、確かにヒトを襲うという方が無理な気もする。さすがに政府の人間がいれば大っぴらにはしないだろうが、俺たちのように町から離れ、山の中を歩いているようなヒトを発見すれば、即座に襲いかかるだろう。おそらく、朋香が現れたことで羅刹が退いた理由はそのあたりにある。

賽ノ地の町奉行所はそれを見越して町全体に警戒を促し、羅刹族との邂逅を防ぐ。

「いったい、和平に何の意味があつたのか。」

政府に守られる立場にない俺には関係のない事だが。

「ちよつと待つてくださいよ、朋香さん！　じゃあ、耶八とこいつは、羅刹が北俱盧洲の政府共との盟約を破つてヒトに手え出した動かぬ証拠つて事じゃ」

団子を食い終わつていきりたつ岡っ引きがうるさい。

二本目の団子を口に突っ込んでやった。

そちらをちらりとも見ず、朋香は続けた。

「羅刹との間に交わされた決め事は膨大。中でも大きいのは、ヒトの世に羅刹の拠点を誘致する事を政府が許可した事ね」

「羅刹の拠点……？」

嫌な予感がする。

きつと、盗賊狩りに遭つた時から感じていた、面倒な事になりそうだという予感が現実のものとなる。

首を傾げたでこばちとは対照的に、俺は思わず眉間にしわを寄せた。

「……貴方は敏い子ね。もう粗方の事情は呑み込んだはずよ」

皆まで言わぬのは、この場で口に出すような話題ではないからか。岡っ引きが二本目の団子を喰い終わる前に、俺は立ち上がった。

「帰るぞ、でこばち」

「えっ？　あ、うん」

話の途中にもほどがあるが、これ以上深入りすれば確実に抜けられなくなる。

だから、俺に何を求めるといふんだ？

何故、今ここで、こんな話をした？

それを聞いてしまえば最後、捕われる。

俺のこんな浅い考えなどお見通しであろう。町奉行に忠誠を捧げるあやかしは、俺たちが去つていくのを止めなかった。

「最後に一つだけ知っておいて」

止む気配を見せない雨の中に歩きだした俺たちの背に声がかかる。
「賽ノ地の人間は皆、『その事』を知っているわ。それでもこの地で普段と変わらぬ生活を続けているのはひとえに景元様のお力に依るものよ」

迷いのない眼差しに、俺は何も返答しなかった。
めんどくせえ。

自分の預かり知らぬ処で、何かが着々と進められている感じがする。

分からない事が多すぎる。
苛々する。

あの日、雷に追い立てられながら駆け渡った橋に差し掛かった。
欄干に妙なひげ面親父が立っていた。あれはいつたい何だったんだろう。と、ふと欄干を見れば、その時と同じ場所に、くるくと唐傘を回す誰かが手摺に立っていた。笠の下から細身の着流しが覗いている。不安定な手摺の上で、とんとん、と踵で拍子をとった。

明らかに不自然なその姿に、思わず立ち止まる。
「お待ちしておりました」

俺たちが立ち止まると、その傘が振り向いた。
黒で全身を纏めた細身の男が、橋の欄干に佇む。落ち付かなくさせる笑顔と、左目尻の泣き黒子ボクロには覚えがあった。

緋狐と狸休を破った時、群衆の中から俺を真っ直ぐに見ていた男だ。

ひげ親父のように川へと落下していくことはなく、とんとんと軽く欄干から降りた男は、肩に置いた傘をくるくると回しながら笑う。

「本日は、ご挨拶にあがりました」

「……何者だ」

警戒が伝わり、でこばちは背の刀の柄に手をかける。

「申し遅れました。私は『烏組』頭の烏之助かしのすけと申します」

「ようやく真打ちの登場ってわけか」

不機嫌そうな槍の女も、緋狐ひこと狸休りきゅうも、元羅刹狩りの一味『烏組』に属しているという。最も今は、盗賊狩りと言い改めるべきなのかもしれないが。

「次々面倒な相手を差し向けやがって……羅刹を狩る事が出来なくなったら次は盗賊か？ 単純な事だな」

「違いますよ」

傘を持つ反対の手で腰帯に差していた扇を広げた男は、口元を隠すようにしてさりと告げた。

「私たちが盗賊を狩るのは、これまでと同じ、政府からのご指令です。何しろ近いうち、この賽ノ地には羅刹の城が誘致されるのですから……そのために、貴方達のような盗賊は、邪魔なのですよ」

「えっ？」

隣ででこばちが驚いていたが、俺の方は予想していた事だった。

それが聞きたくなくて逃げてきたというのに。

「ですから、今日は御挨拶です。既に部下が何名か御世話になっているようですが……そうそう、今日のこの登場も部下の真似をしてみたんですよ。如何でした？」

「……あのひげ面親父もお前の一味か」

否定しないのは肯定の証。

烏組という羅刹狩りが俺たちを狙っているのはもはや疑いようもない。

「青ちゃん、今のうちにこいつ、殺やっちゃう？」

ひやりとする空気を纏ったでこばちが、刀を半分抜く。

俺が号令をかける前に、男はぴしりと扇を閉じ、俺たちにくるりと背を向けた。

「また近いうち、お会いしましょう」

「俺はもう会いたくねえ」

くすくすと笑いながら去っていく烏之介の後姿を見送って、俺は

もう逃げられない事を痛感した。

この界隈に近いうち、政府の誘致で羅刹の城が造られるというのはどうやら事実らしい。

中央の江戸からは遠く、隣の府州はすぐそこ。賽ノ地は、ヒトの住む里と雖も、羅刹にとつては重要な戦略点に成り得るだろう。

羅刹城の誘致のため、俺たちのような盗賊が邪魔になるのは時間の問題だった。

静まり返った荒地を往きながら、俺はまた心の奥の澱が騒ぎだすのを感じていた。

第十話

随分と時間をつぶして草庵へと戻ってきたつもりだったが、軒下にはまだ笠が置かれていた。先刻、ジジイを尋ねてきた鬚まげの武士は中にいるらしい。

幸い、雨は再び小降りになってきている。

「でこばち、久々にやるか」

そう言つて刀を向けると、でこばちもにと笑つて背の柄に手をやった。

「いいよ！」

摺り足で二歩、少し遠めの距離を置いた。

草庵の縁側前に開けた場所で、ぱらぱらと小さな雨粒が降りしき
る中、刀を抜いて向き合つた。足元は悪いが、それも一興。

暇さえあれば喧嘩を売られる俺たちは、向こうからやってこない
時には二人だけで『遊ぶ』ことも多い。腕が鈍らぬよう刀を合わせ、
取っ組み合いでの喧嘩を繰り返す。そうしてジジイの適当な指南か
ら独自流の剣術を編み出した。

怪我が治つたばかりでいつものようにはいかないだろうが、町ま
で散策に出たことで多少、身体がほぐれている。

何より、手の内も動きの癖もすべて知り尽くした相手だ。爪の先
ほどの間合いの差さえ把握している。

すう、と切っ先に意識を集中した。

回復していない身体がどれだけ動くか分からない。

慣らす為の軽い手合わせにするつもりだ。

でこばちは身長に似合わぬ長い刀を振り回し、間合いの遠さと素
早い動きを武器に戦う。見た目に依らずこいつは力が強く、さらに
振り回されて勢いをつけた長刀は小柄なこいつから想像できないほ
なかがたな

ど重い一撃を生み出すのだ。

だから、こいつは多人数相手に戦う事を得意としている。
何より、直情型のこいつは、必ずと言っていいほど先手を打って
くるはずだ。

「いくよ、青ちゃん！」

予想に洩れず、刀を構えたでこばちは、大きく刀を振りかぶって
突っ込んできた。

手加減一切なし。

殺す気か。

しかし、これだけ思い切りのいい一撃をかわすのは気が引ける。

こちら、左手の刀を真つ向から薙いだ。

刃毀れするほどの勢いでぶつかり合った双方の刀　水滴を飛ば
しながら交わった刃の向こうに、にいつと笑う相棒の顔。

知らず、唇の端を上げている自分がいる。

俺が半歩、間合いをきればでこばちは半歩詰めてくる。

身軽なでこばちは、縦横無尽の攻撃を仕掛けてくる。生半可な速
度ではないそれを避けるのはやっとだ。

しかし、無意識なのか意識的なのかは分からないが、でこばちは
絶対に、俺の右側に回らない。

心のどこかで俺の右眼と右腕を奪った事を負い目に思っているの
だろうか。

頭上から仕掛けてきた今も、このまま左へ抜ける気だ。

好機。

動きが先読み出来る相手ほど倒すのが簡単なものはない。

重心を軽く右にずらし、軸にして滑るように左へと蹴りを繰り出
した。

「うっ……わ……！」

下腹部を狙った足先は、辛うじて帯を掠めた。

しかし、体勢を崩したでこばちは、いったん俺から距離をとる。
が、でこばちはそこでふいに動きを止めた。

「……何か用なの？」

広いでこに皺を寄せて、草庵の方向を見ながら。

つられて視線をやれば、どうやら草庵を立ち去ろうとしているらしい先ほどの壮年武士が立てかけた笠を手にしたところだった。でこばちはその視線が気に入らなかつたらしい。

「いや、よい腕だ」

笠を被り直した壮年の男性は、雨の具合を見るようにふいと空を見上げてから軒の外へと静かに踏み出した。

じつとりと濡れた地面を踏みしめても音もしないのは分かるが、それ以上に、この男から気配を感じなかった。足運びが完璧なのだ。俺たちのような独自流とは違う、剣道を修めた者の動きだった。

「ただ惜しい哉、^{かな}剣術の基礎が足りておらぬようだ。主らはまだ、強くなる」

「ほんと？」

でこばちがぱつと顔を輝かす。

「どうやったら強くなれるの？」

「基礎を学び直す事だ。奇妙斎殿から教わってもよいと思うのだが……」

男は、懐からぱつと矢立^{やたて}を取り出し、さらさらと紙に何かを描いた。

墨が雨に多少滲んだが、読めない事はない。受け取ってみると、どうやら賽ノ地町中の地図らしかった。

「ご助力差し上げよう。出稽古は常に歓迎しておる。気が向いたら、立ち寄るといい」

そう言い残し、笠は雨の向こうへと遠ざかっていった。

笠を見送つてすぐ、紙が破れぬよう縁側にぺたりと地図を張り付けた。すでに随分滲んでしまつてはいるが、このまま乾かせば何とかなるだろう。

「何の地図だろ？」

「出稽古つつつてたからな、道場か何かまでの地図なんじゃないか

？」

乾かそうとしているのか、でこぼちは木床に張り付いた紙をふうふうと吹いている。

そんなじゃ乾かねえよ。

むしろ、髪から滴り落ちる水滴で余計に滲みが広がっている。

でこをぐりぐり押して紙から遠ざけていると、遊んでいるとでも思ったのか押し返してきた。

面倒だと思いつつも、ついむきになって押し返す。

無論それで済むはずはなく、竹千代の手を引いたきさらが町から返ってくる頃には縁側で取っ組み合いが始まっていた。

「青ちゃん！ ハチ！ 縁側で何やってるの！」

怒声にはつとすると、仁王立ちのきさらがびしょ濡れかつ泥まみれになった床を指さし、きつぱりと告げた。

「今すぐきれいにしな！」

逆らう術などない。

頂垂れたでこぼちと二人、大人しく縁側の掃除を始めたのだった。

夜になつても雨は止まなかった。さあ、という雨の音がずっと鳴り続けている。

縁側の泥をすべて片付けてから裏で行水をし、泥を洗い流した俺たちは、ようやく部屋に入る事を許された。

てっぺんで結んでいた髪をほどいてぼさぼさになったでこぼちの頭を拭いてやりながら、囲炉裏端に戻ると、竹千代が縁側に張り付けていた地図をひらひら振りながら囲炉裏の火に翳していた。ジジイはいつものように煙管を吹かしながら胡坐をかいている。

ぱちぱち、と囲炉裏の火が爆ぜる。

震えるような季節ではないが、雨の中で暴れまわり、行水を終えた身体には火が有難かった。

「湯冷めしないようにね」

「はい」

これほど長くとどまる気はなかったこの場所に、俺たちはすっかり居ついていた。

羅刹たちに大怪我を負わされたのも原因の一つだが、俺自身がこの生活に安堵を見出しているのも事実だった。

事あることに心の奥の奥の澱おりが騒ぐ。安堵の内に留まるなど、どこかで警鐘が鳴る。

はやくこの場所を出なくては、いつか俺は緋色の過去に呑み込まれてしまう。

そんな俺の胸内の焦燥を知ってか知らずか、ジジイはふいに煙管をとんとん、と囲炉裏端に当てながら唐突に言った。

「おい、青、デコ。話がある。きさらはガキ連れて奥行つとけい」
首を傾げたきさらだったが、分かった、といって竹千代を連れ、奥の間に引つ込んだ。

静かになった囲炉裏端には、ジジイが煙管を吸う音だけが響く。
この空気に耐えられないのか、すでもじもじ始めたでこばちが真つ先に口を開いた。

「ジジ様、話って何？」

「急くな、デコ」

ぴん、と煙管を弾いて飛ばされた灰は、正確にでこばちの額の中心に着地した。

「熱うちー！ 熱い！ 熱い！」

額を床に摺りつけ、涙目のでこばちを横目に、ジジイはぼそりぼそりと話し始めた。

そして、これまで興味はあったが聞く機会のなかったこの奇妙齋だとかいうジジイの過去がほんの少しだけ明かされることになった。

「……お耳？」

「ああ、そうだ」

ふーっと細く煙を吐き出しながら。

俺は、混乱した頭の中を整理していた。

このジジイは昔、北俱盧洲中央ほっきるしゅうの都、江戸の付近に居を構えていたらしい。その頃は名うての剣客で、人斬りを職業にしていたのだとか。

面倒な自慢話をかいつまんで要約すると、つまりはこのジジイは北俱盧洲中央政府の隠密、通称『お耳』として働いていたということだ。

このジジイの強さになんとか納得できた気もするが、あまりに不自然だ。

草庵に出入りし始めたのは昨日今日の話ではないのに、今日になって突然そんな話を始める意味が分からない。

「何で今頃、そんな話を俺たちにするんスか？」

「先ほど、鬚結った男が来とったろう。あやつは江戸政府のつながりのモンでな。儂わしに今さら復帰を請うてきおった」

「え、じゃあジジ様、また働くの？」

「阿呆抜かせ」

でこばちが首を傾げると、ジジイは再び灰を飛ばした。

二回目なのでうまく避けたが、落ちた灰が床を黒く焦がした。でこばちは避ける事ができて満足そうだが、これは後できさらに叱られるなとぼんやり思う。

「デコは気づいとらんだろうが、青、お前はここやこのちの賽ノ地の動きに気づいとるはずだ。ここは近いうち、政府にとっても羅刹たちにとっても重要な拠点となる。ますます荒れるだろう」

「……」

半年前の和平で決定された羅刹城の誘致。拠点を置く地に選ばれた賽ノ地。それに伴って開始された盗賊狩り。賽ノ地に現れた羅刹族。

もし本当にこのまま羅刹城が誘致されれば、俺たちが命がけで相

対したような羅刹族が当たり前に賽ノ地を闊歩する日が訪れるという事だ。

ヒトにとってもヒトならざるモノにとっても、この地が大きな意味を持つだろうことは明白だった。

それは、江戸の政府にとっても例外ではない。だからこそ、賽ノ地を自由に動ける隠密を欲しがるところだろう。

「だが、儂ももういい加減、隠居したい。羅刹族が相手となると、か弱いジジイが出る幕じゃなからう。それも、受けるなら一度江戸へ来いというお達しだ。この老体には江戸までの道のりはきつくてのう」

どこがか弱いジジイだ、何が老体だ。

喉まで出かかった言葉を呑みこんだ。

隣で同じ事を言おうとしたでこばちがぐつとこらえたのが分かつ

た 賢明な判断だ。

「だから代わりにお前ら、行つて来い」

「……はあ？」

俺は思わず、気の抜けるような声を出していた。

「お前ら、政府の側について、世のため人のために働いて来い」

一切感情の入っていない棒読みで言ったジジイは、これで終いとはかりに口を閉ざした。

「聞いた話によると、盗賊を狩ってるのは賽ノ地の町奉行所のお達し……盗賊の俺たちが政府の隠密つてのは筋が通らねえと思うんすけど」

「その辺は政府の方にも細けえ事情があんだろ。お前の関知する処じゃあない」

俺たちが政府の隠密に。

そんな面倒な事を引き受けるはずもない。

「面倒だから嫌です」

「青ちゃんが嫌なら、おれも嫌だ」

政府が羅刹族とどのような協定を結ぼうが、俺には関係ない。

盗賊狩りやら政府やら、羅刹族との厄介事に巻き込まれるのはもう御免だ。あの時のように、耶八を危険にさらし、きさらを失いかけるような目にはもう二度と遭いたくない。

心の奥の澱おりが騒ぎだす。

緋色の過去が、羅刹族と邂逅した時の色が還ってきて、全身に虚脱感をもたらした。

ああ、めんどくせえ。

「……怖いのか？」

皺の奥の目が俺を睨みつけ、一瞬息を呑んだ。

俺の中の感情が何もかも見透かされた気がした。心の奥に鬱積おひしている澱おりまでもが見抜かれそうで、どきりとした。

怖い？ 何が？

大切なものを失う事が。

目の前に飛来するのは俺を襲う耶八の姿と、血溜まりに倒れ伏したきさらの姿だった。

大切な人はいつも、俺を傷つけて消えるから

ここにいればきつと俺はまた繰り返す。

もう二度と、間違わない。

俺は返答せず、席を立った。

これ以上面倒な事になる前に、草庵を出るつもりだった。

ジジイはすうーっと長く煙を吐き出した。

「まあ、いい。気が変わったらまた来い」

背に掛けられたジジイの言葉に、返答はしなかった。

月もない雨の夜、笠もなしに外へ出た。

後ろを追ってきたでこばちが鬱陶ウットオしいと思ったのは久しぶりだった。

「ついてくんな」

振り返りもせずそう言うのと、ぴたりと足音がとまった。が、すぐにたた、と追ってくる音がした。

面倒くせえ。

追い払うのも面倒になって、無視して歩き始めた。

足音は、追いついてくることもなかったが、どれだけ早足で歩いても離れていくことはなかった。

第十一話

心の奥の澱おりが嘔おき続けている。

最初にこの澱おりを意識したのが一体いつだったのか……思い出そうとすると右耳の傷が酷く痛んだ。

でこばちに奪われた右眼と右腕と違い、この耳だけは最初から欠けていた。いったいいつこの傷を負ったのか、全く覚えていない。微かな記憶は緋色に染められていて、後悔と共に脳裏に刻まれていた。

芥子のように甘い香りが充満するあの場所で、俺に『赤は嫌い』と嘔くあれは、いったい誰だ？

頭痛が酷い。

目の前に迫る刃を握るのは、いったい誰だ……？

雨を避ける為、荒れ地に生えた杉の木の下で一晩過ごし、目を覚ました。隣には、派手な向日葵色の上着を羽織ったでこばちがすすうと寝息を立てていた。

どうやら雨は上がったようだ。晴天とは呼べなかったが、雲の多い空から雨粒が落ちてくる気配はない。夜雨の中を歩いて濡れた上着を陰になる枝にかけておいたのだが、それなりに乾いてはいるようだ。

心の奥の澱おりが騒さわぎだす前に、俺はこの場を離れる事にした。緋色の世界で目に刃が迫る夢を最近よく見る。

刃を握っているのは、隣で寝ている相棒だろうと思っていたのだが、どうやら違うようだ。

少女のような声をした彼女が、嫌いな色を狙って刃を振り落ろしたのだ。そして俺は抵抗し、刃は赤い目を逸れて

右耳の傷がずきりと痛んだ。

後ろからは眠い目を擦りながらでこばちがひよこについてくる。昨日から一度も振り返っていないが、珍しく横道にそれる事もなく俺の後をずっとついてきているようだ。

出会って間もない頃からずっとそうだ。俺が全く興味を示さなくても、こいつは勝手についてくる。

それは、俺の右眼と右腕とを奪った後も変わらなかった。

何故こいつは、俺の傍を離れないのだろうか。

右眼を獲れば、こいつも俺の隣から消えると思っていたのにいつしか俺の足は、昨日渡された地図の通りに道を辿り、町はずれに建てられた大きな道場の門へ向かっていた。

意味はない。ただ退屈だっただけだ。

盗賊狩りが進行した所為で盗賊が減り、喧嘩を売ってくる盗賊の姿はない。だからといって賽ノ地を離れる気もせず、羅刹族のいる東山に飛び込んでいくほど馬鹿でもない。

鬱憤を晴らす相手を求めている、というのが最も正解に近いのかもしれない。

昨日から立て続けにこの賽ノ地に起きている事象を知り、さらによくわからない『お耳』なる役まで押し付けられそうになって。

胸底は澱み、苛々は募り、最悪の気分だった。

後ろをひよこひよこついてくるでこばちを気に掛けるのも面倒なほどに。

到着した道場は、立派な門構えではあるがどこか寂れた印象があった。それは、道場の主がここに腰を落ちつけているわけではないからだろう。あの男は江戸政府に仕えているのだから、普段は賽ノ地ではなく江戸にいて考えるのが普通だ。

むしろ、遠方で使っていない道場を維持している方が驚きだ。

ジジイをこんな辺境まで迎えに来るのだから下っ端かと思っていたが、もしかすると浅葱鷺之丞あさぎのじょうと名乗ったあの男は思ったより高い

地位にいるのかもしれない。

「はい」

「ごんごん、と門扉を叩くと、中から幼い声が返ってきた。
しばらく待っていると、重そうな扉が少しだけ開かれた。

その扉の隙間から顔を出したのは、袴姿の少年だ。長く伸ばした黒檀こくたんの髪を後ろに細く編んでいる。黄金に近い驚色うぐいすいろの瞳が、いぶかしむ様に見上げていた。でこばちよりさらに小柄、年も俺たちよりいくらか下だろう。

「どちら様ですか？」

声変りもしていない高い声で問われ、返答に困っていると、後ろからひよこりとでこばちが顔を出した。

「でいこに来たよ！」

「出稽古……？ 父上のお知り合いか？」

不審げだが、仕方ない。

極彩色の着物の二人組が尋ねて来れば、当然の態度だろう。

「お前の父親かは知らんが、浅葱鷲之丞あさぎささのじょうというヤツに言われて来た」
「それは自分の父上の名だ」

父親の名前を出したことで安心したのか、少年は扉を開いた。

「父上　っ！　お客様がいらしているのですが、いかがいたしましたし
ようか！」

道場の建屋に向かって叫ぶと、稽古の最中だったらしい昨日の男が顔を出した。

一瞬驚いた顔をしたが、すぐに優しい顔で笑った。

「お二人共、よく来なされた。立待たちまち、道場に入っていただきなさい。
それから、居待いまちも呼んできてくれないか」

「はい、分かりました、父上」

立待たちまちと呼ばれた袴の少年は、はきはきと返事をして駆けていった。
「青殿、耶八殿。こちらへ」

自分たちの名が既に知られていた事で一瞬躊躇したが、導かれるまま道場に入った。

少し埃臭い道場は広く、冷涼な空気で満たされていた。天井近くと、足元に開かれた細長い窓から風が流れ込んでくる。

「奇妙斎殿は主らに何かおっしゃったか？」

問われたが、答えずにいると、何かを察したのか男はそれ以上聞かなかった。

「では、主らはより強くなる為にこの道場の門を叩いたと解釈してよいな？」

その言葉に、俺より先にでこぱちが返事する。

「うん！ おれ、もつと強くなりたい！」

「よい返答だ。うちの息子もこれだけ素直なら……」

目頭を押さえた男は、まなじり 眦を下げて、でこぱちの頭を撫でた。

その時、道場の戸ががりりと開けられた。

先ほどの少年と、同じ年頃の少女だった。躑躅色つじいろの着物に身を包

んだ少女の口元は笑みの形をしていたが、隣の少年と同じ黄金に近い驚色うぐいすいろの瞳は微笑わらつてはいなかった。

警戒しているのが全身から伝わってくる。

何者だ？ この少女は。

「何用ですか、お父上」

鈴を転がすような声で少女は尋ねた。

「立待たちまち、居待いまち。出稽古に來なさった青殿と耶八殿だ」

袴の少年が立待たちまち、少女が居待いまちらしい。

この男を父上と呼んでいるところから見れば、姉弟なのだろう。

口元は笑みの形をしていても冷めた目をした姉の居待は、鋭い視線で俺たちを射抜いていた。

「二人にはしばらく稽古に出ただく。立待、二人に基礎の鍛錬を教えてくれるか？」

「押忍おす」

弟の立待は十字を切って承諾した。

「居待は組手の相手をして欲しい」

「……よいですが」

不満げな居待に、親父の方も困り顔だ。
それより何より、視線だけで射殺そうとでもしているかのような
極寒の空気。俺たちがいったい何をしたというのдарう？

基礎の稽古は繰り返し。

型を身体に覚えさせるため、何度も何度も竹刀を振る。独自に剣
を学んできた俺たちが、今までやってこなかった事だ。

しかし、何もない空に向かって剣を何度も振り下ろすうち、その
動きだけに意識が集中し、無用な事は何もかも忘れられる気がした。
案外、剣の稽古は俺の性分に合っていたのかもしれない。

言いつけられた5000回の素振りを終え、いったん休息をとっ
た。

でこばちは今も、立待^{たちまち}の厳しい指導に立ち向かっているようだっ
た。

「まだ身体の軸がぶれています。重心^{じゅうしん}を低く、上体は柔らかく」

「言われたとおりにやったら動きが遅くなっちゃうんだけど」

不満を言うでこばちに、立待が首を横に振る。

「確かに、これまでの型を意識して変えれば速度は落ちるかもしれ
ません。しかし、鍛錬の後には確実に、きちんと基礎を身に付けた
型の方が速くなるはずです」

「ほんとに？ おれ、もつと速くなれる？」

「鍛錬を続ける事が出来れば」

「よし、じゃあおれ、頑張る！」

再び竹刀を振り始めたでこばちを見ると、いつの間にか隣に
親父が立っていた。

稽古用なのか、使い込まれてきたりと弱くなった袴を着こみ、常
に皺が寄っているかのような眉間には汗が滴っていた。

「本当に、今日はよく来なされた」

「来いって言ったのはそつちだったと思うんスけど？」

盗賊狩りのこのご時世、俺たちが政府から狙われる立場だという事が分かっていながら、この場へ引き入れていて大丈夫なのか俺には甚だ疑問ではあるのだが。

そう言うのと、親父は微かに笑った。

「そうであつたな。失礼した。だが……奇妙斎殿から聞いておろう。
某は主らを江戸へと連れる為に参つたのだぞ？」

「ジジイを連れに来たんじゃなかったんスか？」

「奇妙斎殿を？ 隠居なされた御仁に頼るほど、江戸の政府は切羽詰まつてはおらぬよ」

「じゃあ、最初から俺たちを……」

面倒だから儂の代わりに行って来い、といったジジイの言葉は嘘だったのか。

わざわざ回りくどい言い方をしなくても、結局断る事は分かつていただろうに。

「左様。賽ノ地に住まう奇妙斎殿の弟子で、腕のほども申し分ない。さらには、町奉行所とは敵対しておる……この辺境の地に根を張り、その土地の政治を用心するお耳として、主らほどの適任はおらぬかな」

穏やかそうな面して結構はつきり言うな、この親父。

ほとんど、賽ノ地町奉行所が怪しい行動を起こさないか見張れ、と口にしたも同然じゃねえか。

何と面倒な構図に巻き込まれてしまったのだろう。

幾つもの組織が、それぞれの目的の為に別の方向へ動いている。利益と損得、そして平穩を求めて。

複雑な関係だ。政府も一枚岩ではない事を実感させられる。

何百年にもわたる羅刹族との争いに終止符を打とうとしているのは、江戸にある中央政府の將軍だ。数年前から羅刹族との和解を願ひ、努力してきた現將軍と羅刹族の長との間には、半年前、ついに和平が交わされた。

和平の概要は定かでないが、どうやら表向き、ヒトと羅刹が争いをやめる事を指針としたもののようだ。

その条項の一つに、羅刹の拠点をもヒトの世に誘致する、というものがあつたらしい。とはいえ、戦闘民族である羅刹たちの城を江戸の近くに作らせるなど論外。

そこで、中央から遠く、またもともと羅刹たちが多く出没していた賽ノ地に白羽の矢が立てられた、というわけだ。

しかし、これまで散々羅刹からの被害を受けてきた賽ノ地の人々が、そして町奉行所がそれほどすんなり受け入れるとは思えない。まして、この地を収めている近松景元が噂通りの人物なら、一筋縄ではいくまい。

中央政府と賽ノ地の間にひと悶着在って然るべきだ。

いや、賽ノ地に新たな手駒を求めて人を遣るくらいだ。すでにその軋轢は生じてしまっているのかもしれない。もしくは、中央政府側が早々に賽ノ地全体の反乱を警戒しているのか。

なんて面倒なんだ。到底首を突っ込みたいと思えるような事態ではない。

心の底から関わりたくない。

しかしそうになると、盗賊を狩り始めたのは、いったい誰なんだ？ 元羅刹狩りに盗賊狩りの命令を下したのは、賽ノ地町奉行所なのか？ それとも、江戸の中央政府なのか？

くるくると傘を回しながら去っていった盗賊狩りの長の後ろ姿を思い出す。

ああ、めんどくせえ。

すっかり癖になってしまった、大きいため息を吐き出した。

一通りの稽古を終えた昼ごろには、居待いまちが作ったという握り飯を抱え、道場の庭でこぼちと並んで座っていた。あの居待の作ったものには毒でも入っていそうな気がしたが、でこぼちがうまそうに

頬張っているから大丈夫なのだろう。

隣の相棒は、昨日から俺が意図的に遠ざけようとしている事を完全に忘れていたのではないだろうか。いや、珍しくこいつの方から話しかけてこないと言う事は、気にしてはいるのか？

何を考えているのか、相変わらず俺には全く分らない。

いつもの距離、いつもの隣。

しかし、間には決定的な隔たりがあった。

朝は雲に覆われていた空を見上げると、ほんの少しの雲の切れ間に青色が覗いていた。

時折、思い出したように心の奥で騒ぎだす澱^{おり}は静まり返っていた。赤は嫌いだ。

しかし、空の色は好きだった。

俺の髪色が夜明けの空色だと言ったのは、他でもない、隣に座る相棒だった気がする。名も持たなかった俺の事を『青』と呼び始めたのももしかすると、でこばちが最初だったかもしれない。

「青殿」

思索にふける中、ふいに声をかけられて顔を上げると、そこに立っていたのは居待だった。

腿の半分までしか隠していない躑躅^{つつじいろ}色の着物の裾を見て、またでこばちが中見えるなどと言いださないだろうかとぼんやり思う。

「父上がこの地にいらしたのは、貴方を迎える為だとお聞きしました」

相変わらず、鶯^{うぐいすいろ}色の瞳に物騒な光を灯して。

「そうらしいな」

返答すると、居待は着物の袖を口元に当て、ふう、と悩ましげなため息をついた。

「では、手加減致しませぬよ？」

「はあ？」

「私如きに手こずるようでは羅刹相手には到底かなわぬと申し上げたのです」

一体、この少女は何を言っている？

「あれ、もしかして居待はおれたちが羅刹に負けた事、知ってるの？」

でこばちの言葉に、居待はくすくすと笑った。

「さあ、どうぞございましょう」

俺たちが羅刹と対峙した事を知っているのは、あの場で襲われた4人とあのジジイ、竹千代、それにあやかしの朋香。さらには、町奉行所の隠密である朋香から、賽ノ地の奉行所全体に知れているだろうことは想像がつく。

「羅刹は仕留め損ねた相手の元に再び現れると申します。ご用心くださいませ」

仕留め損ねた相手の元に。

その言葉でふっとさらの顔が浮かんだが、そんな筈はないとすぐに思い直した。

何より、その感情を捨てる為に俺は草庵を出たんだろう？

焦燥がざわざわと背筋を這い上がってくる。心の奥底に隠した澱が騒ぎだしていた。

第十二話

烏の^{からす}声がする。

夕刻に降り出した雨はいつしか本降りになり、凶暴なまでに道場の屋根を叩きつけていた。視界も煙るこの豪雨の中、不自然なほどに烏が啼いている。

喉元を、さわさわと焦燥が這い上がる。

落ち付かない。

扉を開ければ、雨粒に紛れた夜闇がひしひしと肌に迫り来る。鼓膜を打つのは聴覚を麻痺させるほどの轟音。轟音に掻き消えぬ甲高い烏の啼き^{からす}声。

こんな夜は大概にして善きモノはやってこない。

「どうなされましたか？ 青殿」

「いや……何も」

遅くまで稽古に付き合ってくれている立待^{たちまち}の声で、視線を外から道場の内へと向けた。

奥の方でこばちが竹刀を振っていた。言いつけ通りの回数をこなしているようだ。忍耐強く稽古を続けるのは性に合わないはずだ。しかし、強くなりたいと言う一心で黙々と稽古をこなしている。珍しい事だ。

羅刹族に完膚なきまでに負けたという経験は、思った以上にあいつの心にしこりを残しているのだろう。

俺の中に、今もくすぶる胸底の焦燥を呼び覚ましたように。

夜になっても、雨がやむ気配はなかった。それどころか、ますます強まっているようだ。

帰るあてのない俺たちは道場の隅を間借りし、床についた。

轟音が鼓膜を揺らす返しで、右耳の古傷が痛む。失くした右腕の付け根が痛む。既に失くしたはずの右眼が痛む。

少し距離を置いて転がったでこばちが、ふいに声をかけてきた。

昨日、俺が振り向かなくなってから初めての事だった。

「ねえ、青ちゃん」

返答せずにいると、もぞもぞと寄ってくる気配があつて、今度は少し近くで声がした。

「青ちゃん。青ちゃんはもうきさらとジジ様のところに戻らないの？」

不安げな声で。

振り向かなくとも表情まで分かる。眉を八の字にして泣きそうな顔をした相棒の顔が、見なくてもありありと浮かんだ。

いつもならここで振り向くのだが、俺の中に溜まった^{おり}涙がそれを赦さなかった。

「あおちゃん……」

消え入りそうな声にも、心が動く事はない。相棒がいまどれだけ傷ついているかが分かっているても、全く気が乗らない。全身を倦怠感が包み込んでいる。

自分の中にこれほど残酷な感情が在った事を、これまで知らなかった。

ぐす、と鼻をすすする音がした。

ああ、めんどくせえ。

心の底からどうでもよかった。

それどころか俺は、こいつが俺の傍からいなくなる事を望んでいる。

傷つけられて傷つく前に、傷つくところを見て傷つく前に。

竹千代を草庵へ連れていったあの日から、少しずつ、少しずつ喉元まで這い上がってきていた^{おり}涙がとうとう全身を支配した。

奥からせり上がる吐き気と倦怠感。

視界を覆い尽くす猩々^{しょうじょうじ}緋。

このまま緋色の世界に委ねて、何もかも忘れてしまいたい。俺を迎え入れてくれる人たちがいる草庵がある事も、背を預ける相棒がいる事も。

そんな倦怠感の中でも、感覚は正直だった。

屋根を打つ轟音に紛れて近づく足音を確実に捉えた。

それも一つではなく、複数。

立待か居待か、たちまち いまちと思ったがどうやら違う。彼らの足音はこれほどまでに重くない。ましてや、二人の親父がこのような敵意を放つわけがない。

外から近づく敵意に、身体を起こす。

ぐい、と両腕で赤い目を擦ったでこばちも、刀の柄に手をかけ、入口の扉に注目した。

足音が近づく。

同時に、言い争うような声も漏れている。

いかに声を霞める雨の中とはいえ、大声と敵意を垂れ流しにしながら……隠れる気がないのか、と扉をじっと見つめていると、突如、雨音と比較にならぬ腹に響く音を弾かせて扉が粉々に砕け散った。

同時に人影が飛び込んでくる。

「一番乗りい！」

「おい待て、壊したのは俺だ！」

「どうでもいい。黙るといふ事を知らんのか貴様ら」

砕けた扉の向こう、視界を遮る大粒の雨を背景に。

出来れば再会したくなかったヤツらが立っていた

元羅刹狩り集団『鳥組』からすぐみ

小柄な槍の女を筆頭に、

べにかば紅樺の着物

を腰に巻いた化け狐と、老竹おいたけの着物を着崩した化け狸。

扉を破壊したのは大槌を振り回す緋狐ひしこだろう。相変わらず重量のある槌をどすん、と道場の床に打ち付けた。

槍の女が口元に笑みを湛える。

「この日を待ちわびたぞ、盗賊」

「俺は待つてねえよ、盗賊狩り」

「抜かせ」

しゃん、と槍の先に下げた輪を鳴らした。

しかし3人ともずぶ濡れだが、わざわざこんな天気の良い日を選んで来ずともよいものを。

川に落下していったひげ面親父といい、烏組には馬鹿ばかりしかないのか。

めんどくせえ。

大きくため息。

「何事だ」

母屋の方から立待と居待の親父が声を上げながら、雨の中を駆けてくる。

見つかると面倒だ。

入口を塞ぐ3人に背を向け、床近くにある風取りの引き戸を蹴破った。

「逃げる気か?!」

何より、こんな夜中にこいつらの相手をしてやる義理がない。

喚く声は背中では無視し、細い窓からするりと外へ、脱兎の如くに飛び出した。

途端に、痛いほどの雨粒が全身を叩き、肩を凄まじい力で抑えつけられているかのような感覚に襲われた。ほんの数歩先の地面も目視出来ない。

視覚だけではない。全身を打たれ、触覚も鈍り、雨で嗅覚を奪われ、轟音で聴覚も働かない。苦行の中を往くように、現身から敬遠うつしみされていく。それは、逃げる俺も、そして追う彼らにとっても同じだった。

記憶を頼りに庭を駆け、庭石を踏み台にして天からの流れに逆らうように塀の上へと跳び上がった。

道場の辺りから辛うじて追ってきていた声はやがて遠ざかり、す

べての感覚が麻痺していった。

すべてを振り切った後も、遅れずついてくる足音は一人分だけ。それがいったい誰なのかは振り向かなくても分かっている。

脳髓を揺さぶる轟音は扉を一枚隔てた向こう側で響いているように遠く、全身を打っていた雨粒は分厚い布団を被った時のように弱まり、視界を遮っていた闇はいつしかほんのり明るく感じるようになっていた。

ただ、重かった。

手にした刀が、左右交互に跳ね上げる両足が、この上なく水を吸った上着が。

それでも、足を止める事はしなかった。

闇夜の豪雨をただ駆け抜けた。

しかし、視界の悪い中に目立つ躑躅色つじいろの衣に出くわし、足を止めた。

俺が足を止めると、離れずついてきていた足音も止まった。

さあ、と強い雨の音が耳元で鳴り響く。

唐傘をさし、道の真ん中に佇んでいたのは、先ほどまで母屋にいた少女だった。雨の中とはいえ、俺はずっと全力で駆けてきたのだ。到底、少女の足で追いつけるものではないはずだ。

相変わらず笑わない目をした居待いまひは、二つに編んだ黒檀の髪を揺らしながら、俺たちの前に佇立した。

この少女は一体、何者だ？

いぶかしむ俺を尻目に、豪雨の中でも凜と響く芯のある声で居待が告げる。

「お待ちしておりました。さあ、参りましょう」

くすくす、と笑った居待は、躑躅色つじいろの着物の裾を翻した。

「稽古にいらしたのは貴方でしょう？ 道半ば放り出すのは信条に反しませんこと？」

「……何故俺たちについてくる」

「ですから、私が稽古をつけて差し上げる為だと申しております」

「俺たちは政府の敵だ。お前の親父は江戸仕えだろう」

そう言つと、居待は肩をすくめた。

「あら、敵か味方かは問題ございませぬ。私は貴方の先達せんだつになりますのよ」

「はあ？」

眉を寄せると、居待はふつと唇の端に湛えた笑みを引つ込め、手刀で俺たちの首を狩る真似をした。

「何しろ、その首には既に逃れ得ぬ頑丈なくびきに括られておりますから」

全身を打つ雨粒より研ぎ澄まされた殺気が喉元を掠めた。

思わず、居待から距離を置く。

全力疾走したからという理由だけではなく、心臓の鼓動が速い。自分たちより年下の少女の殺気にぞつとする日が来るとは思わなかった。

知つてか知らずか、唐傘を揺らす居待が急かす。

「急ぎませんと、彼らに追いつかれてしまいますよ？ 盗賊狩りのケモノたちに」

「……」

確かにこの場に留まるのは得策ではない。それは分かっている。

しかし、この得体の知れぬ相手の言葉に乗せられて、大丈夫なのか？ 先達せんだつだと彼女は言うが、本当にそうなのか？

「どこへ向かう気だ？」

「東山へ」

その言葉で、一瞬躊躇する。

東山で羅刹族と邂逅し、腹を裂かれたのはつい先日の事なのだ。治りきつたはずの傷が疼く気がして、思わず顔を顰めた。

「政府から身を隠すには、この上ない場所だと思いませんか？」

「逆だと思うが」

羅刹族が頻繁に出没する東山は、政府の目が隅々まで行き届いていると考えてまず間違いないだろう。わざわざそのような場所に向

かう理由が分らない。

「政府は青殿が思うより羅刹族を怖れております。次の羅刹検分まであと半月、無意味な被害を出さぬ為に賽ノ地町奉行所は東山周辺からほとんどの隠密を引き揚げさせることでしょう。それより何より、羅刹が現れる場所でヒト同士とはいえ、争いを起こしたくないのも事実。もしここまで追ってくるとしたら、そうですね、あの烏から組すくみくらいでしょう」

「まるで見聞きしたような言い方だな」

そう言つと、居待はにこりと笑つた……初めてこの少女の目が笑つところを見た気がする。

「青殿、余計な事は知らぬが花ですよ」

自らほのめかしておいたくせに、釘をさす。

この少女の意図がまったく掴めない。

まるで俺が何処まで知っているのか、何処まで嵌り込んでいるか、何処まで来る気があるのかを暗に試されているかのようだ。

だが、言っている事には筋が通っている。

信じるか信じないか以前に、羅刹族と邂逅する危険を度外視すれば、最も喧嘩を売られにくい場所ではあるだろう。

面倒事からは遠ざかるのが得策。

腹を決めた俺は居待に並んで駆けだした。

唐傘を持ったまま、動きづらそうな着物を纏っているとは思えぬ速度で居待が駆ける。その足運びはやはり、親父である浅葱鷺之丞あさぎろうのじょうという男とよく似ていた。

このような形なりでも、かなりの手練である事は間違いない。

そもそも、こいつはジジイを江戸から迎えに来た男の娘だ、何か企んでいてもおかしくはない。

ああ、めんどくせえ。

面倒事から逃げるつもりが、徐々に面倒事を中心へと向かっているとしか思えない。

何か大きな力が働いている。

きつとそのうち、逃れられなくなってしまふのだろうか。
ため息と共に吐き出した空気は、雨に叩かれ、地に落ちた。

第十三話

木々の隙間を縫うように、派手な躑躅色つじいろの着物が翻る。

あのジジとまではいわないが、俺よりずっと格上である居待いまちの姿を捕えるのは容易ではない。居待が目立つ色の衣を纏うのは、盗賊狩りの女が槍の先に輪を下げるのと同じ、自らの居場所を知らせるためなのかもしれない。

目視したところで、ついて来られるならついて来いという挑発だ。もう分け入る事もないだろうと思っていた東山の山中で、俺とでこばちは『稽古』という名目で居待に縛られているのだった。雨の季節は半ばを過ぎ食糧にも困らないこの季節には夜に凍える事もなく、山籠りをするにも不自由はない。

雨も上がらぬうちから始まった居待の稽古は、修行と呼ぶに相応しかった。

一瞬でも気を抜けば背後を獲られ、鋭い武器が喉元に突き付けられる。

「青殿は考えを巡らせ過ぎる帰来があります。考えるより先に動いた時が、最も速く、巧みで、正確な動きが出来るものですよ？」

耳元に囁かれ、背筋にぞわりと悪寒が走る。

その時には既に、喉元に赤い筋が刻まれていた。正の字が2つと、短い横一文字。

十一。

修行を始めてから、俺が居待に命を獲られた回数だ。

「耶八殿は対極れんちよく。廉直れんちよくなだけでは通用せぬことも、この世の中には数多あまた存在し得るのです」

ぎゃん、と啼いて木の枝から叩き落とされたでこばちは、喉元に数え切れぬほどの正の字を刻まれている。ひらひらと逃げ回る居待に対して、幾度も戦いを挑んだ結果だ。

居待の指に嵌められているのは、鋭い爪の様なものだっただ。

見覚えのないその武器は、力加減と技さえあれば簡単にヒトの喉笛を掻き切る事が出来る。

無論、喉だけではない。

手足の末端に至るまで、腱や血管などを鋭く裂いてしまおうだろう。

間違いない。

あさぎさきのじょう

浅葱鷺之丞あさぎさきのじょうという男と、その息子の立待たちまちは誤りなく正統派の剣士であろうが、居待いまちは違う。剣士ではなく、むしろ隠密の武器と動きに近い。

もし、俺たちの先達だと言った居待の言葉を信じるとすれば、居待は

「ほら、また小難しく考えていらっしやる」

喉元に十二本目が刻まれた。

頭では分かっている。考えない方がずっと理想に近い動きが出来る事。

羅刹と対峙した時、最終的に命を救ったのは思考ではなく、無意識の感覚だった。戦闘経験で身体に染みついた動きが、結果的に最善の策を生み出した。

だからと言って、常に考えを巡らせるこの癖をすぐに直せるかと言われれば、そうでもない。

「耶八殿、策もなく敵に刃を向ける事は玉碎行為と何ら変わりませんよ？」

太い枝に腰掛け、足を組んだ居待は、地面に転がる俺たちを見下ろし、ため息をついた。

「まったく……お二人を足して、割ることが出来れば丁度よいと思うのですが」

共に修業をしながら、未だ一度も会話のない俺たちの事を、居待がどうとらえているのかは知れない。

しかし、居待には分かっているのだろう。

俺に足りない思い切りの良さを持つあいつと、あいつに足りない

思慮深さを持つ俺とが、お互いを補い合って戦ってきた事を。

そしてそれは、俺たち自身が誰よりよく分かっている。

だからこそ、行動を共にしていた。

ちらりと見やれば、隣に居るでこばちは、珍しくほんの少しぴりぴりとした空気を背負っている。口がへ字になっているし、俺の方を見ようとしていない。

怒っている事を主張しているのだろうか。

でこばちの喉元は、居待に付けられた傷で赤い輪を嵌めたようになつていた。痛々しい傷だが、それだけの回数、あいつが居待に挑んだ証拠だ。

また、空から雨粒が落ちてきた。

ついと空を見上げた居待は唐傘をさし、軽く地面に着地した。

「私はそろそろお暇します。姉上あねさまに申しつけられた分の稽古はきちんとこなしてくださいね」

「……姉上？」

眉を寄せて聞き返すと、居待は肩をすくめただけだった。

「おれ、あつちで立待たちまちに言われた稽古ひまわりいろしてくるっ」

雨の向こうへと消えていく向日葵ひまわりいろの上着を無言で見送った。

引き止める気もないし、かける言葉もない。

振り向きもしない飴色の髪は、そのまま藪の向こうへと消えていった。

そうだ。このまま、あいつの事を心の底から締め出してしまおう。

奥底に根付く澱おりにこの感情を絡め取られる前に。

そんな様子を見た居待がくすくすと笑う。

「頑なに彼を遠ざけるのですね。それは一体、何を怖れていらつしやるからなのでしょう」

何を怖れているのか。

ジジイも全く同じことを聞いた。

その問いに俺はまだ答えを持たない。

「それではまた明日、参ります」

躑躅の着物を翻し、去っていく居待も見送ると、雨の中、薄暗くなってきた東山の中で一人、佇んでいた。

物心ついた時からずっと独りで生きてきた。

今さら孤独を感じる事があるはずはないというのに 指一本を動かす事も、思考を巡らすことさえも億劫だった。もしも今、羅刹族に遭えば、一瞬で屠られるだろう。何の抵抗もせず、ただ目の前に突きつけられる刃にこの身を差し出すだろう。

全身が倦怠感に支配されていく。

もういいだろう、と澀が囁く。

「めんどくせえ……」

しとしと顔を打つ雨を、目を閉じて受け入れた。

一人雨の中、ただ立ち尽くした。

が、幾許もせぬうちに藪から飛び出してきた影に静寂を破られた。

「いたぞ！」

「?!」

はっと見れば、盗賊狩りの女がこちらを指さし、仲間を呼んでいる。雨の中、山中を駆けまわったのだろう。結いあげた髪は解れ、着物は汚れて葉や枯れ枝を引き連れていた。

もうここまで追って来やがったのか。

「さっさと来い、緋狐！ 狸休！」

女の声でケモノたちが追い付いてくるのは時間の問題だ。

先ほどまで居待の修行をし疲労している今、戦うのは得策ではない。何より、こいつらの相手は面倒。逃げる以外の選択肢はない。

刀を手近な木の幹に突き刺し、踏み台にしてそのまま枝に飛び乗った。

「待て！」

待てと言われて待つヤツがいるか。

団子屋でもそうだったが、あの女は俺に待てと言えば待つとでも勘違いしているようだ。

先ほどの居待の動きを真似て、木の枝から枝へ、なるべく地面が

藪に覆われた方向へと駆けた。

面倒な事すべて、何もかもから逃げるつもりが、何故か道場の娘を引き連れ、盗賊狩りに追われ。俺はいつたいこんな山奥で何をしているのだろう。

ため息をついたが、気は晴れない。

苛立ちが募るばかりだ。

陰鬱な感情すべてを脱ぎ捨てるかのように、ますます速度を上げた。

雨がやまない。

空の何処にこれほどの水が在るのか、疑わしくなるほどの雨が毎日降り続いていた。

俺はじつと息を殺して木の上に潜んでいた。

烏組は、羅刹との関わりを絶とうとする政府の意向と裏腹に、東山における物量作戦を展開したようで、朝から晩までそれらしい人間が山の中を幾人もうろついていた。

この雨の中、ご苦労な事だ。

気を抜いた瞬間、木の下から大声が上がる。

「いたぞ！ 青髪の盗賊だ！」

舌打ちをして刀を手にする。

そのまま下へ飛び降り、盗賊狩りの下っ端と思われる二人の男を同時に峰でなぎ倒した。声もなく倒れた男たちに向ける同情はない。命までとらぬのは、その血の匂いでヒトならざるモノを呼んでしまいそうなのがしたからという理由からだった。

声につられてぞくぞくと盗賊狩りたちがやってくる。

めんどくせえ。

この数日、ずっと逃げ回っている。

盗賊狩りに追われて別れてから、相棒の顔は久しく見ていない。

まあ、あいつの事だ。何処の誰とも知れない誰かと仲良くなって、

元気にやっているだろう。

このままあいつが俺から遠ざかってしまえばいい。そうすればきっと、怖れる事も、傷つくこともないだろうから。

居待はあの日以来見かけなかったが、得体の知れぬあの少女は今もどこかで俺たちを見ているような気がしてならない。

要らぬ思考を頭から追い出すように、大きく空気の塊を吐き出した。

追ってくる声が遠ざかるのを確かめながら藪の中を駆け抜けた。

こうして盗賊狩りたちと鬼事をしているうち、床に伏せていた間に鈍った身体は急激に回復していった。あれほどの深手を負ったのが嘘のように全身の隅々まで感覚がいきわたっているのが分かる。床に縛り付けられた日々を取り返すかのように勘を取り戻していった。

「東の尾根へ向かっているぞ！」

俺のいる位置より少し上から声が降ってくる。図らずも、盆のように窪んでいる場所に入り込んでしまっていた。見下ろされる場所からは早く離れねば、身を隠す事も出来ない。

しかし、^{ひぐね}峠を東山に移したことで、徐々にこの辺りの地形を把握しつつあった。

山の起伏。崖の位置。山道と尾根の位置関係。

この先の尾根を越えて下れば、その先は下草の生い茂る杉の林だ。そこへ逃げ込めば……。

と、その瞬間、凄まじい敵意を浴びせられ、心臓が縮み上がった。反射的に屈みこんだ頭上すれすれを、何かが通り過ぎ、地面に突き刺さった。鋭い針のようなそれは、よく見れば雨粒を弾かせて煌めく蜻蛉玉が下がっている。

刺さる簪の方向を見れば、微かに躑躅^{つづしいろ}色の裾が捕えられた。

「居待……？」

足を止めそうになったが、後ろから盗賊狩りの追う声がして、居待から遠ざかるようにそのまま足を進めた。

俺を殺す気なのか？

いや、死んだらそれまでと攻撃を仕掛けてきているのだろう。もちろん、殺す気で。

これも修行の一環です、と笑顔で告げる居待の笑わない驚色うぐいすいろの瞳が容易に想像できた。つまりは、追ってくる盗賊狩りに加えて居待からも追撃を受けると言う事だ。

なんて面倒なんだ。

居待の言葉ではないが、強制的に修行をさせられている気がして釈然としない。

などと余計な事を考えているうちに、目の前には先回りしてきたのであるうケモノの姿。

大槌を振りあげ、迫ってきた。

居待は俺をこの方向に追いこもうとしていたのだ。

「今度こそ死にやがれ！」

駆け抜ける俺自身の勢いと相まって、猛烈な速力を経た槌が迫ってきた。

突っ込めば今度は床に伏すという訳では済まない。確実に肉が爆ぜ、骨が砕けて命を落とすのは必至だ。

しかし、速度を落とすという選択肢はなかった。

髪一本でも避ける位置を読み違えれば即死。

その状況で俺は、強く地を蹴った。

大槌の間合いぎりぎりを沿うように、上へ。

目の前に斥量のある塊が迫る。

触れずとも勢いだけできれそうほどの槌の真上を、俺は寸でのところを通り抜けた。

「待ちやがれ！」

このキツネもあの女と同じように、待てと言えは待つと思っているのだろうか。ここ何日も逃げ一辺倒を貫いているのだから、そろそろ学習して欲しい。

大槌を一瞬でどこかへ消し去り、追ってくる緋狐ひこの声を聞きなが

らぼんやりと思う。

あいつは獣だ。人型を捨て、獣の姿になれば藪の中を走る俺に追いつく事など容易な筈だ。馬鹿なあいつがそれに気づく前に、どうにか振り切らねば。

尾根から峰へと方向を変えた。

東山から賽ノ地へ流れる、賀茂川支流の溪谷へと向かう。

藪を突き抜ければ、雨続きで濁流と化した川が目の前に現れた。万一、足を滑らせてもしたら賀茂川どころかその先、まだ見ぬ海まで連れ去られるかもしれない。

さて、どうにかしてあの狐を下に落としてやろうか……と、考えを巡らせた時。

「うわあああつ、緋狐おつ！ 助けてえー！」

上流から助けを求めながら、狸が流れてきた。手には何故か、しっかりと団子の串を握りしめている。

何事かと見れば、少し離れた川岸で、でこばちがいーつと狸休を見送っていた。

「おれを川に落としたお返しだっ！」

そう言うでこばちの手にも団子。

こつそりと東山を下りて、雷の店で調達してきたに違いない。

団子の餌で豪流に呑み込まれていった狸休を追って、緋狐は川岸を下流へと駆けていった。

と、でこばちははっとそこで俺の姿に気づき、慌てて林の中へと消えた。

ようやく俺の後を追う事を諦めてくれたらしい。大丈夫、あいつならきつと何処へ行っても誰かと仲良くなって、元気に暮らしているだろう。

終わりの見えない、居待の修行とやらが終わった後も。

このままお別れだ。

少し寂しい気もするが、これでいい。

きさらの元を離れ、でこばちを遠ざけ、心の奥の澱おりが落ち付いて

気分が楽になったはずだったのに、何故か胸のあたりがぐるぐると
渦巻いて酷く落ち付かなかった。

第十四話

盗賊狩りとの鬼事は、毎朝、毎夜、続けられた。

その上、居待は俺を休ませまいと奇襲を仕掛けてくる。いったい何処に潜んでいるのか、完璧に気配を消して近づく居待に、俺は翻弄されていた。

しかしある日、居待が来ているいつもの躑躅色つじいろの着物の裾に切れ目が入っていた。よく見れば、袖にも破れた痕がある。それを誰がやったかなど、聞くまでもない。

あいつだ。

この山に入った当初は全く相手にもならなかった居待を捉えるだけの力がついてきているらしい。

きつとでこばちも毎日、盗賊狩りに追われながら、居待の奇襲に遭いながら、立待に言いつけられた稽古をこなしているのだろう。しかし数を増す盗賊狩りたちが休む場所も暇も与えてはくれない。いつしか、東山へ分け入ってから半月ほどが経っていた。

その日は朝から落ち付かなかった。

久しぶりの晴れ間、と言っても湿気の多い霽もやがかつた山の空気の中に、一筋の違和感が差しこんでいた。他者を狩る何かが、藪の中へと静かに分け入ったかのような。

逆に、昨日まで見つけるなと言う方が無理な数配置されていた盗賊狩りの姿が見当たらなかった。不自然な静寂に、浮足立ってしまった。

落ち付かない気配がこの付近を探っている。狩るモノの視線を周囲に巡らせているのはいったい何者だ？

何が来ても反応できるよう、神経を張り巡らせた。

光が、音が、空気が感覚に触れる。

山全体の雰囲気ざわついている。

この感覚には覚えがあった。

そして静寂を破った大声は、盗賊狩りのものではなかった。

「見つけたつスよ！ 衝^{つぎ}さん！ 剥^{はぎ}さん！」

無意味な音量に、図らずも声の方向を向かざるをえない。

そこに在るのは、思いつく限りで最悪の状況だった。

「探したぜえ、片腕。よもや未だこの辺りをうろついていたとはな」
目の前に立っていたのは、いつか山中で遭遇した羅刹たちだった。
俺とでこばちが山に籠つてちょうど半月、今日は二度目の『羅刹
検分』の日だ。通りで朝からずっと盗賊狩りの姿を見かけない筈だ。
今日は東山へ近寄るな、という御触れが賽ノ地町奉行所から出てい
るはずだ。

「あのチビどこよ？ 俺の背中にでつけえ傷つけやがったあのくそ
チビ！」

でかい声が耳に刺さった。

背の痣を目立たせたがる羅刹には珍しく、きつちりとした瑠璃色^{るりいろ}
の着物を着こんでいる。目の辺りを濃い色の硝子^{ガラス}のようなものが覆
つていて、表情は分かりづらかったが、かなり苛立っているようだ。
あまり見覚えはないが、言葉から察するに前回の邂逅ででこばち
が倒した羅刹なのだろう。

「見つけた暁には、俺の刀のサビにしてくれるわあつ」

でかい声でそう宣言し、ぎやははと笑った羅刹。

俺に言われてもどうしようもない。

目の前には三体の羅刹が各々の手に武器を構え、俺に殺気向け
ていた。

「怪我は治ったか？ 片腕」

「……お陰さまで」

鬼の角を持つ体格のいい褐色肌の羅刹は衝^{つぎ}。両手の大鎌を振り回
して戦うこの羅刹に、俺は瀕死の重傷を負わされた。

その隣の、黄丹色おうにいろの髪をした隣の男は剥はぎ。血の色をした鎌を持ち、きさらを狙っていた男だ。相変わらずにこにこと顔に笑みを張り付けていた。

「あの子はいないんですね。今日こそはと思っていたんですけど」

「残念がらな」

自分の位置を確認し、逃げる方角を定める。

相手にすることはない。

戦闘では無理だろうが、半月の間、盗賊狩りから逃げ回った庭とも呼べるこの土地でこいつらを撒まくだけならば難しくもないだろう。逃れる隙を窺っていると、背後の藪くさががささ、と鳴った。

新手法、と振り向いた俺の目に飛び込んできたのは、鮮やかな向ひまわりいろ日葵色だった。

「あ、青ちゃん」

気の抜けるような声を出して。

約半月ぶりの再会がまさかこんな状況だとは、予測できなかった。ぼさぼさになった飴色の髪を無理にてっぺんで結んで。手足も頬も、泥まみれだ。それでも、ぼかんと俺を見たでこぼちの表情はよく見慣れた間の抜けるような笑顔で、少しほっとした。

そのまま羅刹たちに突っ込みそうになったでこぼちは、寸でのところで気づいて俺の隣に戻ってきた。

「あちゃあ……どうしょ」

「どうしようもこうしようも、見ての通りだ」

「あのさあ、実はさ、おれも」

でこぼちが身振り手振り説明しようとした時。藪の中からさらに3つの影が飛び出してきた。

「待ちやがれ、このチビ！」

「待つちやがれえ」

「無暗に追うな！ 羅刹どもに見つかったら、今度こそ烏之助うのすけさまに殺され……る……」

ケモノが二匹と、槍の女。

俺たちを探していたのだと思うが、なぜわざわざこの日だと分かっていて東山へ分け入ったのか。

本当に、馬鹿なのか？

とりあえず、前回の羅刹検分で自分たちが東山へと入ったことは棚に置く。

飛び出してきた3人は、取り囲むように並ぶ3体の羅刹の姿を目にして、空気を変えた。

「羅刹どもっ……！」

でこばちを追っていた盗賊狩りは、一瞬にしてその矛先を変えた。

『元』とはいえ、彼らは羅刹狩り集団の一員なのだ。目の前に羅刹が現れば、そちらに武器を向けてしまうのだろう。

命令で追っているはずの盗賊が、羅刹と対峙しているこの状況を、女はいつたいどう解釈したのか。

眉間にたつぷりとしわを寄せたが、判断は速かった。

「緋狐、狸休！」

「がってん」

何の相談もなく、その一言で散開した。

槍の女が俺の隣に立つ。

武器を向けるのは俺ではなく、目の前の羅刹。

「俺たちを殺しに来たんじゃないのか？」

「予定は予定だ。盗賊風情がごちゃごちゃ抜かすな。こちらにもいろいろ事情があるんだっ」

「事情？」

「貴様には関係ない！」

そう言っ、女は槍を羅刹に向けた。

問答無用で喧嘩を売ってきた盗賊狩りと、まさか共闘する日がこようとは。

女は吐き捨てるように言う。

「最悪の気分だ」

「俺もだよ」

隣に立つのは何故か敵対しているはずの盗賊狩りの女。背を預けるのは相棒と、二匹のケモノ。

あり得ない編列に、何故か笑みが零れる。

それを見た女はますます眉間にしわを寄せた。

「何が可笑しい？」

「いや、何も」

そう答えておいて、左手の刀を強く握り直した。

目の前に立ち塞がるのは3体の羅刹。

耶八にやられたはずの、声のでかい瑠璃るりの上着をきっちり着こんだ羅刹は、背に負った刀を抜き放ち、でこぱちに切っ先を向けた。

「俺の愛刀のサビにしてくれるわ！」

それはさっき聞いた。

同じ台詞を二度繰り返した、頭の悪そうな羅刹のことはさておき、俺は衝と剥に向き直った。

「おい、その盗賊。貴様は羅刹に刃を向けるだけの策でもあるのか」

羅刹から目を離さず、槍の女は問う。

無論、策などあるはずがない。

答えずにいと、女は鼻で笑った。

「巫山フザケ戯た奴だ。命を捨つる気か」

「そついうお前はどうかんだよ、盗賊狩り」

「あるわけがなかつ」

「そつちこそふざけんな」

言い返すと、女がものすごい形相でこちらを睨んできた。

とりあえず無視しておこう。

そろそろ羅刹たちも痺れを切らすころだ。

「お前ら、見たことあるぜ？ 以前まえに天音あまねたちと戦やったヤツらじゃねえか？」

大鎌を両肩に乗せた衝の言葉で、剥も小首を傾げた。

「ああ、確かに」

剥はとんとん、と軽くその場で地面の感触を確かめるかのように
数度、跳んだ。

来る。

意識を集中した。

ふっと剥の姿がかき消えた。

左目の視界の隅に赤い線が走る。

反射的に引いた刀は確実に血色をした鎌の根を捕え、手に衝撃で
痺れる感触が広がった。

「おや」

武器を合わせ、動きを止められた背後から槍の女が神速の突きを
放つ。

剥の頬を掠めた槍の切っ先はそのまま俺の眼前に迫ってきた。
慌てて身体を捻ってかわしたが、一歩間違えれば串刺しだ。

「……ちっ」

舌打ちした女は、隙を見せれば俺をそのまま殺^やる気だ。

一瞬でも味方だと勘違いした俺が馬鹿だった。

さらに女の背後から迫りくる衝に向かつて、刀を薙いだ。

紙一重で避けた女の花緑青^{はなろくしょう}の髪が一房、切れて宙に待った。

避けたか。

左手の刀を肩に担ぎ見下ろした俺を、女が睨みあげる。

「ふざけるな、この盗賊！ 殺す気か！」

「それはこっちの言い分だ、盗賊狩り」

言い争っている場合ではない。

女の背後に血色の鎌。

「避ける、馬鹿」

避けるついでに蹴り飛ばしてやる。

地面に落ちた女は恨めしそうな顔で見上げてきたが、次の瞬間、
眉を跳ね上げてこちらに突進した。

「阿呆がっ！ 背を向けるな！」

右肩に衝撃。

その直後、俺のいた場所には大鎌が深々と突き刺さっていた。
女のおかげで命拾いしたのは明白だが、感謝を述べる気はさらさら
ない。

険悪な空気が漂った。

先に折れたのは女の方。

「おい、盗賊」

「何だ」

武器を構えたまま背を合わせるように寄り、囁いた。

「手を貸せ。あっちのでかいのを先に殺^ヤる」

「どうするんだ」

「私が動きを止める。お前はその隙にヤツの腕を落とせ。もう一人
は何とかしろ」

それだけ言い残すと、女は速力を上げて衝の方へ向かった。

一人で突っ込んで、いったいどうしようと言うのか。

槍の女を追おうとした剥を切っ先で牽制^{けんせい}し、その一瞬を逃さぬよ
う、女の動きを追った。

大柄な衝と並ぶと、ますます小柄な身体が目立つ。何より、彼女
手にした槍は衝が弾いただけでも折れ飛んでしまいそうに細かった。
「俺様は剥と違って、無族の男だろうと女だろうと関係ねえ。だが、
俺様は寛大だ。死に方に望みでもがあれば、その通りにしてやるが
？」

「抜かせ。羅刹どもは私が一匹残らず狩りにとってやる」

和平の世に在ってはならない言葉を吐き、羅刹狩りの女は槍を構
えた。

間合いが違いすぎる。

如何に間合いの遠さと速さを武器に戦う女とはいえ、力任せに大
鎌を両手に振りまわしてくる衝の相手をまともにできるとは思えな
いのだが。

自分の倍ほどの間合いをとった女は、何か探るように衝の周囲を
摺り足で移動した。

「女性の相手はボクがするといつも言ってるでしょう?」

耳元で囁き、俺の横を今にも通り過ぎて飛び込んでいきそうな剥の武器を狙って弾き、慎重に留める。

間合いの遠さと剥自身の速度にさえ気を付けていれば、致命的な怪我を負う事はない。

血鎌の柄部分から伸びる縄は縦横無尽に飛び回るが、気をつけて見れば繰り返すその動きに一定の拍と軌道を見つけるのは簡単だった。

「邪魔をしないでください。前回から、本当に苛立たせるのが得意ですね、貴方は」

うまく邪魔をしながら攻撃を避ける俺に苛立ったのか、剥の細めた目がすう、と開いた。

その途端、隠していた殺気が漏れ出して思わず距離を置く。

じわりと額に汗が滲んだ。

剥と距離を置き、ちらりと女の方を見れば、今まさに幾度目かの攻撃を仕掛けるところだった。

ちらりと俺の方に合図をくれた女は、間合いよりも多く距離を置き、わざとゆっくりと槍の先を突き出した。

それまでどういった布石を置いていたのか、緩やかな速度で衝に向かった槍が衝の手に捉えられた。わざと速度を緩めている事を、こうして槍の先を手にもさせる事を目的だと気づかれぬように。

「これで、俺様たちを狩る? ふざけた無族の女だ」

槍を引き寄せられ、体勢を崩した女の頭上に大鎌が迫った。

俺と戦った時と同じだ。わざと相手の返し技を望み、結果的には完全に読んでいる返し技を打ち破ることで活路を見出す。

おそらく『その瞬間』は近い。

俺は剥から距離を置き、隙を見て衝の背後に回り込んだ。

狩人が最も無防備になる時。それは、攻撃の瞬間だ。

大鎌が女を分断しようかと言うその瞬間、女は懷から取り出した何かで鎌の刃の軌道を変えた。

あれは……扇子？

避け損ねた分、上着の裾が弾けたが、大鎌は相手を失って地面へと突き刺さる。

命を狙って振り下ろした勢いで突き刺さった鎌は、簡単には抜けない筈だ。

ぱぁん、と扇を開いた女は俺に向かって叫んだ。

「落とせ！」

言われずとも。

鎌が地面から抜かれるのとほぼ同時に、俺は渾身で刀を振り下ろした。

肉と骨を断つ感触が左手に伝わる。

俺は記憶のある限り最初からこの感触を知っていた。

「羅刹族の血は赤いんだな……」

ぼつり、とそう呟いた。

断面に赤と白の円が浮かぶ。

名残惜しさもない、羅刹から距離を獲った瞬間、その断面から真っ赤な液体が噴き出した。

断末魔の様な叫びが衝^{つぎ}の喉から迸った。

第十五話

地面にごとりと羅刹の腕が落ちた。

足元に転がってきたそれを、剥^{はぎ}は当たり前のように蹴り転がした。

「油断するからそういう事になるんですよ、衝^{つぎ}」

「剥い……」

ぼたぼたと右腕の断面から血を流した衝^{つぎ}。

びきびき、と頭に血管が太く浮かび上がり、口の端を縫い付けていた糸がぶちぶち切れた。口が裂けるように広がり、飛び散った血と相まって壮絶な様相を呈している。

そこに在るのは、生まれながらに戦いを刻まれた羅刹族の姿だった。

「殺す。もう、遊ばねえ」

どす黒く響く声。

ぞわぞわと恐怖が腹の底から湧き上がってくる。

「いいですよ、ちょうどボクも苛々していたところですよ」

細めていた目を開いた剥もこちらを向く。

ここまででは遊びだった羅刹たちが本気になった。これ以上は、一時たりとも油断できない。

今回は、前回のようにならぬ偶然が重なって逃れられると言う選択肢はないだろう。

こいつらを倒して生き延びるか、殺されるかの二択しかない。

油断していた衝の隙について片腕を落としたものの、果たして、本気になった二人の羅刹を一度に相手にすることが出来るだろうか。「気を抜くな」

そう言い放った槍の女もさすがに息が上がっている。

当たり前だ。一時とはいえ、一人で衝の相手をしていただ。長引かせれば、こちらが持たない。

それでも、翡翠の瞳に強い光を湛えた女は扇子を片手に槍を再び

構えた。

この扇子には見覚えがある。

あの、腹立たしい烏組の頭が腰帯に差していたものと同じだ。

この女も、でこばちと共闘するあの二匹の獣も、俺たちと同じように無力を感じ、これまでに修業を重ねてきたのかもしれない、と思うと、奇妙な同調を感じた。

衝が右腕の切断面を布できつく縛り上げた。痛みを感じぬはずはないと思うのだが、これで退くと言う選択肢はないようだ。

腹を括るしかない。

と、二度目の交戦を始めようとした時。

顔の横をすり抜けて、何かが飛んでいった。

視認できない速度で飛んでいったそれは、正確に剥の目を狙っていた。

飛んでくるまで、殺気も、敵意の欠片すらも感じなかった。

完璧な暗殺術だ。

避けるのが一瞬遅れた剥の右耳を、弾けるように決り取った。

次々飛んでくるそれには見覚えがある。美しい蜻蛉玉が下がる簪。かんざし

「ふふ、とっても愉たのしそうだこと」

そして、ひらりと躑躅色の着物を翻して。

「私もお仲間にいれてくださるかしら？」

舞い降りたのは、修行と言う名目で半月、俺たちを叩きのめした居待の姿だった。

また修行と言う名目で俺たちを窮地に陥れに来たのか、それとも羅刹一人を引き受けると言う意味か。何れともとれる発言に迷う。どちらの仲間だ、と問いそうになる。

先ほど盗賊狩りの女から奇襲を受けたように、居待とて味方とは限らないのだ。

何よりこいつの強さと得体の知れなさは、ここ半月で嫌と言うほど身にしみている。

「そう警戒なさらなくてください」

くすくすと笑う居待の瞳には、これまでにない冷淡さが潜んでいた。

先ほどの殺気のない攻撃といい、俺たちを手玉にとっている時とは空気がまるで違う。

居待は、簪かんざしの雨で全身に裂傷を負った剥に狙いを定めた。間違いない。居待は、羅刹を狩りに来たのだ。

裂かれた皮膚から赤い血を流し、細めていた目を完全に開いた剥もまた、居待に標的を絞った。

「今は、いつもほど優しくできませんよ」

「結構です。羅刹族に慈愛など求めておりませぬ」

次の瞬間、二人の姿が掻き消えた。

いや、辛うじて追える。

約半月、居待の動きを追い続けたせいだろうか。格段に目がよくなっている。

だからこそ分かる　あの二人は、怖ろしく速い。

「ボクから逃れられるとでも？」

剥の問いに、居待はにこりと微笑んだだけで応えた。

凄味を増した笑顔にぞくりとする間もなく、剥の鎌がくるくると翻った。

血色の鎌で引き寄せて、首を後ろから狩り取るように。

居待の鼻先に顔を近づけ、剥は言う。簪で弾けた右耳からだらだと血を流し、奇抜な色をした皮膚の間からも血を滴らせながら。

細い目を開き、破顔する。

「大丈夫です。痛いと思う前に、剥はいであげますから」
相手が痛みに気づく前に狩り取る。

きつと剥にはそれができるのだろう。

しかし、今回はかりは相手が悪かった。

「あら」

ふわりと微笑んだ居待は、刹那、剥の背後へと回った。

「私も、疾さには自信がありましたよ？」

瞬きするほどの刹那、剥の首筋を突いた居待はふわりと距離を置いた。

途端に剥の首根から噴き出すように血が飛んだ。

俺たちの喉元に数え切れぬほどの正の字を刻んだ武器は、命を奪う凶器と化し、剥の血管を切り裂いた。

剥と居待の一瞬の攻防を見届けてしまった俺と盗賊狩りの女は、目の前に衝が控えているのも忘れ、茫然と突っ立っていた。

「な、何者だあやつは」

「知らねえよ」

ただ分かっているのは、少なくとも俺とでこばちの命を狙っているわけではないということ。本気で俺たちを狩る気なら、とうに土塊と化していたはずだから。

「ふふ、他愛のない」

両手を血染めにした居待が思わずぞくりとするような表情で微笑った。

なぜだろう、初めて本当に彼女の笑顔を見た気がした。

次は貴方の番です、と言わんばかりの居待の視線に射抜かれ、俺は反射的に意識を衝に戻していた。

しかし、衝もただ茫然と刹那の結末を見届けていた。

「剥」

羅刹たちにも仲間を思う感情が存在するのだろうか　血を流して倒れる剥を見る衝の目には、何の感情も見いだせなかった。

ただ、衝は落とされた右手の傷口を抑えていた左手をはずし、地面に散らばった大鎌を一つ、拾い上げた。

くる。

女が槍の先に付けた輪がしゃん、と澄んだ音を鳴らした。

静寂に包まれる透目。

切断面に巻いた包帯に滲み出る血が、地に落ちた。

衝の瞳から光が消えた。

次の瞬間、先ほどまでとは比べ物にならない速度で大鎌の刃が迫ってきた。

辛うじて刀を横薙ぎ、鎌の軌道をずらして切断位置から身をかわす。

その鎌が、まるで豆腐に糸通すかのように静かに、深く、地面の奥深くまで突き刺さったのを見てぞっとする。

一撃でもくらえば即死だ。

避ける事だけで精一杯、反撃を繰り出す暇など与えてはくれない。このままでは体力が尽きた頃につかまってしまふ。

攻撃の合間を縫い、女は俺に接触した。

「おい、貴様」

「何だ盗賊狩り」

「あいつの弱点を教えろ」

「はあ？」

惑う問いに、思わず眉を寄せる。

「知るかそんなもん」

そんなものが分かれれば苦労しない。

しかし、女はやれやれ、とため息をついた。そして眉間にたつぷりと皺を寄せる。

「言葉を変えてやる。『お前と同じように右腕のないあいつの弱点を教えろ』」

この女、馬鹿かと思っていたがそうでもないのか？

だが、わざわざ自らの弱みを曝すのも気が退ける。

迷いは一瞬。

「……腕が一本だと、一人としか戦えねえんだよ」
ぼそりと告げた。

ああ、胸糞悪い。

聞かなくても分かるだろう、そんなこと。わざわざ俺の口から言わせた女は、にやりと笑った。

「ほう？」

言うまでもない。俺が苦手なのは多人数戦闘だ。多角的な攻撃は片目で認識しづらく、数多あまたの攻撃で右腕側に刀を振り遅れば身を削られる。

そう、初めてこの女に出遭った時、右大腿を挟まれたように。嫌悪を伴う記憶が想起し、思わず舌打ちした。笑うように裂けた口の衝から距離を置き、各々の武器を構え直した。

鋭い槍の先を、左手の刀を真っ直ぐ衝に向ける。

「右を狙え、盗賊狩り」

俺はそう言い残して先に飛び出した。

感覚を研ぎ澄ませ。

居待との修行によって極限まで高められた集中力は、殊の外正確に衝の鎌の軌道を読んだ。

掠るところか近寄るだけで切り裂かれそうな鎌の刃を正確に読み、確実に視認し、避けながら思い切って懐に飛び込む。

恐怖がないのは、二度目の死闘に感覚が麻痺してしまったからか。それとも、自分の知らないどこかに、この羅刹とやりあえるという自信が生まれたからか。

懐に飛び込んだ俺は、衝の左横腹に刀の柄で強烈な一撃を叩き込んだ。

鎌を警戒しつつも、即座にその場を離れる。

身体の大きな衝相手に、大きな一撃はいれられずとも、少しずつ体力を削いでいくことは出来る。

何より今は、一人ではない。

脇腹への強打で体勢を崩した衝の右側から、女の一撃が迫っていた。

失くして間もない右腕が、武器を求めて宙を彷徨う。

無論、手首より上で切断された右腕には大鎌などなく、失策に気づいた衝が左手の鎌を女の側に向けた時にはもう遅かった。

女の槍の先が衝の右目を抉っていた。

再び咆哮を上げて武器を獲り落とし、右眼を抑えた衝の指の隙間から、赤い液体がどろりと流れ出る。

ここで畳みかけるしかない。

左手の刀を逆手に持ち替え、低い体勢で衝へと突っ込んだ。

頭を狙って蹴りあげてきた足は身体を捻ってかわし、代わりに足の付け根を切りつける。

少しずつ、力を削いでいく。

俺と同じように右目と右腕を潰された羅刹をじわじわと追い詰めていく。

「こんの……無族の糞餓鬼どもが！」

一つずつ抵抗の手を潰されていく衝の咆哮が響き渡る。

あと少しだ。

足元に転がっていた剥の鎌を拾い上げ、血色の鎌の柄から伸びる頑丈な鋼の縄の一端を握った。

左手に持っていた刀は地面に突き刺して置き去りに、俺は血鎌を振りかざして衝の元へと駆ける。

四肢に深い傷を幾筋も刻まれ、動きが緩慢になっている衝の左手の鎌を避けて間合いを詰める。

そして、その手首に血鎌の鋼縄を引っかけた。

反対側の血鎌を近くに木に深く突き刺せば、衝の動きはほとんど制限される。

即座に刀を拾い上げて、身動きのとれない衝の元へと向かう。

「首を狩れ、盗賊！」

そう叫んだ槍の女は、懷に差していた扇子を広げ、衝の顔面に叩きつけた。

こんな時なのに、なぜか不意にきさらの言葉が脳裏をよぎる。

右腕と右目のない青ちゃんの左目を塞いで、左手を使えなくして連れ去るヒトがいたらどうなの？

そう聞いたきさらと、それは卑怯だと言い切ったでこばちと。悪いな。

俺は卑怯者だ。

右腕を落とされ、左腕を拘束され、右眼を抉られ、左目を扇で覆われた巨躯の羅刹。

左手の刀に渾身の力を込め、俺はその首根を薙いだ。

生き物の首を落としたのは初めてではない。

それでも、羅刹族であるからか、予想以上の手ごたえが俺の左手を伝って全身を痺れさせるように駆け廻った。

一瞬遅れて、腕を落とした時とは比べ物にならない量の血が噴き出した。

頭部を失った身体は、一・二度震えた後、地面へと倒れ伏した。

息が荒い。

全力の戦闘を終えた所為だ。

それでも、前は致命傷を負わされた相手に、二人掛かりとはいえほとんど大した怪我もせずに勝利を収めた。あの二人は、俺を卑怯ものだと呼ぶかもしれないが。

俺は、無意識に飴色の髪を探した。

この半月の柵も、自分の中の澱おりが騒ぐ声もすべて忘れた死闘の終わり、何もかもをはじめりに戻した状態の俺が求めたのは、あいつの姿だった。

戦いの後には、いつもあいつが隣にいたから。

「でこばち」

そう呼べば、見つけた飴色の髪が振り向いた。いつもの笑顔を湛えながら。

それだけで俺はほっとする。

足元には、相手をしていた筈の羅刹が転がっていた。しかし次の瞬間、どちゃ、と何かが爆ぜる音がした。水のようなものに何かが落ちる音。

血溜まりの中に落ちる影。よく見慣れた向日葵色ひまわりいろの上着が広がっ

て、一瞬遅れてはさりと地面に落ちた。

じわり、と滲みだしてくる鮮血。

鉄錆の匂いがした。

これは緋珠なんかじゃない、本物の血だ。

ざあっと全身の血が退いた。

「でこばち！」

きさらの時と同じ絶望感が全身を覆った。

盗賊狩りたちが何かを叫んでいるようだったが、全く耳に入らなかった。

「でこばち！　おい！」

返事はない。

全身の血が逆流した。

いったいどうしてこうなった？

何故、こいつは俺の目の前で倒れ伏しているんだ？

向日葵色ひまわりいろの上着を裂く、大きな傷が背を横断していた。

いつしか降りだしていた雨が、その血の端ををじわじわと滲ませるより速く、血が湧き出して滲みを埋めていく。

酷い怪我だ。すぐに止血しないと

しかしその時、でこばちが相手をしていた筈の羅刹が起き上った。

「く……そが……無族風情が……羅刹族に楯突くなああ!!」

口の端には血を滲ませ、きこんでいた筈の着物を片脱ぎにしている。目の部分を覆っていた筈の硝子は割れ、血の気の多そうな若い素顔が曝されていた。

背には相手を睨みつけるような痣がくつきりと浮かび上がっている。

が、その羅刹ははっと辺りを見渡し、茫然となった。

地面には居待に喉笛を掻き切られた剥と、首を落とされた衝の身体が転がっている。

「……衝さん、剥さん」

茫然と呟いた羅刹は、ふらふら、とそちらに近寄った。

ごろりと地面に転がった衝の首の傍に膝をつく羅刹を、3人の盗賊狩りが包囲した。

「逃さんぞ。あとは貴様だけだ」

息を荒くした女が告げる。

大事なモノを包み込むように、震える両手で衝の首を拾い上げた羅刹は、武器を向ける盗賊狩りたちを一渡し睨みつけた。

その視線で盗賊狩りたちが怯んだ隙に、羅刹は剥の元へと駆け、駆け抜ける勢いで刀を地面に向かって振るう。

完全に逃げの体制に入り、駆けていった羅刹は、十分に距離をとってから俺たちの方を振り向いた。

「もう、刀のサビじゃ俺の腹は収まらねえ。肉弾けて、臓腑巻き散らして、血の一滴まで絞り出して殺してやる。骨一本の形も遺すか粉々に砕けて、死に曝せ」

おっにいろ

右手に抜き身の刀、黄丹色の髪を左手に掴み、血に塗れた衝の首の角を啞えた壮絶な姿で。

最後の言葉を吐いた羅刹は、雨の向こうへと消えていった。

去っていく羅刹を見送り、俺ははっとした。

「でこばち」

じわりと滲みだす鮮血。

つい先ほどまで共闘していた盗賊狩りが何かを言っているが、全く俺の耳には届かなかった。

ただ聞こえるのは自分の心臓の音だけ。

「……耶八」

ぐったりと倒れ伏した相棒を背に負い、駆けだした。

山を下り、荒れ地を抜け　逃げ出したはずの草庵へ。

第十六話

先の戦闘で俺が倒れた時、こいつはこんな気持ちで俺を運んだのだろうか。

弱々しく力の抜けた体を草庵まで担いだのだろうか。

いつのまにか髪留めが弾け、青い髪が頬に掛かっていた。肌にとわりついてくる髪感触が気色悪い。

大粒の雨の中、なんとか草庵の前まで辿りつき、がくりと膝を折った。大きな怪我はないと言え、羅刹と戦闘した直後に全力で雨の中を駆けた代償だ。震えるほどに荒い息が声を出す事を妨げた。

雨戸が頑なに閉ざされている家に向かって、俺はかすれた声を絞り出した。

「きさら……！」

中に届くか知れない。

それ以前に、俺は何も言わずにここを去った。

彼女がまだここで待っていてくれるのかも知らない。

それでも、俺の呼びかけに雨戸が微かに開いた。

隙間に紅掛花色の髪が揺れた。
べにかけはないろ

「きさらっ」

かすれるように絞り出した声に、彼女は雨も気にせず飛び出してきた。

「助けてくれ……！」

あの時、関わる事をやめると誓ったつもりだったのに。

後についてくるでこばちが鬱陶しくて、きさらといると心落ち着かなくて。

それなのに、重傷を負ったでこばちを抱えて俺が向かった先は、きさらの元だった。

心の奥の澱が騒ぐ。

吐き気がするほどの後悔が全身を包んでいる。

雨の中を駆けただけではない。

自分の中の矛盾と澱のざわめきの所為で、今にも息が止まりそうだった。

だから言っただろう

心の奥の澱が騒ぐ。

酷く、煩い。^{ウルサ}

いつも耳を傾けてしまう澱の聲が、今は鬱陶しかった。

背に大きな傷を負った耶八。

俺が背を守るならそんな怪我を負わせやしなかった。こいつがこんな怪我を負ったのは、俺が澱の聲に耳を傾けて、こいつを自分から遠ざけようとしたせいだ。

「これで、大丈夫よ」

枕元の手桶で血を流し、手を拭いたきさらが笑った。

はっと顔をあげると、まっさらな布団の上につつ伏せに寝かされたでこばちは固く目を閉じていた。

顔色は悪く、一面を白い包帯に覆われていたが、きさらが言うのなら大丈夫なのだろう。

ほっとして全身の力を抜くと、彼女はふいに霞色かすみいろの瞳をこちらに向けた。

居心地悪く、目を逸らす。

それでも、きさらははっきりと問う。

「ねえ、青ちゃん。何が起きてるの？」

「ああ？」

振り返りすらないぞんざいな返答にも、彼女は全く怯まなかった。

「少し前から、変だよ？ 青ちゃんもハチも、急にここにいるよう

になったと思つて安心してたら、怪我ばかりするようになって。

これまでも怪我は多かったけど、最近はすごく頻繁だし、酷い怪我ばかり……たぶん、私が山に入つて羅刹族に襲われてからだと思う。何か、大変な事になつてるんじゃないかって、心配なの」

「ねえよ。何もねえ」

「嘘」

まっすぐな霞色の瞳が俺を貫いた。

それでも、何かを告げるつもりはなかった。

政府が賽ノ地に羅刹城を誘致しようとしている事はもちろん、俺たちが羅刹族と再度戦闘を繰り広げたことも、盗賊狩りに追われている事も、何より政府の隠密に巻き込まれようとしている事も。

何を聞いてもこの少女は心に深い傷を負つたろつから。

「何を隠してるの？」

だんまりを決め込んだ俺に、きさらが詰め寄つた。

声を荒げる事はなく、いつもでこばちを諭すように穏やかな芯のある響きで。

抵抗のできないモノを屠るのは卑怯者だと言つた時と同じ声音で。じつと見つめる二つの瞳が、ただ遠ざかるのを待った。

心の奥の澱を落ちつけ、吐き気がするほどの後悔を胸の内に押しとどめ、ただきさらが痺れを切らすのを待った。

俺に話す気がないととうに感じ取っているだろつに、きさらは退かなかつた。

何かを決心するようにぐつと唇を噛み、きさらは静かに告げた。

「ハチが背中に怪我するの、初めてだね」

「……っ」

「青ちゃんも、背中に大きな怪我をすることってないよね。それは、ハチが青ちゃんの背中の側にいるから？」

息を呑んだ俺を尻目に、少し目を伏せたまま淡々と続けるきさら。草庵を出ていったあの日、でこばちに冷たく当たる俺の姿をどこかで見ていたのかもしれない。

「ハチが背中に怪我をしたのは、青ちゃんがハチを守らなかったから……？」

きさらの言葉で自分自身の後悔を的確に抉られ、嫌悪が全身を駆け廻った。

衝動に任せて、きさを床に伏せる。空色の着物が翻った。

気づけば汚れた包帯の左腕が喉元を抑え込んでいた。

ほどけた髪が顔の横に掛かり、周囲の音を遮るように視界の隅にちらついた。

苦しそうな顔をしたきさらだったが、気丈に俺を見上げたままにいる。しかし、悲哀の色を灯したその霞の瞳に、非難の色はなかった。

「一つだけ、聞いていい？」

かすれた声で、きさらは告げた。

「青ちゃんは何を怖がっているの……？」

三度目の質問。

一度目はジジに、二度目は居待に。そして三度目はきさらに。

俺はまだ、答えを持たない。

霞色の瞳と俺の赤目の間に、沈黙が流れる。

永久にも一瞬にも感じられる時間だった。

やがて、諦めたのかゆっくりと目を閉じたきさらを見て、俺は彼女を解放した。

幾度か咳き込んだきさらに、俺は再び背を向けた。

最悪の気分だった。

俺の中で消化できない苛立ちを、真実を射抜いた彼女にぶつけようとしただけだ。それでもおさまらない感情がまだ胸の内を渦巻き、心の奥の澱は少しずつ浸食を続けている。

このまま、内側からのさばる何かに身を任せてしまいたい。でもそれをすれば、きさらにすべての矛先を向けてしまう。それだけは避けたかった。

無残に歪んだ感情を持て余して、床を強く殴り付けた。

「狭い部屋で暴れんな、青お！」

隣の部屋からジジイの怒声が飛んできた。

しかし、割れた床板と拳に残った痛みでは、一分の安息も得られない。

「酷い事言つてごめんね、青ちゃん」

呼吸が落ち付いたきさらはそう言った。

分かっている。

きさらが意地の悪い感情で以てあんなことを言う筈がない。あの言葉はただの挑発だ。この少女は、自分自身の心に傷をつけながら俺を非難し、心の奥を吐露させようとしたのだ。

そこまで分かっているとしても、俺は振り向けなかった。

歪んだ感情も消えはしなかった。

「いまから青ちゃんの怪我也診るから、ここで待つてて」

きさらはそう言つて部屋を出ようとした。

無論、俺は待つ気などなかった。

だからだろうか。

きさらは最後に俺にまじないをかけていった 決して草庵を離れないようにと。

「逃げないで」

戸が閉まる寸前に掛けられたその一言は、澱よりも重い鎖で俺をその場に縫い付けた。

きさらの遺した言霊で動けなくなった俺は、おそろおそろ相棒を振りむいた。

背の傷を治療する為、うつ伏せに寝かされ、胴をまっさらな包帯に包まれたでこばちが布団の上に転がっていた。

自分のしでかした事への後悔に、吐き気がおさまらない。

「でこばち」

静かに名を呼んだ。

その声に反応するように、すうっと相棒が目を開けた。

焦点の合っていない、力ない視線にどきりとした。

「……あおちゃん」

それでも、洩れた声はでこぼちのもので安心した。

「よかった……まだ、いる……」

震える手が伸びてきて、俺の上着の裾を握りしめた。

痛みもひどく、意識も朦朧としているはずなのに、その手だけは放すまいと言う意思があった。

「ごめんね」

小さな息で、でこぼちは呟いた。

「おれ、弱くて……ごめんね」

弱い？

「二回も羅刹にやられてごめん……次は、負けないから」

ほとんど意識もないだろうに、かすれる声でそう言ったでこぼちは、ますます強く俺の着物の裾を握りしめた。

「だから、あおちゃん……置いてかないで」

泣きそうな声で呟いた相棒の声が、胸に突き刺さった。

「強くなるよ、おれ。もつと強くなる」

先ほどまで全身を覆っていた激しい感情が鎮められ、力が抜けていく。

「強くなったら、おれはあおちゃんの隣にいてもいい……？」

でこぼちの声で破壊したい衝動に駆られるほどの激しい感情が凪いでいくと、そこに残ったのは後悔だけだった。

「でこぼち」

ふわふわになった髪に、ぽんと手を置いた。

これは俺の精一杯だった。

喧嘩なんてしたことがなかったから。喧嘩をしても仲直りしたいと思うような仲間はいなかったから。

この半月、喧嘩と呼べるほどの何かが俺とでこぼちの間に遭ったかは分からない。一方的に俺がでこぼち避けて、ただ悪戯に怪我をさせてしまっただけかもしれない。

鬱陶しかつたのが嘘のようだった。

自らの行動の一つ一つが思い起こされて、すべてを後悔した。

なぜあの時、俺は振り向かなかつたんだろう。

なぜあの時、こいつの声に耳を傾けなかつたんだろう。

なぜあの時、俺はこいつが居なくても自分一人で生きていけると勘違いしたのだろう。

そんな事、もう無理だと分かっていた筈なのに。

離れたくないのはこいつの方じゃなく、俺の方だと分かっていた筈なのに

「悪かった」

その言葉を、既に目を閉じていたでこばちが聞いていたかは知れない。

それでも、でこばちは俺の着物の裾をしっかりと握ったまま、決して放そうとはしなかった。

自分が何を怖がっているのかは今も分からない。

ただ分かるのは、怖れを抱く原動力が感情と別に湧き出してくる過去の幻影だという事だけ。澱おりと成って心の奥底に溜まる猩々しじょうじゆうじろ緋色の過去が、俺に怖れの枷を嵌める。

しかし、過去を振り払った時に残る自分の感情だけは一つ、分かった。

俺は、きさらやでこばちを失うのが嫌だ。

羅刹に飛び込んでいく時も、今、でこばちを担いで草庵へと戻った時も、俺を無意識で突き動かしたのは感情の方だった。

こいつときさらがいれば、俺はきっと過去の幻影に捕われる事がない。

そう思ったら、ずっと心の奥を支配していた澱おりがすうっと退いていくのを感じた。

後悔に代わって、安堵が全身を包み込む。

澱^{おり}の囁く声は聞こえない。

俺はいつしか降りてくる臉に任せ、夢の中へと誘われていた。
猩々^{しやうじやう}緋色の夢は、見なかった。

第十七話

あの日から俺はずっと立ち止まっていた。

でこぱちが眠る部屋の隅で、身動きせずにただじっと、そこに居る。

時に目を閉じて眠り、きさが運んでくる食事にはんの少しだけ手をつける。ただそれだけが生きる為の動作。

それ以外はずっと、息を殺すようにして部屋の隅に澱む暗闇に潜んでいるのだった。

後ろめたさか、ただの意地か。

逃げないで、というきさらの言葉が今も俺を此処へ縛り付けている。

自分がいつたいたいのか分からない。

でこぱちを遠ざける事をやめた自分は、この怖れから逃れるためにいつたいたいしたらいいのだろう。澱おりの声を遠ざけるために、いつたいたいしたらいいのだろう……？

考えても考えても、分からない。

「……めんどくせえ」

羅刹戦の時と同じ予防線を吐き、俺は膝に顔を埋めた。

大切なモノを遠ざけようとする記憶の澱おりと、失くすまいと足掻く感情とが反発し続け、吐き気がするほど胸の内を引っ掻きまわす。

最後に失うくらいなら、最初から何も要らないだろう、と諦めの声が囁く。

が、ふと縁側とを隔てる木戸の向こうに気配を感じて顔を上げた。何だろう。

かりかりと何かを引っ掻く音。

辺りに住むケモノだろうか。

手を伸ばして少し戸を開くと、去っていく気配がした。

外は暗闇。

その闇の向こうに、4つの光が瞬いた。

「……緋狐？ 狸休？」

呟いた名に、4つの光は軽く上下に動いた。

まるで、お辞儀でもするように。

はっと足元を見れば、ころころと何かが転がっている。

拾い上げて見ればそれは、いくつかの大きな茸きのこと立派な鰻うなぎだった。

何のことはない、羅刹を相手に共闘したでこぱちへ向けた、二匹のケモノからの見舞いの品。

もしかすると、でこぱちが怪我をしたのはあのケモノたちを庇ったせいだったのかもしれない。居待いまちの修行を経て実力をつけたあいつが、簡単に大怪我を負う筈がないだろうから。

梅雨時期とはいえ、これだけの品を集めるのは大抵の事ではなかっただろう。

キツネとタヌキが懸命に山を駆けまわる姿を想い、知らず肩が震えた。

何故、俺は震えているんだろう。

敵だったはずのケモノたちがあいつの事を心配している。共に戦った事に感謝している。ただそれだけのことなのに、何故、これほど大きく感情を揺さぶられるのだろう。

こいつならそのうち、あの狐や狸とだって仲良くなってしまうに違いない。俺はいつだったかそう思っていたことがある。

いま、本当にそうなって、俺はあいつのすごさを改めて実感した。己の感情に対して素直なあいつに、みんな不思議と惹きつけられるのだ。盗賊とは相いれない筈の岡っ引きも、盗賊狩りのケモノも、みんなあいつに惹かれてやってきた。

好きなモノを好きだと言い、大切なモノを大切だと認め、傍に居たいときはただ傍に居る。泣きたいときに泣いて、笑いたいときに

笑って、怒りたい時は怒る。

本当に素直に、真っ直ぐに、あいつは生きているから。ただそれだけのことが、俺にとってはとてつもなく難しいことなの。

『置いてかないで』という言葉が蘇り、左手でぐっと胸のあたりを掴んだ。

胸の内が苦しい。

これまでの後悔とは少し違う痛みが襲ってきた。

同じ『後悔』という言葉で表わされるその感情は、少しも不快ではなく、奥底でどろどろ足掻いていた澱を少しずつ解ほどいていく優しい痛みだった。

失った目から涙が流れる事はない。

それでもこの時、きつと俺は泣きたかったに違いない。

怖れによって無為むいに固められていた心が緩んでいく。その隙間から、どろどろと足掻いていた澱おりが流れ出していった。流せなかった涙の代わりに。

ああ、そうか。

こんなにも、簡単な事だったんだ。

心の奥に溜まった澱が邪魔をして表に出なかった感情が、ようやく姿を現した。

口にしなくては。

今すぐに。この感情が消える前に。

俺の背に古傷がないのは、いつもあいつに背を任すからだった。それはあいつも同じこと。

あいつが背に傷を負ったのは俺の所為だ。心の奥底に溜まった澱の声に耳を傾け、あいつの傍を離れたからだ。

それなのに、あいつはあんな大怪我を負った後も俺が傍に居ることを確かめ、安堵していた。

俺はちゃんとそれに応えるべきだったんだ。

転げそうになりながら部屋に飛びこむと、床の振動ででこばちは
ぱちりと目を開けた。

「どーしたの、青ちゃん」

うつ伏せのまま笑い、見上げてきた相棒に、今度こそ聞いてもら
わなくては。

「でこばち」

ぼん、と頭に手をのせると、でこばちはくすぐったそうに笑う。
本当に心から嬉しそうに笑う。

「……ごめんな」

今度はちゃんと届いただろうか。

両の耳で聞いただろうか。

「置いていこうとしてごめん」

でこばちの頭の上に置いた手が震えた。

「お前が話しかけても返事しなくてごめん。お前は俺を呼んだのに
振り向かなくてごめん。お前の背中、守ってやれなくて、ごめん」
全部謝りたかった。

とてもでこばちの顔は見られず、左手をふわふわの髪の上に置い
て、俯いたまま告げることしかできなかった。

「……別々に生きていこうとしてごめん」

でこばちが見上げているのが分かった。

俺は顔を上げられなかった。

それでも、いま、この感情を吐露しなければずっとこのまま、心
の奥底でどろどろ足掻く澱から二度と抜け出せないような気がした。
「俺は、ずっとお前に頼って生きてたつてのに、一人で生きていけ
るって勘違いしたんだ」

戦う時は背を預け合い、食べ物は半分に、怪我をするときは一緒。
こいつは俺に足りない思い切りの良さを補い、俺はこいつに足りな
い思慮深さを補う。戦いのクセも正反対。性格だって似ているとこ
ろなんてありはしない。

「ごめん」

幾度目か知れない懺悔が響く。

俺はきつと、一生、こいつの目に映る世界を理解することは出来ないだろう。思考の欠片だって共有することはないだろう。

だから俺たちは共に在ったんだ。

そう思ったら、気づかぬうちに口からぼろりと言葉が零れた。

「……俺はお前になりたいよ」

本当はきつと、真直ぐで正直で、素直なでこばちがうらやましくて仕方がなかった。

もし俺がこいつのように素直だったら。もし俺が思うままに行動できていたら。

こいつが傷つくこともなかったのに。

俺は、そうまでしてこいつを傷つけたくないと思うほどに、この相棒を守りたいと思っていたはずだったのに。

こんなにも気づくのが遅かった。

でこばちが怪我で倒れてからずっと消えない後悔が、喉もとで渦を巻く。

しかし、俺の言葉を聞いたでこばちは、首を傾げた。

「青ちゃんがおれになつたら、おれは青ちゃんになつたらいいの？ それ、楽しそうだね！」

予想外の言葉に驚いてはつと顔をあげた俺の目に飛び込んできたのは、嬉しそうに笑う相棒の姿だった。

痛々しく包帯巻きになつていても、治っていない怪我の痛みで起き上がれなくても、目の前の相棒はいつものように笑っていた。

「でもさ、青ちゃんが青ちゃんじゃなくなるのは、やだな」

なんの銜てらいもなく、当たり前のように言われて、俺は茫然とした。当たり前前の言葉。

きつとこいつにとって、何の特別もない言葉。

まったくもう、どうしてお前は

震えていた手から、強張っていた肩から力が抜けた。

くだらないことを考えていた自分が馬鹿だった。

「本当にお前は……」

俺の髪が夜明けの空色だと言った。

赤色の嫌いな俺に、青という名をくれた。

どうしてこいつは、俺が望むモノを知っているんだろう。

伝えなくては。

あのケモノたちの想いに触れて露出したこの感情が、澱に呑み込まれて再び隠れてしまう前に。

俺が、この素直な感情を忘れてしまう前に。

素直な感情を口に出す事を拒んでしまう前に。

「なあ、でこぱち」

「なあに、青ちゃん」

「……まだ、俺に愛想を尽かしてなかったら、でいいんだ」

その言葉を口に出すのが怖かった。

大切なモノを大切だと認めるのが本当に怖かった。

大切だと認めてしまえば、失った時に傷つくから。

それでも、その怖れを越えるほどに熱い感情が澱を破って心の奥からあふれ出していた。

「俺の前から消えないでくれ」

心の底から絞り出したのは、たった一つの望みだった。

このままでこぱちが姿を消せばいい、なんて本心なんかじゃない。本当は消えて欲しくなんてない。

耶八が俺の右腕を奪った時に、俺はその感情を封印しただけだ。

大切なモノは、いつも俺を傷つけて消えるから

傷つけられたくなくて、消えて欲しくなくて。

心の底から怖れたのに、その感情を口に出すことなく澱の奥底に沈めてしまった。

口に出してしまえば、失った時の辛さが倍増すると知っていたか

ら。

猩々緋色の過去が、大切なモノを作ることと頑なに拒むから。面倒くさいと予防線をひきながら、大切なモノを大切だと認める事を諦めた。

「おれは消えないよ」

頭に載せた俺の左手の上にでこぼちの手が重なった。

撫でて撫でてとせがむように、俺の手を掴んで左右に動かす。仕方ない。

俺はやんわりと左手を動かした。

「もっと強くなるよ。誰にも負けないように強くなる」

言っているうちに眠くなってきたしまったのか、頭を撫でる手の感触を楽しみながら、でこぼちの瞼が下りてくる。

「青ちゃんの背中へ、おれが守るんだ」

うとうとし始めたでこぼちがまた眠りに就くのは時間の問題だ。

置いてかないで、と言った時は泣きそうだったその顔が、今はひどく満ち足りた。

もう十分だ。

こいつが幸せそうならそれでいい。

本当にそれでいいのか、と澀が騒ぐ。

しかし、怖れを受け入れる事を覚悟した俺は、その言葉に流されなかった。

俺はこいつの隣にいる事を決意した。だから、そこにあるべきなのは、失くすことを怖れて逃げようとするのではなく、失くさない為を守るうとする強い意思だ。

大丈夫。

大丈夫だ。

きつと、こいつとなら大丈夫。

丸盆に湯呑をのせ、きさらが部屋に入ってきた。

先ほどの俺の言葉を部屋の外で聞いていたのかどうなのか、その目は少しだけ赤かった。

「大丈夫だよ、青ちゃん。ハチは青ちゃんの傍を離れたりしないよ」丸盆をでこばちの枕元に置き、きさらは微笑んだ。

ふわりと優しい香りが俺を包む。

ほのかに甘い紅花の香り。

「きさら」

「なに、青ちゃん」

首を傾げたきさらの喉もとには、未だ消えぬ痣があった。

俺がつけた痕だ。

胸が苦しくなった。

そして、その苦しさから逃れるように、驚くほど素直な言葉が滑り落ちた。

「……お前もいてくれるのか？」

はっと顔を上げたきさらの霞色の瞳が俺を映す。

驚いた顔をしたきさらだったが、すぐにその顔は笑顔に崩れた。

霞色の目に、いっぱい涙をためながら。

「いるよ。ずっといる。青ちゃんが嫌だって言っても、いる」

何でお前が泣くんだよ。

「私もハチも、青ちゃんの前からいなくなったりしないよ。消えたりしない。傷ついたりしない。だから青ちゃんもいなくならないで」でこばちと同じように、緋色の着物の裾をきゅっと握って。

きさらは震える声でそう告げた。

「……ごめん」

喧嘩している俺とでこばちを見て、誰より傷ついたであろう少女に謝った。

腕で顔を覆って肩を震わせる少女を見て、まるで泣けない俺の代わりに泣いてくれているようだ、と少し嬉しく思った俺はきつと不謹慎だ。

それでも、穏やかに微笑む自分がいる。

でこぱちが完全に眠ったのを確認し、左手を今度はきさらの頭へのせた。

俺の腕は一本しかないから、もしかすると二人を同時に守ることは出来ないのかもしれない。こうして、一人ずつしか頭を撫でてやれないように。

それでも、俺の右腕を持っていったでこぱちが、俺の背を守ると言ってくれたから。

ゆっくりと頭を撫でていると、少しずつきさらの震えが止まってきた。

俺は、警鐘を鳴らす心の奥の奥の澱^{おり}に逆らった。大切なモノがいつか俺を傷つけて消えるという、確信にも似た焦燥に。

穏やかな感情に包まれているのに、この上なく怖い。大切だと認めたモノが消えてしまうことが怖い。

「怖がらないで」

きさらは、赤い目で俺を真っ直ぐに見てそう言った。

俺が何を怖れていたかなど、彼女にはお見通しなんだろうか。

この二人が大切なのだと自覚してしまってから、失うことがますます怖くなった。

「……ああ」

それなのに、俺は今、確かに力を手に入れた。

不思議なほど穏やかな感情に包まれて。

これが幸せと言う感情なのだろうかとぼんやり思う。

長かった雨の季節が終わろうとしていた。

第十八話

雨の季節を過ぎ、賽ノ地は初夏を迎えた。

草庵には酷く穏やかな時間が流れている。

回復したでこぱちと竹千代が短く伸びた青草の中を転げまわる姿を、ぼんやりと縁側で見っていた。そこに混じっているのは玖音^{くのん}。

玖音はでこぱちが怪我をした時から、頻繁にこの草庵を訪れている。竹千代も新しく姉が出来たと喜び、なついている。玖音の方はまだ照れているようだ。

竹千代にとって、玖音は姉だが、きさらは母のような存在らしい。それは俺もなんとなくわかる気がした。竹千代の母の話を聞いたことはないが、あいつも捨てられた身だ、いろいろと思うところはあるのだろう。

母親、か。

俺に両親の記憶はない。一人だった頃の記憶しか残っていない。もちろん、でこぱちもきさらも同じだ。

ただ、母の存在を思い出そうとした時に目の前に飛来するのは、あの猩々緋色の過去だった。

もしかすると、あれは

思い出そうとして、やめた。俺の心の奥に澱を残すような過去を思い出して、また焦燥に駆られたくはなかった。

きさらは俺の隣に座って縫物をしていた。縫^ほっているのは緋色の着物……ぼろぼろになった俺の上着だった。解^ほれたところを繕い、破れた箇所^{箇所}に布を当て、修復していく。

器用なものだ。

俺やでこぱちは壊すばかり、怪我をするばかりだが、きさらはそれを直し、治すことが出来る。

でこぱちが見る世界が分からないように、きさらが見る世界もき

つと俺には一生わからないのだろう。命を奪う事を厭い、すべてに慈しみを与える彼女がいったいどんな景色を見ているのか、知るところはないだろう。

だから傍にいたいと、傍にいて欲しいと願うのだろうか。

「静かだね」

ふいにきさらが言う。

「ハチも、大怪我してたのが嘘みたい。元気になってよかった」

「そうだな」

「そうそう、お団子屋の雷^{らい}さんがね、元気になったらまた来てって言ってたよ」

団子が好きなでこばちは喜びそうだ。

「あいつらよく怪我すんなあって呆れてた」

肩をすくめ、くすくすと笑いながらきさらが言う。

返す言葉もない。

この数力月はいろいろな事がありすぎた。何より、政府に狙われ身を隠さねばならないとはいえ、また随分と草庵に籠ってしまった。所詮俺たちは根無し草。

しばらくすればまたこの草庵を出て、放浪する生活を始めるだろう。

時にはここへ顔を出しながら。

そう、これまで通りだ。

「はい、出来た」

ぷつん、と糸を歯で切つて、きさらは緋色の上着を俺に渡した。

「もうあんまり破らないでね？」

「あー……努力する」

無理だろうなと思いつつ返答したところで、鳥が一つ、甲高く鳴いた。

その声で日が傾いてきた事を知る。

「そろそろ夕餉の準備をするわ」

「じゃあ、あたしはそろそろ帰るわ」

「えーっ、玖音帰っちゃうの？」

竹千代が頬を膨らます。

「帰っちゃうの？」

真似をしたでこばちが頬を膨らます。

顔を真つ赤にした玖音は、怒っているかのような口調になった。

「煩いわね、あたしにだって都合ってものがあるの！」

しかし、それを聞いて悲しそうな顔をした二人に、玖音は背中告げる。

「明日も来るからっ」

わーい、と手を取り合って喜んだ二人に、きさらが声をかけた。

「竹千代くん、準備を手伝ってくれる？」

「うん！」

「おれもやる！」

きさらの後を追って、竹千代とでこばちが土間へと飛び込んでいった。

それを見送って、一息。

ここではただ穏やかな時間が流れていく。

血の匂いのしないこの場所では、季節の移る匂いがした。春から梅雨へ、梅雨から初夏へ。もうしばらくすれば本格的な夏がやってくるだろう。草が茂り、生き物が一齐に活動を開始する。木々のざわめきも風の吹き抜ける感触も、すべてが夏へと向かっていた。

しかし、この穏やかさの中に何かを忘れている気がしてならない。鳥がまた一つ、鳴き声をあげる。

忘れていた焦燥を呼び覚ますかのように。

「青」

呼ばれて振り返ると、背後にジジイが立っていた。相変わらず気配がない。

よっこらしよ、と俺の隣に座り込み、煙管をふかしたジジイはふいに尋ねた。

「答えは出たか？」

いったい何に対する答えだろう。

返答せずにいると、ジジイは勝手に言葉をつないだ。

「儂も古い先短い身体だ。大切な孫の行く末くらいは見届けんとな」
何のことだ。

しかも古い先短い、とはよく言ったもの。

殺しても死にそうにないジジイの横顔を見ながら、俺はため息をついた。

「忘れんな、青。面倒事つてのは逃げたと思っても逃げられねエことの方が多いからな」

面倒事。

そう言われて、ようやく俺は厄介な事実を思い出した。

自分の中の澱と戦うことに必死で忘れていた、一番の面倒事を。

「ほれ、おいでなすった」

ジジイが煙管で指した先、最後の敵がやってくる。

夕刻の陽が縁側に差す中で。

あかねいろ

茜色の陽を担ぐようにして、燃える緋の髪が揺れた。

俺は本能的に刀の柄へと手を伸ばしていた。

一瞬にして心臓の鼓動が速くなり、全身を警戒が包み込む。

「こんな場所まで何しに来やがった」

現れた人影に、俺は問いかけた。

緋色の髪が夕陽を受けて、さらに鮮やかに燃える。軽く引っかけただけの桔梗色の着物が肌蹴（へだけ）で、右肩には濃い刺青が顔を出していた。端正な顔を緩んだ口元が崩し、近寄りたさを取り払っている。

噂に聞いた通りの容姿。

その背後に控えるのは、見覚えのある忍び装束　町奉行に仕えるあやかしの朋香だ。

最悪だ。

考え得る限りで最大の難敵だった。

「賽ノ地町奉行、ちかまっかけもと近松景元」

俺の言葉に、町奉行はいい、と笑った。

「何って……知ってんだろ？ 政府から盗賊を狩れってお達しがでてるわけだ」

「羅刹がいなくなったからか？ 職を失った羅刹狩り共に仕事をやってのかよ」

問い返すと、彼はふいに真剣な眼差しを向けた。

「羅刹にヒトを狩らしちゃなんねえ」

強い視線に気圧され、どきりとした。

「お前らみたいに羅刹に突っかかるヤツがいれば、羅刹に盗賊を狩る理由を与えちまう。正当防衛だ、なんていう小難しい事はいわねえかもしれないが、ヤツらの事だ。これ幸いと盗賊たちを狩りにでるだろう」

笑みを湛えていた口元はいつしか引き締まり、真剣な眼差しがこちらに向けられていた。

「ヤツらにとつて、『無族』なんてモンは一緒くただ。もし羅刹に盗賊を狩らせれば、賽ノ地の住人との境界が……ヒトの境界がなくなるのは時間の問題だ」

脇差の柄に手が伸びる。

つられるように俺も刀の柄を握り締めた。

額に汗をかいているのが分かる。

羅刹と相対した時とは違う恐怖が俺を襲った。

あの時は、単純な戦闘力の差に慄いた。しかし、今は違う。

「だからヒトだけは、ヒトの手で狩らなきゃなんねえのさ……ヒトの世を守る為にな」

今慄くのは、目の前にいる男との信念の強さの差だ。

絶対に賽ノ地とその町人を守るという決意のもとに吐き出された言葉だから、これほどまでに響く。

自らの手を汚して盗賊を狩ってもこの地を守らんとする苦渋の

決断を下した強い意思が、俺を追い詰める。

「んで。それに直接あんたが動くのか？」

心臓の鼓動が煩い。^{ざわ}

強敵だと全身を流れる血が告げていた。

「仕方ねえだろ、手持ちの駒がこう次々とやられたんじゃ。ああ見えて烏組はそれなりに優秀な成績を収めた羅刹狩りだったんだがな」
「知るか」

討伐どころか最後には手を組んで羅刹を倒した事を、この男は知っているのだろうか。

最も、次に顔を合わせればあの女ともケモノとも敵同士だと言うことは承知の上だが。

いつの間にか隣にやってきていたでこぼちが、背の刀に手を伸ばす。

「青ちゃん、あいつ……強いよ」

「ああ」

分かっている。

「『赤い方』が青、『黄色い方』が耶八だったな」

並んだ俺たちを見て、町奉行は脇差を抜き、切っ先を向けた。

「お前たちは越えちゃいけねえ一線を越えた。羅刹どもにヒトを狩らせる口実を与えた。だから、これは賽ノ地を締める俺の役目だ」
でこぼちもすりと刀を抜いた。

俺は左手に、でこぼちは右手に。

手にした刀を並べ、真っ直ぐ敵へと付き付けた。

「青ちゃんとおれが簡単にやられると思うなっ！」

啖呵を切ったでこぼちの頭の上から、何かが振り下ろされた。
そのままぐしゃ、と地面に叩きつけられたでこぼち。

「下がってる、ガキども」

踵落として地面に沈んだでこぼちが顔を上げた時には、でこぼちから刀を奪ったジジイが俺たちと町奉行の間に立ち塞がっていた。
「今のお前えらに敵う相手じゃねえ」

「青ちゃん、ハチ？ ジジ様まで！ いたい……」

騒ぎを聞きつけてきさらが飛び出してくる。

繰り広げられている睨みあいには気付き、きさらは茫然と呟く。

「景元様……？ それに、朋香さんまで」

そして、切っ先が向けられる先が自分の育て親である事に気づいてはつとした。

「ジジ様！」

駆け寄ろうとしたきさらの足元に、するどく苦無クナイが突き刺さる。

その主は、町奉行の背後に控えるあやかしだった。

「ごめんね、きさら」

「ほ、朋香さん……？」

大きく見開かれた霞色かすみいろの瞳。

以前助けられたあやかしに、今は命を狙われる。

混乱した様子のきさらを尻目に、ジジイは刀を一振りした。

「如何に賽ノ地町奉行殿と言えど、此处を荒らさせるわけにはいかねえな」

それを見た町奉行は、一旦切っ先を下ろした。

「まさか、貴方が直々に相手をしてくださるとは。お噂はよく拝聴しておりますよ、奇妙斎殿、いや 『鬼の源七』殿」

鬼の源七、その名を聞いたジジイは鼻で笑った。

「身寄りのない子供を引き取って賽ノ地の外れに隠居したとは聞いていたが、そうですか、この二人が貴方の」

「違うわ」

忌々しげに即答したジジイ。

「こんなクソガキども、誰が面倒など見るか」

「じゃあ、引き取ったのはそちらの可愛いお嬢さん？」

またも口元に笑みを湛え、肩をすくめた町奉行が指し示したのは、きさらだった。

びくりと震え、足をすくませるきさら。

「お名前は？」

「き、きさらです」

「答えんでいい」

ジジイは言ったが遅い。

先ほどまでの威厳はどこへやら、相好を崩した町奉行はジジイを避けてきさらの方に寄った。

「クソガキとご老体の相手かと思ったら……今日は此処へきてよかった。きさらちゃん、こんなかわいらしいお嬢さんに出会えるとは」
するりと俺たちをかわし、きさらの元へ。

その足運びが尋常ではない。

お前たちの敵う相手ではないと言ったジジイの言葉は真実だ。

「きさらに近寄るな！」

不穏な何かを感じ取ったのか、でこばちはすぐにきさらを庇うように飛び込んだ。

考えるより速く、反射的に。

それがあいつにはそれが出来て、俺には出来ない。

「でこばち、きさら」

名を呼べば、でこばちはきさらの手を引いて俺のもとに戻ってくる。

ついでに、べーつと舌を出して町奉行に喧嘩を売りながら。

怯えながら俺とでこばちの後ろに入ったきさらをみて、町奉行は肩をすくめた。

「つれないなあ、きさらちゃん」

「景元様」

朋香の冷静な声が飛んだ。

気づかぬうち、先ほどまでそこにいた筈のジジイの姿が消えていく。

はつとした町奉行は一瞬でその場を飛び退った。

音もなく、しかし音を越える速度で空を切る刃。

それを握るのは、多くの皺が刻まれた左手だった。

皺の奥の目に隠された意図が、俺を突き動かした。

判断は一瞬だった。

「でこぱち、すぐ竹千代を抱えて来い」

「え？ うん、わかった」

「そのまま……逃げるぞ」

「！」

ひそりと告げた俺の言葉に、でこぱちはこくりと頷いた。

朋香の動きを警戒しながら、きさらを庇う。

あさはなだ

浅縹の髪を翻した忍び装束のあやかしは、指で印を結んだ。

「ごめんなさいね、二人とも」

何かをする気だ。

動物的な感覚で危機を察知する。

今はとにかく、逃げるしかない。

この場所が知れてしまった以上、離れるしかないのだ。

竹千代を抱えたでこぱちが草庵を飛び出してくるのと同時に、朋

香へと突っ込んだ。

「先に行け、でこぱち！ きさら！」

「おおっと、そうはさせねえよ」

逃げ出そうとしたでこぱちの前に、どおん、と大槌が降ってきた。

紅樺色の着物。

「緋狐！」

と、いうことは……

振り向いた俺の目には、見慣れた影。

槍の女と老竹色の着物を纏った化け狸。

そしてその後ろには、白の扇子を口元に当て、微笑む烏組の頭の

姿があった。

第十九話

最悪だ。

最悪に輪をかけた最悪だ。

立ちほだかるのは賽ノ地町奉行近松景元とその隠密である朋香、そして烏組からすぐみの女と二匹のケモノ、そして頭の烏之介うのすけ。

「困りますね、景元様」

肩に一羽の烏カラスを携えた烏之介は、町奉行に向かってにこにこ目を細める。

「大将はお白州に籠って、面倒事を我々下民に申しつけていただければよいですよ。それなのに、貴方ときたら」

扇子の奥でため息をつき、3名の部下に待機を命じた。

人の言う事などまるで聞きそうにない女と、二匹のケモノが素直に従ったことから、この男の得体の知れなさが伝わってくる。

「こうして私まで部下を引き連れて参戦することになってしまいうでしよう？」

「何がだ、もういいって言っただろうが。しばらく引っ込んでろ」
急に不機嫌そうな顔になってしっし、と烏組を追い払おうとした町奉行の感情などお構いなしに、烏之介はすたすたとジジイの方へ向かった。

「この方が邪魔なのでしょう？」

くすくすと笑いながら、烏之介はつい、と天を指差した。

肩に止まっていた烏カラスが羽ばたき、俺たちの頭上を旋回した。
くるくるくる、と回りながら、いつしか数を増やしていく。

一羽、二羽、三羽、四羽……夕刻の空を黒で染め抜くように、黒い翼が点々と茜色の空に現れた。

これはあいつの仕業なのか？

こここのところ草庵を見張るようにして烏が多くいた事を思い出す。

「相変わらず気味悪いヤツだな、お前は……」

多少表情を歪めた町奉行だったが、烏は増えるだけで特に降りてこないことを悟り、手にしていた刀を再びジジイへと向けた。

その場だけ空気が張り詰める。

背筋をぞくりと何かが走り抜けた。

まるで町奉行とジジイが向かい合ったその空間だけ、別の次元にあるかのような気がして、酷く遠かった。

その空気を愉しむように唇の端をあげた町奉行は、右足を退いた。
臨戦態勢。

「悪いが待つのは性分に合わないんでね、先手取らせていただきます」

町奉行の言葉にジジイが返答するより先に、町奉行は飛びだした。
速い！

しかし、ジジイは慌てなかった。

手にしたでこぼちの刀を悠然と構え、町奉行の突進を待つ。

ところが、町奉行を迎え撃とうとしたジジイがぴたりと動きを止めた。

「ジジ様?!」

でこぼちが慌てて駆け寄ろうとするが、朋香に阻まれ、竹千代を抱えたまま退いた。

「……こりゃあ……夜叉共の武器じゃねえか」

忌々しげに呟いたジジイは、不自然な体勢で縛られている。

にこにこ笑う烏之介の肩に、烏が一羽、戻ってきた。

いつしか空には無数の烏が舞っていた。

あいつの仕業か?!

烏を集めるだけで何もしていないかのように見えた烏之介が、見えない何かでジジイを縛り上げたのだ。

まるで罪人のように、刀を持ったままの左手を大きく上にあげ両足を拘束されたジジイは、全く身動きみじろできない。

動こうとするたびに、ぎしり、と金属が強い力で擦られる音がし

た。

完全に封じられたジジイは、珍しく顔を歪ませた。
啜えていた煙管がぼとり、と地面に落ちる。

動けぬジジイの目の前に立ったのは、刀を手にした町奉行。

「あー、もうこれ完全に俺が悪者じゃねえか」
まさか。

「すまないな、奇妙斎殿。本当なら貴方には 味方としてお会い
したかった」

町奉行の言葉にジジイは鼻を鳴らし、俺に何かを訴えかけるよう
にちらりと視線をくれた。

これから自分の身に何が起こるか、分かっているはずだと言っ
た。

町奉行が刀を振りかざす。

そして俺は一切動けず、目の前で、ジジイが町奉行の刀に貫かれ
るのを見た。

「……………え？」

こんな間抜けな声が自分から出るとは思わなかった。

まるで俺の周囲の世界がこれ以上時を進めるのを拒否したかのよ
うだった。

弾け飛ぶ狸々緋が俺の思考を止めた。

澱の声を断ったとき、俺は覚悟した。

たとえば、きさらが血の海に落ちる事があるだろうこと。でこば
ちが力及ばぬ敵の前に倒れ伏すこと。その痛みを恐れ、生きていく
ことを覚悟した。

しかし、一つだけ覚悟していなかったことがある。

それは、ジジイが誰かに負けると言う事だ。

きさらの、でこばちの悲鳴が上がってはつとした。

狸々緋によって真っ白になった頭は、すぐに回転し始めた。

間髪いれず叫ぶ。

「全員逃げる！」

躊躇するでこばちの背を強く叩いた。

腰が砕けそうになったきさらを後ろから抱えて無理やり引きずり、俺は駆けだした。

あの時、ジジイの目は確かに、俺たちに『逃げる』と言っていたから。

息を切らして荒れ地に駆けこんだ俺たちは、大きな杉の木の下で息をついた。

いったい何が起こったのか分からなかった。

全員の荒い息だけが響いている。夕刻の陽が差し込んで、視界を茜色に染めていた。

誰も口を開かない。

先ほど見た光景が事実だと思えなかったからだ。

俺も混乱している。

突然町奉行がやってきて、ジジイが逃げると言って、烏組がやってきて、その頭が何か不思議な力でジジイを縛り付けて

「なんで」

ぼつりと言葉を零したのは、きさら。

「どうして……ジジ様、なんで……朋香さん……景元様も……」

世界を拒絶するように両手を耳に当て、地面にへたり込んだ。いつも気丈な瞳からは光が消え、血の気を失った唇が震えていた。

「やめてっ……どうしてジジ様を……！」

何体もの羅刹に囲まれても、でこばちの大怪我を見てもうろたえなかったきさらが取り乱していた。

「ジジ様、置いてきちゃった」

きさらは混乱した様子でふらふらと立ちあがり、歩きだした。「すぐに戻って助けないと」

「きさらっ！」

すぐにでこばちがきさらを抑える。

「放して、ハチ」

「ジジ様でもかなわないのに、きさらが行ったら死んじゃうよ！」

「でもっ」

霞色の目が俺を貫いた。

「青ちゃん、どうしてこんな事になっちゃったの……？」

「それは」

答えられない俺を見て、きさらは悲しそうに眼を閉じた。

「教えてよ。青ちゃん。私の知らないところで、いったい何が起きているの……？」

「お前は知らなくていい。知らない方がいい」
考えるより先に答えていた。

羅刹とヒトの、政府と盗賊の、そして盗賊狩りの争いなど、きさらには知らせる事はない。

また心痛めるくらいなら、知らせない方がいい。

ところが、きさらはそれを赦さなかった。

「知らなくてよかった事なんて一度もないっ……！」

大きな霞色の瞳に大粒の涙が浮かんで、弾ける。

茜色の光を浴びて、まるで夕陽そのもののように煌めいたそれに、

一瞬目を奪われた自分に驚いた。

俺は、失った過去の悪夢に肩を震わせる少女を知っていた。

だからこそ何も答えられなかった。

知らないと言う事は、其れ即ち恐怖。それがよく知る人間の、ましてや大切なヒトの事ともなれば、知って後悔すると分かっているも知りたいと願うのだろう。

その感情が痛いほどに伝わってきたから、答えられなかったのだ。どうしようもない感情が胸の内を渦巻いて、頭をがりがりとかいた。

俺だって混乱してんだ。今だって、これからどうという行動を起こ

すのが最善なのか、考えようとしても考えがまとまらないくらいなんだ。

目の前で刀に貫かれたジジイの姿が目の前に想起する。
見れば隣でうろたえていた相棒が、つられて眉をハの字にして目をつるうるとさせていた。

お前まで泣いてんじゃねえよ。

ああもう、めんどくせえ。

俺は大きいため息をついた。

「泣くなつて」

めんどくせえから。

いつも相棒にするように、ばん、ときさらの頭に手を置いた。
はっと大きな瞳が俺を見た。

「俺たちが行く。お前はここで待つてろ」

結局俺は、きさらに真実を告げない。

言わないまま、すべて終わらせてやる。

「玖音！ いるだろ、出て来い」

辺りに向かって叫ぶと、藪をかきわけ、紺青の忍び装束に身を包んだ玖音が姿を現した。

「あたしに命令しないでつていつも言ってるでしょ」
いつもの台詞に力がない。

どこかバツの悪そうな顔をしているのは、この襲撃の事を知っていたからか。

政府に仕え、さらには俺たちの動きをすべて把握している玖音が町奉行の動きを知らぬはずはない。それどころか、俺たちの動向を探っていたのは玖音かもしれないのだ。

そんな俺の疑惑が伝わったのか、でこばちが困惑した表情を見せていた。

今、それを問い詰めている場合ではない。

「玖音、きさらと竹千代を頼む」

困惑を払拭するように、左手の刀を一振りした。

「……いくぞ、でこぱち」

「うん」

腕で涙をぬぐったでこぱちに、何処に持っていたのか、玖音が刀を差し出した。

「……気をつけてね」

「ありがとう、玖音」

ジジイに獲られてしまった刀の代わりに、玖音から受け取った刀を背に差した。

極彩色の着物を翻し、相棒と並んだのはずいぶんと久しぶりな気がした。

「必ずジジ様をとり返してくるよ！」

きさらと竹千代、玖音をその場に残し、俺たちは草庵へと駆けた。陽が落ちるまで半刻ほど。

真横から、目の奥を焼くような強い夕陽が脳裏に焼き付いた。

刀に貫かれたジジイの姿が想起し、足が止まりそうになるのを必死でこらえて草庵への道を駆けた。

陽は刻一刻と山の向こうへと消えていく。

もしまだジジイが生きているなら、早くきさらの元に運ばねばならない。

それさえも確かめずにあの場を逃げた自分が呪わしい。

早く。早く。

急ぐ俺たちの目の前に、突如、3つの影が飛び出した。

「待ちやがれ！」

俺は寸でのところで大槌をかわし、でこぱちは飛来する小刀を避けた。

続いて突っ込んできた槍の先を、左手の刀で真正面から受け止めた。

「よく止めたな、盗賊」

「邪魔すんじゃねえよっ……！」

弾いた槍先の反対方向から、大槌が迫る。

「……のやるおっ！」

大槌の柄をひつつかんで逆に引き、体勢を崩したところに頭突きをかましてやった。

緋狐の石頭で脳髓が揺さぶられたが、そんな事に構っている暇はない。

そのままの勢いで狸休に突っ込み、刀の柄で腹に重い一撃をいれた。

「青ちゃん！」

先を走っていたでこばちが振り返る。

「先に行け！　すぐ行く！」

そう叫んでおいて、でこばちを追おうとしていた狸休の背に当て身を喰らわせた。

どおともつれるように倒れ込んだ俺の目の前に迫るのは鋭い槍の先。

休む間など与えてはくれない。

地面を転がって攻撃をかわし、少し距離を置いて息を整えた。

第二十話

誰より信頼する相棒を、たった一人で先に向かわせてしまった。敵は賽ノ地町奉行なのだ。到底、一人で刃向える相手ではない。すぐに追わねば。

武器を手にした3人の後ろの草庵へと続く坂道の上から烏之介うのすけが見下ろしていた。何かを企んでいるような目も、余裕を見せる口元も、のらりくらりと逃れるその口調も、何もかも気に喰わない。

傍を通り過ぎていったでこばちを止めようともしなかったことも、何より、得体の知れぬ力でジジイを縛り付けた底知れぬ実力が怖い。

女が手にした槍の輪がぶつかり合い、しゃん、と澄んだ音が鳴った。

「また遇ったな、盗賊」

「前から言ってるだろう、俺はもう二度と会いたくねえよ、盗賊狩り」

細く息を吐き、急く気持ちを抑えて俺を囲む盗賊狩りたちをぐるりと見やる。

正面に槍の女、右手に大槌を肩に担いだ緋狐、俺の一撃が聞いたのか、咳き込む狸休が左手に立った。

一人ずつ殺ヤるしかない。

かつてきさらがケモノたちを治療したことも、羅刹を前に共闘したことも、でこばちに見舞いをくれた相手だということも、もはや関係ない。

こんなやつら、これまで何度も相手にし、その命を奪ってきた。それなのに。

何故だ。

どうして　躊躇しそうになる？

「ぼーっとしてんじゃねえよー！」

大槌を振りかざした緋狐が先陣切って飛び込んできた。

この大槌を相手にするのは初めてではない。

完全に槌の間合いを見きって横に跳んだ。

ところが。

俺の目測を越えて、大槌が迫ってきた。

明らかに先ほどよりも間合いの遠いソレは、正確に俺の顔面を狙って飛んできている。

「?!」

みるみるうちに距離を縮めた大槌が目の前に迫る。

驚く間もなく、顔面に衝撃。

ぽた、と地面に血が落ちた。

「……のやる」

大槌を振り回すことしかできない馬鹿かと思いきや、小手先の細工なんぞ覚えやがって。

鼻血を腕で拭き、再び緋狐を睨みつけた。

にやにやと笑う緋狐の手に、柄の短くなった大槌がおさまる。

槌の柄が確かに『伸びた』。

一定の間合いで降り舞わす大型武器でこそ戦いやすいというもの。大槌の柄が伸縮自在となると、その戦いにくさはこれまでの比ではない。

ふざけたことしてくれやがって。

おそらくこれは緋狐の知恵ではない。

その背後に笑顔で佇む黒ずくめの男をぎりりと睨んだ。

あいつの入れ知恵か。

緋狐が槌を振り回すたび、槌の柄が伸縮し、目の錯覚を誘発する。伸び縮みする様を見ているだけで、目が回ってしまいそうだと、そちらばかりに気をとられてはいられない。

頭上から降りてきた殺気に、その場を飛び退った。

槍に全体重をかけて狙ってきた女は、そのまま槍の先を地面にめり込ませる。

武器を地面から抜く前に攻撃を　　と思つた瞬間、狸休の放つ小刀に掠められる。

「お前に個人的な恨みはねえし、あの紫の嬢ちゃんが泣くかもしんねえけど、こっちにも事情つてもんがあるんでな」

「そうそ、大人の事情つてヤツや」

何が大人の事情だ。

そんなもの、知つたこつちやない。

俺には　俺たちには、関係ない。

めんどくせえ。

羅刹とヒトが和平を結ぼうが、賽ノ地に羅刹城が誘致されようが、盗賊が狩られようが、どうでもいい。

「……めんどくせえ」

少しばかり懐かしい口癖を口の中で反芻して。

はあ、とため息をついたところでようやく、俺の中に余裕が戻ってきた。

急いてしまえば気ばかり焦る。

焦つたままではろくな考えも浮かばない。

考えずに戦うでこばちと違つて、俺は思考を止めた時点で負けなのだ。

危つく自分の戦闘を忘れてしまふところだった。

焦るな。

落ち着きを取り戻して刀を握り直せば、ようやく『元に戻つた』

気がして思わず口元に笑みを湛えていた。

「本当に巫山戯た野郎だ」

余裕の笑みととつた女が不機嫌そうに鼻を鳴らす。

顔の横で輪を作るように結いあげた花緑青の髪が揺れた。

あいつは俺と違つて、考えるより先に行動できる。

しかし、俺にはどうしてもそれができない。

その代わり、俺は考えながら戦うことが出来る。

そう、簡単な事だ。

冷静になればあの武器の弱点などすぐに見えてくるのだから。

「死に曝せ！」

一度に飛びかかってきた3人との距離を測り、大きく上に跳躍した。

標的を見失った3人が躊躇する間に、頭上からまずは狸休を狙う。羅刹と、羅刹を手玉にとる居待とばかり戦闘を繰り返してきた俺にとつて、こいつらの動きは、こいつらの反応は遅すぎると言っていらいだ。

気づいて頭上を見上げる頃には、もう遅い。

背後に滑るように降りるついでに、狸休の後頭部を刀の柄でこたまうちつけてやった。

声もなく地面に崩れ落ちた狸休。

「てめえっ」

大槌を振り回す緋狐からは距離を置く。

3人を一度に相手するのが無理なら、一人ずつ倒せばいい。簡単な論法だ。

俺が思考を挟む隙もない。

と、次の瞬間、大槌の柄がこれまでの比にならぬほど伸びた。

「?!」

避けきれない。

左手の刀で受け止めようとするが、勢いのついた大槌を止めきることは出来ず、そのまま横に吹き飛ばされてしまった。

杉木に右半身を打ちつけ、息が止まる。

咳き込みながら膝をつく、頭上からさらに殺気が迫ってきた。

そちらに視線を向けず、刀だけで斬撃を逸らした。

「……よく避けたな」

怖ろしく近くで女の声がした。

耳元に囁かれているような感覚に、思わずその場を飛び退る。

「馬鹿が、それで避けたつもりか！ 潰れちまえ！」

大槌が空をきる音がした。

それを察した俺は、ほとんど反射的に強く地を蹴る。

大槌から離れる方向ではなく、その逆へ。

「馬鹿はお前だ」

刀の鎬が、がりがり大槌の柄を抉った。

勢いが殺された大槌は停止。

「な……んで……っ」

同時に蹴りあげた右足が、槌を振り下ろした勢いと相まって鳩尾に深くめり込んだ。

「いくら伸びようが、いくら縮もうが、手元は一緒なんだよ、阿呆」
俺の言葉を最後まで聞いたのか。

気を失った緋狐の体が地面に縫い付けられる前に背後で鋭い殺気が弾けた。

最後の一人だ。

いや、二人なのか？

槍の女と俺が向き合うすぐ傍で、ただ成り行きを見守る烏之介うのすけが
いったい何を考えているのか分からない。

今は胡散臭い笑み張り付けてを見ているだけだが、あいつが戦場に出てきたとしたら、戦局は一変するだろう。

そうなる前に決着をつけてやる。

強い意思を秘めた翡翠の瞳を真っ直ぐに睨み返した。淡い色の着物が映える漆黒の衣を翻し、身の丈より長い槍を構えて。

すべてが始まったあの日と同じだった。

この女に襲われたあの日から、何もかもが始まったのだ。

ならば俺は、再びこいつをうち負かして先に進めばいい。

何度でも向かってくると言うのなら 何度でも、完膚なきまでに叩きのめしてやればいい。

「これで終いだ」

女は槍をひき、身体を捻る様にして構えた。

武器を納めたその体勢からくりだされるのは、おそらく一撃必殺の神速の突きだ。

槍の先に括られた輪がぶつかりあい、軽く澄んだ音が響き渡った。余韻を残し、辺りの空気に紛れたその音は耳に残る。痺れのような耳鳴りと成って。

真正面から迎え撃つ気で、俺も左手の刀を引いた。鞘のない納刀。

双方の呼吸が聞こえないほどの静寂に包まれた。

はるか右手の山の向こうに、太陽が沈んでいく。最後の一筋を残し、今まさに消えんとする光の粒が辛うじて残存している状態だ。

双方、未だ動かない。

黄昏がすぐそこにまで迫っている。

陽が隠れる。

闇の時刻がやってくる。

最後の一筋が、山の向こうへと消えた。

空に残るのは、俺の髪色と同じ紺碧。

女と俺は同時に地を蹴った。

互いに距離をつめれば、一瞬にして敵の間合いへと入る。

槍の方が長い分、有利だった。

だから、女は勝利を確信していたのだろう。

何の迷いもなく俺に向かって切つ先を突き出した。

全体重、全速力、すべての力を込めた一撃を。

正確に喉元を狙ってきたその攻撃も、ひどくゆっくりと見えた。

時の流れがせき止められたかのようなうだ。

音はない。

色もない。

その中で、ただ身に染みついた感覚だけが俺の身体を突き動かした。た。

無意識に刃を裏返した事にも気づいていなかった。

駆け抜けた刹那、喉元に鋭い痛みが走る。

槍の刃でぱくりと割れた傷は、ぱつと鮮血を散らした。

刀を地面に差してから傷を確かめたが、大した傷ではない。

背後からはどさり、と何かが地面に落ちる音。

首の傷を抑えて振り返った俺が見たのは、地面に倒れ伏す女の姿だった。

最後に刀を逆刃に持ち替えたから命まではとらないだろうが、肋骨の数本くらいは折れた筈だ。

「何故殺さない」

「……羅刹の時の、礼だ」

ただの誤魔化し言葉を吐いたが、女は納得しなかっただろう。

もちろん、俺もそんな理由じゃない事くらい心のどこかで気づいている。

女は痛みに震えながらも顔を上げた。

「羅刹は嫌いだった」

「……俺も嫌いだよ」

「盗賊も大嫌いだった」

「ああ、そうか。俺も盗賊狩りは嫌いだ」

悔しさにうち震える盗賊狩りの女は、射殺さんばかりの目で俺を睨みつけた。

「貴様も次に遭った時は、殺してやるっ……！」

「だから言ってるだろうが」

荒くなつた息を整えながら、俺は幾度目になるか知れない台詞で返答した。

「俺はもう二度と会いたくねえよ」

そこでようやく俺は、短い戦いのすべてを見守った烏組の頭に目を向ける。

結局、手を出さずに部下が最後までやられるところを見守ったコイツがいったい何を考えているのか、俺はさっぱり見当もつかなか

った。

絶対的な信念を持つて俺たちと向かい合った近松景元とは正反対、烏之介から感じるのには、信念が見えない恐怖だった。

相変わらずにこのこと、感情の読めない男はすい、と身体をずらして俺に道を開けた。

「早く向かわれた方がいいと思いますよ？　彼は、私と違って不器用で、手加減がとても苦手ですから」

「お前は戦わないのか？」

足を止め、訝しげに見た俺の視線に、烏之介は小首を傾げる。

「貴方が私と戦うことで得られる利益はないでしょう？　合理的な考え方をする貴方ならすぐに分かるはずですよ」

意味は分かるが理解しがたい言葉を吐いて、烏之介は肩を竦めた。じゃあなぜジジイを、と言いかけてやめた。

無駄な問答だ。

「私はこれから部下たちの怪我の治療をしないといけませんから。でもきつとまた会うでしょうね」

「俺はもう会いたくねえって言うてんだろ」

くすくす、と笑った烏之介は、当たり前のように殺気も何もないまま俺の傍を通り過ぎていく。

しかし、最も近づいた時、ふいに何かを口にした。

「」

聞き取れなかったその言葉は、夢の中で少女の声が呟いたのと同じ響き。

はつと振り向いた時にはすでに、男の姿はなく、地面に転がっていた筈の3人もいなかった。

この一瞬で、いったいどうやって……？

それに、最後の言葉は。

赤は嫌いな

猩々緋色の過去にとらわれそうになって、はつとする。

こんな事をしている場合ではない。

地面に刺していた刀を抜き、草庵への坂を駆け上った。

第二十一話

冷えてきた夜風に深紅の衣が翻る。

赤い色が嫌いだった。

幼き日、鮮やかな猩々^{しじゅう}緋と共にこの身に穿った、どうしようもない喪失感と後悔が全身に舞い戻ってくるから。

それでも緋色の衣を身に纏うのは、失ってきた過去を捨て去らないようにするためだった。

たとえ過去が自分の中に澱を残す何かだとしても、捨てられなかった。

だから、緋色を纏っても過去に捕われないだけの強い光を求めた。闇夜にも目立つ、明るい向日葵色。

草庵の前に見つけたその色の背後に緋色の影が迫った。

自分の上着と同じ色をした髪がゆらりと揺れる。

「でこばち！」

叫ぶと同時に、俺は反射的に刀を投げつけていた。

緋色の影は俺の刀を避けて向日葵色から離れた。

「青ちゃん」

息を切らして振り向いたでこばちの両手は真っ赤だった。

地面には、刃の根元が緋色に染まった刀が落ちている。

俺が左腕に巻いていた包帯を渡すと、でこばちは地の滲んだ両手にそれを巻き付け、地面に落ちていた刀を拾い上げた。

それでもじわりと滲み出ていた血が、傷の深さを思い知らせる。

「青ちゃんも怪我してる」

「かすり傷だ」

血を腕で拭いながら答えた。

緋狐の大槌を顔面に食らった分と、喉元をかき切られそうになった分。大した怪我ではない。

俺も投げつけた刀を拾い、背を合わすようにでこばちの隣に立つ

た。

再び刀を構え、並び立つた俺たちの目の前に立ちはだかるのは、これまでで一番の難敵。都から遠く離れ、荒れた賽ノ地を立て直した男。いまでも町民たちから絶対の信頼を持つ　　賽ノ地町奉行、近松景元。

あまりの実力差に、一度退いた相手だ。

が、俺は今、退けない状況にまで来ていた。

町奉行の足元に転がっていたのが、片腕の老人だったから。

「さあ、第二回戦と行こうか、少年たち」

賽ノ地を統べる男は、そう言つて左右で長さの違う刀を、帳の下りてきた空気の中で振るつた。

変則二刀。

また厄介な相手が来たものだ。

「あいつ、戦いにくいんだ。刀の長さ違うし、間合いを詰めにくい」
それで、刀を握り直して間合いを調節していたのか。

で、短く持とうと刃を握つたために掌を盛大に切つた、と。

「……もう少し頭使つて戦え」

「だつておれ、頭使うの苦手だ」

ごん、と刀の柄で額を小突いてやると、でこぼちは唇を尖らせた。
仕方ねえな。

「じゃあ、俺が代わりに考えてやるよ」

そう言つと、でこぼちは嬉しそうに笑つた。

「だからお前は力を貸せ、でこぼち」

「もちろん！」

勝てるか知れぬ相手を目の前にしていると言つのに、そんなこと微塵も感じさせぬ笑みで。

最後の戦いが始まる。

勝つか負けるかが直接、生きるか死ぬかに関わってくる。

これまでもそうやって生きてきたというのに、大切なモノを自覚

し、覚悟した俺にとっては別の意味を持っていた。

負けられない。

そう思ったのは初めてだった。

戦いが面倒だと思わなかったのも、初めてだった。

「でこぱち」

「なあに、青ちゃん」

声を潜めた俺に、でこぱちも小さな声で答える。

「お前は、右手の長刀だけを相手にしろ。左手の短い方は、何があつても俺が止める。間合いを気にせずに、右だけ相手にするんだ」
「でこぱちはこくりとうなずいた。」

変則二刀の厄介な点は、両手の間合いの差にある。ならば、俺が常に左手の短い刀を引きつけ、長刀は常にでこぱちが相手にしていれば、気にする必要もない。

ただし、これは相手が必ず逆手の刀を止めてくれるという絶対的信頼の元にしか成立しない。

「あとは」

言おうとしてやめた。

余計な気を回す必要はない。

きつと耶八はでてこない。出てきたとしても、止める必要はない。首を傾げたでこぱちだったが、すぐに町奉行へと向き直った。

相談が終わるのを待っていた町奉行が、それに気づいた。

「しかし、お前ら二人だけか。きさらちゃんどうした？」

「お前には教えないよ！」

べーっと舌を出したでこぱちに、町奉行はい、と笑う。

「いいのか？ 傍を離れて」

確信的な口調だった。

「もう一度聞くぞ。きさらちゃんたちは、大丈夫か？」

念を押すように繰り返した町奉行の言葉ではっとする。

見渡せば、この場にいるはずの役が一人足りない。

忍び装束のあやかしの姿が見当たらない。

息が止まりそうになった。

気づいたでこばちが駆けだしそうになるのを辛うじてとめた。

「待て、でこばち！」

ここで戦力を分散させるわけにはいかない。

町奉行を放り出して戻るわけにはいかないのだ。すぐに追いつかれ、きさらと玖音のみならず竹千代まで戦闘に巻き込んでしまうことになる。

「こいつを倒してから助けに行く。集中しろ、でこばち」

きさらと玖音を信じるしかない。

「分かったよ、青ちゃん」

でこばちは気を削がれながらも足を止めた。

俺の判断が正しいかは分からない。

もしかすると、でこばちに従って今すぐ向かった方がよかったのかもしれない。

澁の声が騒ぎだしそうになる。

そんな迷いを断ち切るように、俺は再び刀を構えた。

「お？ ようやく腹あ括ったか？ 少年」

町奉行の言葉が終わる前に、俺とでこばちは両側から敵に飛びかかっていた。

絶対に目を離すな。

ほんのかすり傷だとしても、でこばちに刃を当てる事は赦さない。代わりにあいつは、俺の背を必ず守る筈だから。

実際の体格より大きく見える町奉行から、迷いのない刃が俺たちに向かって振り下ろされる。

先に町奉行の前に飛び出したのはでこばち。

頭上からの刃をがっちり受け止めた。

その側面から狙ってきた左の刀は俺が代わりに受け止める。

二人で一人分。

この男を相手にするにはそれしかない。

でこばちと位置を入れ替わり立ち替わり、二本の刀を相手にする。振り下ろされる二本の刀。

息を合わせた俺とでこばちの刀がそれを受け止め、4本の刀が交差した。

「あまり飛ばすんじゃないよ、ガキども。これはただの演武なんだからよ」

「何が演武だ！」

観衆もないこの場所で、立ちまわる何が演武だというのか。

ジジイを刀で貫いたこの男に対して、斬りかかるのに十分な理由がありながら、どうしてただの演武と言い切れるのか。

軽口を叩きながらも俺たち二人をいなす町奉行には、全く倒れる気配がない。

でこばちと視線をかわし、一端距離を置いた。

息が荒い。

正当な剣術を身につけている相手は、無駄な動きがなく、隙もない。どうにかして隙を見つけない事には、突破口が開けない。

いったいどうやって隙を作ればいい？

幾度目かの剣戟、幾度の交戦。

全く、糸口がつかめない。

進まない戦況に、でこばちの目に、怪しげな光が灯った。

「何でおれたちの邪魔、するの？」

相棒を包み込む雰囲気が一変した。

「どいてよ」

ふらりと立った耶八が、刀を振りかざす。

とうとう、きてしまった。

しかし、もはやアレを止める気は俺にない。

きつと、すべてを捨てて挑まねば、こいつには勝てない。

あのジジイを葬った男なのだから。

心の端がちりと焼かれる。

雰囲気が変わったでこばちに、町奉行は肩をすくめた。

「あんまり肩に力入れるなよ。俺だって合わせるのが、面倒なんだからよ」

合わせる、の言葉通り、殺気を纏った耶八に合わせて町奉行はほんの少し、威圧を増した。

この男、何のつもりか知らないが、俺たちの実力に合わせて戦っているらしい。

きつと俺が到着するまででこばち一人で相手できたのもそのせいだ。

「何だ？　俺が手え抜いてる事が不満か？　それとも　絶望したのか？」

その余裕に疑問より先に苛立ちが募る。

「俺たちは、絶望なんかに構ってる余裕はねえんだよ」

大切なモノを守ることを誓ったあの時、俺は多くの事を覚悟した。もしこの町奉行が賽ノ地を守ろうとするのなら、俺は俺の大切なモノだけを守ってやる。

たとえばそれが、とても俺たちには敵わないであろうこの男と信念を違え、敵対する道だったとしても。

殺気を纏った耶八が先ほどと比べ物にならない速度で右から突っ込んでいった。

俺が指示した通り、右から。

先ほど「おれたちの邪魔」、と言ったのはきき違いではないらしい。

かろうじて、俺の声がまだ届いている。

これは幸いか、それとも……

答えを出す前に、俺もまた敵に向かっていった。

幾度も挑み、何度も弾き返された。

致命傷ではない手傷をかなり負った。左手に握った刀が、自分の血でぬるりと滑り、落としそうになる。隣の耶八ですら、肩で息を

していた。

それでも町奉行が倒れる気配はない。

交差した刀が耶八の頭上に迫った。

耶八の刀が、うまくその二本の合わせ目を突いた。

そのまま、拮抗。

俺はその間に背後へと回った。

刀を振りあげ、無防備な首元を狙って刃を薙いだ。

目の前に鮮血が散る。

が、次の瞬間、地面に叩きつけられていたのは俺の方だった。

とてつもない重量が押し掛かってきて、息が止まった。

みしみし、と骨の軋む音がする。

「痛つてえ……くそ、油断した」

俺に押し掛かったまま、言いつつ首に手を当てる町奉行の指の間から、つうつと血が伝った。

浅かった。

視界の隅に向日葵色の上着が翻る。

でこばちの刃を避けるために飛びあがる瞬間、凄まじい圧力がかった。

ぼきり、と身体はどこかで鈍い音がした。

痛みが全身を貫く。

よろよろ、と起き上ってなんとか刀を握り直した。

どうやら右の鎖骨。左手の刀を持つには問題ない 酷く痛むの

と、力が入らないのは別として。

まだだ。

まだ止まるわけにはいかない。

知らぬうち、喉の奥から咆哮が上がった。

負けられない。

どれだけ敵が強かったとしても、負けるわけにはいかない！

ほとんど無意識に地を蹴る。

刀を振るう。

刃を受け止め、反撃を繰り出す。

絶対に負けない、その感情だけが俺を突き動かしていた。

全身が痛み、いったい何処をどう怪我しているのかもわからない。それでも、隣に立つ相棒と、刀を振るい続けた。

自分の息が荒い。

耶八の息も荒い。

敵がほんの少し汗をかいているのが、少しずつ体力を削いでいる結果だと信じたい。

そうでなくては、こちらが先に力尽きてしまう。

絶望したか？

先ほどの町奉行の言葉が蘇る。

するか、馬鹿野郎。

再び刀を振りあげた時、不意に戦場に影が飛び込んできた。

その影を認識し、俺は思わず叫んでいた。

「きさら？！ 玖音？！」

二人は地面に苦無^{クナイ}を差し、さらにそこへ糸を引っかけた。

その先につながれているのは、薄汚れた紙に巻かれた丸い玉。

仕掛けてすぐ、二人は大きく飛び退いた。

「息止めて！」

玖音の声に、反射的に呼吸を止める。

次の瞬間、ぼうん、と周囲を真っ白な煙が覆い、視界を奪った。

逃れるために木に飛びあがると、俺の背丈ほどの空間が完全に煙に包まれているのが分かった。

「何だ、これ……？」

「痺れ薬の煙幕よ」

玖音の声が返ってきた。

「きさらが調合して、あたしが武器にしたの。毒を直接叩きこんだ時ほどの効果はないけど……少しくらいは動きが鈍るはずよ。朋香さんも、これで足止めしてきたの」

玖音の言葉通り、煙の晴れていく地面には膝をつく町奉行の姿が

現れた。

目視するなり飛び出したのだろう。

ひと足早く耶八が斬りかかっていく。

苦しい表情をしながらも受け止めた町奉行は、額に汗をにじませた。

片手は無理と判断したのか、左手の刀を捨て、両手で刀を握って応戦する。

が、不意に耶八の身体が傾^{かし}ぐ。

残っていた毒を吸ったのか。

倒れそうになった耶八の身体を後ろに蹴り飛ばし、交代。

俺は町奉行の剣戟を受け止めた。

が、先ほどまでの力強さがない。

手が震え、今にも刀を取り落としそうだ。

俺は息をせぬよう慎重に間合いをとった。

先ほどまでとは逆転、息を荒げた町奉行は、そのまま膝をついた。

額に汗をかき、呼吸は酷く苦しそうだ。

「すげえな、これ……朋香の毒より効くぜ」

それはそうだ。朋香がどんな毒を使うのかは知らないが、きさらは医療を学んだ忍びだ。人を傷つける体術より、こういった薬を調合する方がよっぽど向いているはずだ。

震える声は、麻痺が回っているからだろう。

からん、と刀を落とした町奉行に、これ以上喋らせる気はない。

俺は逆刃の刀を一閃した。

第二十二話

町奉行が昏倒したところに、毒から立ち直り、刀を構えた耶八がやってきた。

「トドメさす気、ある？」

「……ねえよ」

「じゃあ、おれがトドメ、さしちやおう」

「やめろ、耶八」

俺の言葉で、耶八は刀を引いた。

しかし、その瞳に宿る闘争心は未だ燦っている。

かろうじて俺の声が届く今の内に、戻さねば。

「おい、こつちこい」

耶八を呼ぶと、眉間にしわを寄せてむっとしながらも俺の方へ寄ってきた。

その皺の寄った眉間に、刀の柄を強めにあててやる。

突然の衝撃に仰け反ったでこばちは、何が起きたかわからない、という顔をしてきよろきよろとあたりを見渡した。

「……あれ？」

何かおかしい、と思いつつも、自分でもよく分かっていないのだろう。

内に潜む、羅刹の事など。

辺りを見渡す相棒が視線を止めたのは、つい今したが倒したばかりの町奉行だった。

「あいつ、生きてる？」

「ああ、たぶんな」

俺の一撃で気絶しているか、玖音の毒で動けないかのどちらかだ。

「じゃあ、殺^ヤっちゃう？」

そうだった。でこばちもこういうヤツだった。

はあ、と一つ溜息。

が、刀を構えるでこばちと町奉行の間にふっと影が差した。上から飛び降りたわけでもなく、そのばにふっと現れたその影は、忍び装束を纏ったあやかし。

町奉行を庇うようにして現れたのは、朋香だった。

苦しい呼吸は、きさらが調合し、玖音が使った痺れ玉のせいだろう。

「景元様」

静かに呼ぶ朋香の声に、町奉行の指がピクリと動く。

が、すぐには動けない筈だ。

朋香はそれを察し、自分も毒が効いてふらふらとしているというのに、体格のいい町奉行の下に入り込んで背負った。

顔を上げたケモノの瞳が闇夜に光る。

何かのまじないか、化け狐の幻術か。

次の瞬間には、二人の姿がその場から消え去っていた。

最後に振り返った朋香の悲しそうな顔だけがやけに印象深かった。

俺は、恐る恐る地面に伏せる老人の元へと向かった。地面に広がる血だまりは戦闘で踏み荒らされ、寄ってたかつて筆られた様になっていた。

ゆっくりと歩み寄ったが、身体まであと一歩、その距離が踏み出せなかった。

いつのまにか倒れ伏していた、きさらやでこばちの時とは違う。

目の前でジジイがあのだ刀に貫かれるところを見ていたのだ。

俺の右側にはでこばちが立ち、左手にそっときさらの細い指が重なった。その指は震えていた。

「ばかやろお」

ああ、もう、どうして俺はこう、いつも少しだけ遅いんだ。

あんなくそジジイ、死んでしまっても構わない。

今まで散々こき使われ、馬鹿にされ、拳句の果てに
ああもつ、めんどくせえ。

最悪だ。

こんな感情、最初からなければいいのに。

だから大切なモノを大切だと自覚するのは嫌だったのに。

「泣いてる」

きさらの指が、そつと左の頬に触れた。

泣いている。

そんな自覚はなかった。

「泣かないで」

隣の相棒も両手で顔を覆っていた。

霞色の瞳が潤み、頬を涙が伝った。

「それはこつちの台詞だ」

自分自身の血で赤く染まった左手が拭った頬には、赤く筋が残っ

た。それでも次々あふれてくる涙が、その血も滲ませていく。

地に伏した体を見ていられず、くるりと背を向けた。

肩を震わせたでこばちを、きさらを見て、俺は唇を噛んだ。

これが失って悲しいという感情なんだな。

胸の痛みを抱え、俺は決意する。

俺はもう泣かない。

お前たちが代わりに泣いてくれるのなら、俺はもう泣かない。

ところが、背後からふーっと煙を吐く音がした。

「やれやれ、このまま死んで土に還るつてのもいいが、焼かれて空
に昇る方が嬉しいんだが」

背後から声。

聞きなれたしゃがれ声だ。

「……は？」

自分からこれほど間抜けな声が出た事が、未だかつてあっただろ
うか。

振り返った俺をあざ笑うかのように、煙管を吹かすジジイの姿が

あつた。

「何呆けてんだ、青。そんなに死んでいて欲しかったのか？」

そして鼻腔をくすぐる、ほのかに甘い香り。

きさらと同じ香り。

先ほどまでの虚脱感は一瞬にして吹き飛び、全身の血が沸騰する。

「きさらの『緋珠^{ひしゅ}』かつ……！」

じゃあ、先ほどの戦闘は。

刀は。

ジジイに刃を向けた町奉行は。

怒りの方向が定まらず、隣でぽかんと口を開けるでこぼちの額を思い切りはたいてやる。

「いってー、何すんだよ、青ちゃん！」

それでも全くおさまらず、きさらを振り切って左手の刀を握り直し、ジジイに斬りかかった。

「死ね！ もつかい死ね！ くそジジイ！」

二度も同じ過ちを繰り返すなんて！

しかし、いきり立って斬りかかった俺が地面に伏せられるまで、ほんの数秒も持たなかった。

俺の上にのしかかった老人は、煙管の煙と共に皮肉を吐いた。

「こんな甘つちよろいヤツを放り出して死ねるか、阿呆」

ジジイの言葉に返せるはずもなく、今度はうれし涙を流すきさらとでこぼちを見上げることしかできなかった。

気が抜けたせいだろうか、全身の痛みが舞い戻ってきた。

ああそうだ。骨も折れているんだった。

早いところ自分の上に押し掛かるジジイをどかさないと……
安心したような、腹立たしいような。

そのまま気を失ってしまいたかったが、痛みはそうさせてくれそうにもなかった。

俺はこれからを思ってたため息をついた。

あの日から3日。

政府側の動きはまだない。

あの襲撃はいつたい何だったのか。

確実に刀で貫かれていたのを見た。が、あれがもし演技だったと言うなら、必ず相手の協力が必要な筈だ。ジジイが町奉行といたい何のつながりが。

でこばちときさらはジジイが無事に生きていただけで満足している。

ジジイは俺が何度問い詰めても決して吐かなかった。

相変わらず、分からないことだらけだ。

ああもう、苛々する。

目の前では相変わらず玖音がでこばちと竹千代の相手をしている。俺は相変わらずぼんやりと縁側に座ってそれを見ている。

これまでと何も変わらない。

あれだけの事があって、変わらない筈がないというのに。

ただ俺の右腕の付け根は、肩まで大きく固められていた。半月は絶対安静。きさらにそう言い渡されて。

きさらは裏で洗濯ものを干し終わったのか、大きな籠を抱えて戻ってきた。

「退屈そうだね、青ちゃん」

面倒なので返事をしないでいると、きさらは俺の隣に座った。

周囲に鳥の気配がないか見渡す癖がついたのは、ある意味仕方のないことかもしれない。

鳥の姿は見当たらなかった。が、ふと気配を感じて草むらを見やる。

鳥ではない。敵意もない。

一体なんだ……？

注視していると、草むらからがささ、と現れたのは、腹に包帯を巻いたキツネとタヌキだった。

きさらの姿を目にした瞬間、まっしぐらに彼女に飛びついて行った。

「見つけた！」

「見つけたあつ」

ふっさりとした尻尾をぶんぶんと嬉しそうに振りながら。

驚きながらも迎え入れ、きさらは飛び込んできたタヌキを膝に乗せた。キツネはきさらの後ろから肩に飛び乗る。

くすぐったそうにしながら、きさらはケモノたちを撫でた。

「元気そうだね。よかった」

「元気ちやうねん。こいつのせいで頭痛いねん。こいつ、俺の頭の後ろゴンって殴ったんや！」

隣に座っている俺の膝を尻尾でべしべしと叩きながら訴えるタヌキ。

「ごめんね、タンコブになってるね、と優しく撫でてやるきさら。確かに事実なのだが、非常に理不尽な気がするのは何故だろう。思わず喧嘩腰の口調になる。

「で、何しに來たんだ、お前ら」

タヌキはきさらに撫でて貰ってご満悦のまま、のんびり返答した。

「お前とあつちの黄色を呼んで来いって言われてん」

「俺たちはただの使いだ」

「誰が呼んでんだ？ お前らの頭か？」

それだったら絶対に行かないが。

「ちやうちやう。呼んでんのは、お奉行さまや」

「場所教えるからさっさと行け」

きさらの背中に張り付いたまま、しっし、とふさふさの尻尾を振るキツネ。

あの尻尾を引っ張って地面に引きずり降ろしてやりたい。

しかし、呼んでいるのがあの近松景元だという。危険な気はするが、知りたいことが多すぎるのも事実だ。

何か真実の欠片でも知ることができれば、俺の中の苛立ちが少し

は消えるかもしれない。

逡巡は一瞬、俺はでこばちを呼んだ。

近松景元が指定した場所は、花街の一角に在った。

指定された夜刻を待ち、足を踏み入れた花街の空気は嫌いではない。

鮮やかな色彩と高濃度の芥子の香りが充滿する場所を、何故かとても懐かしく思うから。

何処いづこともなく漂う芥子の香りは、心落ち着けてくれる。

明らかに花街と縁のなさそうな俺たちは嫌な顔一つされず、案内された何枚もの襖の向こう、甘い香りとしめやかな空気が満ちた絢爛なその部屋に、その男はいた。

「来たな、悪童ども」

そこに待っていたのは、つい数日前に死闘を繰り広げたばかりの男の姿だった。

朋香の姿はなく、しかし代わりに幾人もの華やかな女性を取り巻いていた。

「何の用だ」

機嫌悪くそう言うと、町奉行は侍らせていた女たちをすべて部屋の外へ追い出した。

最初から追い出しておけよ、とうい俺の心の声は届かない。たとえ届いたとしても、この町奉行は気にもかけないだろう。

町奉行は、場所に似合わぬ密談でもするように、声を潜めた。

「呼んだのは他でもねえ。お前たちに頼みがあつての事だ」

「頼み？ 町奉行のお前から盗賊の俺たちに？」

「お前たちはこれから盗賊じゃなくなるんだよ」

俺が眉を寄せると、町奉行は一瞬だけ真剣な顔に戻った。

「お前たちには、賽ノ地を守る為、隠密として江戸に出向いて欲しい」

すぐには意味が理解できなかった。

しかし、これまでに起きた様々な事を思い出し、一つ一つを解釈していく。

ああ、そうか。そういうことか。

ジジイも知っていたのか。

わざわざ目立つように現れたのも、演武と言ったのも、俺たちの力に合わせて戦ったのも、最後にやられたふりをしたのも。

だからあの時

「……今回のこれは、ただ中央政府を欺く為だけの芝居かつ」

思わず絞り出すようにして呟いていた。

返答の代わりに返された笑みが肯定の証拠だ。

こいつと烏組が草庵へと現れた時、この上ない最悪だと思った。

だが、あれはどん底ではなかったようだ。

「全く、気に入らねえ。お前はすべて知っていて、俺たちを狙ったな？」

奇妙斎と名乗るあのジジイが昔、『鬼』と呼ばれた手練であったことも、お耳として政府に仕えていた事も、今も政府とのつながりを断つていなかったことも。

すべては、俺たちを『こう』するため。

首を傾げた隣の相棒がどこまで理解したかは甚だ疑問だが、なんとなく騙されていたような気がする、ということだけは理解したようだ。

そして、敵対していた筈の目の前の男が敵ではないということも。政府から俺たちに、賽ノ地町奉行所を警戒するための隠密になれというお達しが来る事を予見していたのだろう。だから、わざと俺たちとの敵対関係を作り、分かりやすく表面的な対立を打ち出した。俺たちが賽ノ地と対立し、中央政府の為に働くだろうことを印象付けるため。

「お前たちを欲するのは何も中央政府だけじゃねえんだよ。この混乱の時代だ、使える手駒は多い方がいいだろう？」

「俺たちを使う気か？」

「当たり前だ。だってお前たちは、俺の味方だろう？」

にい、と笑った町奉行の言葉に、反論を持たない。

羅刹城がこの地に誘致されれば、賽ノ地に住む人々がすべて危険にさらされる。もちろん、きさらもその外ではない。

この町奉行は俺たちがそれを望まぬ事などお見通しだ。

俺たちの望まぬことと、この町奉行が望まぬことは、図らずも同じ結果を求めた。

それは、賽ノ地への羅刹城誘致を撤回させることだ。

自分が汚れ役を買って出ても駒を一つずつ手に入れ、目的へ向かう。

この男の信念は、やはり強い。

勝てない。

どうしても、この男には勝てない。

悔し紛れにぼそりと呟いた。

「……下種野郎」

「その台詞は、お前さんみたいな青くさい少年に言われても嬉しかねえんだよ。ほら、きさらちゃん呼んでこいよ、きさらちゃん」

「ふざけんな」

こいつは中央政府の内情を探る為に俺たちを送り出す気だ 中
中央政府直属の隠密という名で。

その実、俺たちは賽ノ地に羅刹城が誘致されることを防ぐよう働く。

つまりは、二重間者。

めんどくせえ。

いったいどこからどこまでが偶然で、どこからどこまでがこいつの計算だったんだ？ 烏組は？ 江戸から俺を迎えに来たという浅

葱鷺之丞は？

何処から何処までが味方で、何処からが欺くべき敵なんだ？

一連の出来事を思い出そうとしたが、そんな事を考えたところで

現在の状況が変わるはずもない。思い出すだけ無駄だからやめた。

「話はそこまでだ。俺からの連絡は……まあいい、そのうち適当にやるから今日はここまでだ」

俺たちが肯定も否定もしないうちから、町奉行の中では勝手に決着がついたようだ。

無論、俺たちに断るという選択肢はない。

俺たちがここで首を横に振れば、町奉行所の指令で動く玖音や、草庵で暮らすきさらと竹千代にどんな負担が降りかかるか知れない。体のいい人質だった。

「死に腐れ」

捨て台詞を残し、その場を後にする。

また来いよ、という冗談まがいの言葉にさらに苛立ちを覚えたが、振り返る事はしなかった。

草庵への帰り道、俺はでこばちにも分かるように噛み砕いて今の状況を説明してやった。

半年前に和平が成立したところから順を追って。

難しい話だったと思うが、眉を寄せながらも相棒は真剣に聞いていた。

羅刹族との和平条約で、賽ノ地に羅刹城が誘致されることが決定したこと。そのため、俺たちのような盗賊が狩りだされたこと。

これから羅刹がこの地に多く下りてくるだろうということ。

羅刹の恐ろしさを知っている相棒は、眉を八の字にして俺の言葉を受け止めた。

そして、先ほどの町奉行がこの地を羅刹から守ろうとしている事を説明してから、聞いた。

「でこばち、お前は どうする？ あの町奉行に従ってこの地を羅刹の手から守る為に働くか、それとも玖音もきさらも竹千代もジジイもみんな連れてこの地を去るか」

選択肢は二つだった。

今ならまだ、逃げる事が出来る。何の柵しがらみもなく、ただの盗賊でいる為に。

「青ちゃんは、どうするの？」

「……俺は江戸に行くと思う」

逆に問われたが即答し、俺は自分が思うよりずっと意思を固めていたことを自分で知った。

何かの為に働く、なんて以前の俺なら面倒臭いの一言で済ませていただろう。

でも今は違った。

大切なモノを自分の手で守ると誓っていたから。

「きさらたちは賽ノ地から出たりしないだろうからな、めんどくせえけど連れて逃げるよりここを守った方が楽だ」

「じゃあ俺も江戸に行くよ」

にこりと笑って見上げてきた相棒に、俺は笑い返した。

大丈夫だ。

こいつと一緒になら、大丈夫。

その足で相棒と二人、大きな道場の扉を叩いた。

迎えてくれたのは最初と同じ、黒髪の少年だ。もう夜も遅い、眠そうに瞼をこすりながらも今度は訝しげな態度などなく、軽く微笑んで俺たちを迎え入れてくれた。

「青殿、耶八殿。父上がお待ちです」

通された道場で黙想していた浅葱鷺之丞あさぎさぎのじょうはその目を開き、俺たちを振りかえった。

「ご決断なされましたか」

「ああ」

俺たちの雰囲気だけで返答を察したのだろう。

江戸から俺たちを迎えに来た鬚の武士は、笑った。

「江戸までは陸路で5日はかかります。いろいろと身支度も御座い
ましよう。出発は3日後ということで宜しいかな」

「勝手にしてくれ」

ぞんざいな返答にも文句ひとつなかった。

どうして申し出を受ける気になったのか、聞く気もないようだ。

もつとも、聞かれたところで口クな返答をしてやるつもりもない
が。

花街から道場へ寄り道、子の刻を過ぎて草庵についた俺たちを、
きさらが出迎えてくれた。

竹千代を起こさぬよう、小さな声で。

「おかえり、青ちゃん」

それでも、迎えてくれた笑顔にほっとする自分がいた。

おわり

翌朝、きさらはでこぱちと竹千代におつかいを申しつけた。

引率に玖音をつけて。

買ってきてね、と頼んだ品が、どう考えても遠出用の品なのは、何かの嫌味だろうか　きさらはすでに、なにもかも知っている気がする。

3人の姿を見おくつたきさらは、俺の方に向き直って言った。

「……青ちゃん、話があるの」

「俺はねえよ」

逃げようとする俺の上着の裾を捕まえ、きさらは縁側へと戻った。仕方がない。

俺は観念してきさらの横に座った。

「朋香さんに聞いたよ。青ちゃんたちは、江戸に行くの？」

「ああ」

もう隠すこともないだろう。

はつきりと答えた俺に、きさらは微笑んだ。

やっと答えてくれたね、と。

「……どこまで聞いた？」

「私が聞いたのはそれだけ。朋香さんは、あとは本人に聞きなさいって」

あのあやかしは、俺たちに猶予を与えたのだろうか。

それとも、俺のようにきさらに争いを告げる事を躊躇したのだろうか。

「お前がどこまで知ってるか分からないが……羅刹と和平が結ばれたろう。それで、なんか賽ノ地全体がごたごたするらしいから、町奉行が手伝えって言った。その手始めに江戸へ行って来いって言われたから行くだけだ」

「羅刹のお城がこの場所に造られるからだよね」

「ああ、そうだ」

きさらは視線を落とした。

「じゃあ景元様は、もう青ちゃんたちを狙ったりしないの？」

「あれは、俺と賽ノ地町奉行所が対立していると中央政府に思わせる為の芝居だ。俺たちは表向き、賽ノ地を見張る隠密として江戸政府に雇われるんだ」

さらりと告げた言葉に、きさらは息を呑んだ。

それはつまり、中央政府を完全に敵に回すことと同義だからだ。

「どうしてそんな大事なことを、教えてくれなかったの？」

ああもう、めんどくせえ。

「俺も昨日になって知ったからだ。ジジイのやつ、町奉行と結託してやがった癖に何も言わねえし、羅刹の一件も下手したらあいつらが仕組んだことだ。烏組がどうかはしらねえが、緋狐と狸休の様子からみたら知ってるんだろうな。全部嵌められた。ったく……」

珍しい長い台詞を聞き終えて、きさらはくすくすと笑った。

「めんどくせえって言わないんだね」

「言わねえだけで思ってる」

ため息をついて答えた。

「でもまた、争うんだね」

ぼつりと言ったきさらはほんの少し寂しそうな顔をしていた。

「羅刹のヒトたちは怖かったけど、本当はもつと仲良くなれるはずだよ。きつと將軍様もそう思っただけで平和を結んだに決まってる」

「お前、自分が殺されそうになったこと忘れてないか？」

「忘れてないよ。すごくこわかったことも、青ちゃんと八ちに大怪我させたのが羅刹だったことも分かってる。でも」

きさらはそこで言葉を切った。

何か言おうとして、やめたようだった。

「大丈夫だよ」

それでも、きさらは微笑う。

「いつか、来るよ。竹千代ちゃんも、羅刹族も、朋香さんも緋狐くんも狸休くんも。みんなが一緒に、争わずに暮らせる日は来るよ」
かすみいろ
霞色の瞳に、迷いはなかった。

優しく強いその光は眩しい。相棒と同じ、俺が求めた暖かな太陽の光だ。

「お前はすごいな、きさら」

俺はきさらのようにには信じられないから。

いつかくる、なんてそんなの待ってももられない。

ただ目の前の大切なモノを守ろうと決心するだけで精一杯なのだ。だから、お前は知らなくていい。

知らなくてよかった事なんて一度もない、と叫んでいたが、知らせる方にだって事情はあるんだ。

どうしても、知られたくないことだってあるんだ。

たとえば、俺が江戸へ向かうのがお前の為だって事なんかも。

倒れ込むようにしてきさらの膝の上を占領した。

「どうしたの、青ちゃん？」

ふわりと優しい手が頭を撫でてくれる。

「頼む、このまま……」

甘い香りがする。

芥子とは少し違う花の匂い。

それでもその香りは、俺の中の焦燥を残らず奪っていった。

この場所なら、澱の囁く声は届かない。

「きさら……お前、いい匂いするな」

「そう？ 紅花の匂いかな？」

「ん、すごく落ち着く」

今日の昼寝の場所はここにしよう。

きつとすぐ、やかましい相棒がやかましい忍の少女とやかましい鬼の子を連れて帰ってくるはずだが。

それまではこの穏やかな時間を堪能しても赦されるだろうか。

「青ちゃんっ」

耳元で大音量の目覚まし。

きさらの膝でうつらうつらと惰眠をむさぼっていた俺は、案の定だと思いつつ薄く目を開いて声の主を見た。

くすくすときさらの笑い声が聞こえた。

めんどくせえ。

見慣れた顔が見えたので、そのまま瞼を落とす。

どうやらそれが不満だったようで、再び大音量。

「あーおーちゃん！」

ああもう、これ以上放置する方がめんどくせえ。

「何だよ」

ゆるりとした動作で頭をあげ、半分目を開ける。

俺を起こしたのは、どうせ驚くほどくだらない理由に違いない。

うるさいから向こうへ行け、という言外の感情は伝わらない。

広いでこに皺を寄せ、むっとした表情の相棒は、不平不満をまき散らし始める。

「あのさー、あのさー、竹千代がさー、おやつに取っというたおれの芋、食べちゃったんだ！」

ああもう、極限にめんどくせえ。

案の定、心の底からどうでもいいことだった。

楽しそうに笑うきさらが、またふかしてあげるから、となだめていた。

置いてかないでよね、と不満をもらしながらも竹千代を連れた玖音が向こうから駆けてくる。

驚くほど平和だな。

「どうでえ、青」

縁側に続く部屋からジジイの声。

「大切なモンがあるってのも、悪くねえだろ？」

煙管を咥えた口に笑みを湛えながら。

俺はため息をひとつ。

「そうスね」

世の中すべてに興味のなかった自分。

そんな自分が、初めて自ら選んで、努力して、手に入れたものだから。

手に入れば、失う。

それは当たり前だ。

それでも俺は生きていくと決めた。

この救いのない世界で、大切なものを手にして、護っていくと決めた。

だからきつと、俺はこれからも「それ」を恐れ続ける。

その恐怖は、生きている限りにおいて消えはしないだろう。

それでも、俺は

旅立ちは、日差しに夏が混じってきた朝だった。

梅雨入り前のあの日、盗賊狩りの女が俺に喧嘩を吹っ掛けてきたところから始まった物語は、ここでいったん幕を下ろす。

酷く長い雨の季節、俺は様々な感情を経験した。

絶望もした。

諦める事もした。

怖くてこの場所を逃げ出した。

でも、最後には此処へ戻ってきた。

だからきつと、俺はまた戻ってくる。

お見送りする、と言って聞かない竹千代ときさら、そして玖音を引き連れて道場への道を往く時、あの女が正面から歩いてきた。

輪を作る花緑青。先日 of 怪我が完治していないのだろう、袖から覗く腕には痛々しく、幾重にも布が巻かれていた。

町奉行からなにかきいているのか、喧嘩を売ってくるようなマネはしなかった。

それでも、相変わらず真っ直ぐに前を向き、挑むような視線で俺たちに向かつて真っ直ぐ歩いてきた。

「……影元様の命を受けたらしいな」

すれ違いざま、囁く。

「お前には関係ない」

返すと、ふんと鼻で笑われた。

挑発的な翡翠色の瞳が見上げていた。

「精々江戸でもがくがいい。この地を失いたくなくば」

去っていく毅然とした後ろ姿を見送り、俺は再び歩き出した。

俺たちが江戸へ行くのはあの町奉行の為なんかじゃない。まして、賽ノ地全体の為だなんて死んでも言わない。

でも

いつの間にか、きさらと竹千代の足元を転がるように二匹のケモノが駆けまわっていた。

団子屋の前を通れば、やかましい岡っ引きがでこばちを呼ぶ。

いつの間に俺たちは、この地へ根を下ろしたのだろう。

ずっと根無し草だった俺たちは、何故かこの地の為に江戸へ向かうとしていた。

不思議と不快ではなかった。

面倒は否めないが、その面倒さですべてを捨て去る気にもなれなかった。

道場の前では、立待が大きく手を振っていた。

「行つてらっしゃい、青ちゃん。ハチも、気をつけてね」

「うん、すぐに戻るよ!」

大きく手を振るでこばち。

俺たちを先導するのは浅葱鷺之丞あさぎさぎのじょうと立待、そして居待。

先達になると言つた居待はきつと、中央政府お抱えの隠密だ。要するに、俺たちの先輩にあたるというわけだ。

躑躅色つじいろの着物を翻す少女の後ろ姿を見て、これからを思いため息をついた。

「青殿、耶八殿。出発いたしましたしょう」

居待の親父が号令をかけて、立待と居待がそれに続く。

そして俺たちも手を振るきさらたちに背を向けた。

俺たちは、江戸へ向かつて一歩、踏み出した。

きつといつか、辛い別れが来るだろう。

大切なモノを失つて、悲しむ日が来るだろう。

それでもその時は、俺の目を持っていったお前が泣いてくれ。
俺の傷を塞いでくれたお前が泣いてくれ。

きつともう俺は、泣かないから。

おしまい

最後までお読みいただき、ありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0713q/>

賽ノ地青嵐抄

2011年6月19日11時40分発行